
Legend of Girl ~ 少女の伝説 ~

玖龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Legend of Girl ～少女の伝説～

【Nコード】

N3520Q

【作者名】

玖龍

【あらすじ】

砂漠のど真ん中にあるダン格拉ジェ王国。

そこに今も語り継がれる伝説的女王は、即位した当時は8歳の少女だった！

とか言いつつ、最近成長しました（おい）14歳の女王が登場しました

でも性格は基本変わっていません。みなさん健在です（笑）

新キャラも続々登場させる予定です（予定）

『ファンタジー』という分類にしましたが、今になってやっと
そんな要素が1つもないことに気が付きました（笑）女王とその周
囲にいる人物とのドタバタ劇です……

登場人物紹介

登場人物

アシュリーナ・カレン

ダングラジェ王国の13代目にして王国初の女王

300年前の人物だが、今でも語り継がれるほどの傑物

性格は、子供らしくお転婆で、小生意気だが、女王としての尊厳・威厳は持ち合わせている

アンドレア・カリム

アシュリーナの側近。勇猛な將軍として活躍。金軍の將軍

小賢しいアシュリーナに手を焼いている

年齢は王の即位当時は28歳だった

性格は正義感が強く、仁を重んじる
人望も厚い

タルカシ・ヘリナ

女官。アシュリーナの乳母

幼い彼女を心配する心優しい人物

ヨシユア・カズル

アンドレアと同じく、將軍。青軍の將軍。

長い黒髪に、黒瞳。

冷静沈着で、自ら言葉を発することは、必要最低限のことに限る
しかし武力はアンドレアには劣らない

カイル・カズル

ヨシユアの双子の弟。兄と同様に將軍。赤軍の將軍

兄とは違い、陽気で、明るい性格で人を引き付ける
外見は兄と同じ……ただし本人曰く目が違う（兄↓細い、弟↓大
きい）

しかし、たいして変わらない

その他、副官・武官・大臣（要するに王宮内の人物）、
敵キャラなどその他大勢

この物語は、300年前を舞台にして書きます

大臣よ、会議で寝ることなかれ

女王アシュリーナは大あくびをした。

女王である私を無視して話を進めていく大臣たち。この私をないがしろにする気が、このバカどもめ！！8歳だからってバカにすんなよ！！

……出番がなくて退屈で退屈で仕方がない。

（寝るか）

ふとぐるりと円卓を見回すとあるものが目に入った。寝ている大臣が1人、2人、3人……っておい！3分の1が我慢している私を差し置いて寝ているではないか！！私だって眠いんだぞこんにやるおー（怒）

アシュリーナはさつと立ち上がる。すると今まで喋っていた（……いや、自慢かな？）していた大臣が黙った。顔が心なしか青い。なに、そんなに怯えることないじゃないか。それともやましいことでも喋ってたのかな？まあそれは置いといて……。

「その大臣！寝るな！！起きんか！」

睡眠中の大臣たちを一喝する。すると大臣たちが「はっ！」という感じで突然頭を上げ、「いや私は今までちゃんと会議に参加していたけど何か？」みたいな顔でアシュリーナを見つめる。よしよし、それで良い……ん！？まだ寝ている奴が1人。おいおい、いつまで寝てんだよ……気持ちよさそうによ……。

ここで許してやる……そんな生ぬるい慈悲など掛けてやらないのがアシュリーナである。

隣に座っているアンドレアをつつく。

「あいつ誰？」

「はっ……外交のナフス大臣であります」
「ふん。あいつが……か」

彼女は側に置いてあった棒を手に取り、つかつかとナフス大臣の後ろへ歩み寄る。そして彼女の持てる限りの力を持って背中を叩いた。部屋に「バシンっ！」と痛そうな音が響き、アンドレアが大きなため息をついた。

「痛っ！！誰だ、ワシを叩いたのは！！」

「私ですが何か？（ニコツと微笑む）」

「……へ、陛下！！」

「ナフス大臣、お疲れですの？仕事……大変そうですね」

8歳の少女らしく可愛いかつ慈悲深そうに言う。心の中には敵意しか無いのだが……。

「い、いえ。全然ですとも！……はい、大丈夫です」

「無理をなさらないで。……今は大事な時期ですもんね」

「は、はい。隣国の動きが怪しくなっているから、諜間を出して探らせておりますが……」

「いえ。そのことでは無くて」

「へ？」

アシュリーナの顔が意地悪そうに微笑む。

「確か、最近第2夫人を迎えられたとか。奥様の機嫌を取らなければならぬのでしょうか？大変ですね。そうしないと関係の悪化に繋がるから……。どうしてその女は夫の職の理解が出来ていないのでしょうか？夫は外交顧問のナフス大臣であるというのに……ね」

ニタニタした顔で彼を見下ろす。当のナフスは啞然として女王を見上げる。他の大臣たちも顔が真っ青だ。アンドレアにおいてはもう顔を背けてブツブツ言っている。

「あまり寝ていないのでしょうか？でも安心して！今日はぐっすり眠れるようにしてあげるから……フフ」

アシュリーナは言葉もないナフサ大臣を嘲笑い、席に戻った。

「皆さん。ぐっすり眠たかったら、遠慮しないで私に言ってね」

（笑）」

そう言って彼女は部屋を後にした。

「アシュリーナ様！！何て事を！！」

会議から戻ったアンドレアが顔面蒼白でアシュリーナの元へやって来る。それを見た、乳母のタルカシもやって来る。

「あの様な場で何て事を！」

アシュリーナはうざったそうにアンドレアを見つめる。タルカシは状況が分からずただオロオロとしている。

「何があつたのです、アンドレア將軍？アシュリーナ様が何か致しましたか？」

「何もしてはいないわよ。……ナフサ大臣を叩き起こしたけど……」

「何ですって！！」

何ですって、じゃないわよ。バカ大臣が会議中に寝ていることが何ですってだし。アイツの頭の中は 会議＜第2夫人との新婚生活か？＞そうなら私は 会議＜部下いじり だってんだよ……＞ていうか第1夫人どこ行つた？

「アシュリーナ様。何故そのようなことを？」

タルカシが泣きそうな顔で訊いてくる。

「何故って私だって退屈なのにあんな、第2夫人との時間の方が大事なバカみたいな大臣をどうして起こしたらいけないのよ！ただ

のお仕置きよw今日は私がこれ以上ないぐらい寝させてあげるのよ！！とても親切じゃない！」

彼女は絶句していた。無理もないだろう……女王といえど、8歳の少女が大臣のことをバカ呼ばわりするだけでなく、叩き起こしたことを「親切」だなんて……。

「もう少し自重していただけないでしょうか？」
何をだよ……。

「ああーもう良いわ。じゃあね。私は昼寝してくるわ」

「アシュリーナ様！！」

アシュリーナはダツシュで逃げて行つた。

その日の夜、ナフス大臣の部屋からは悲鳴が聞こえたという。それを聞いた大臣たちは会議中に寝ないことを心の中で強く誓った。

大臣よ、会議で寝ることなかれ（後書き）

うーん、長いな（汗）

ナフス大臣、生きてますから安心してくださいw

女王陛下の勅令でないのに、大臣たちは誓っています……ナフス大臣の二の舞を踏まないことを……

犬の怪（前書き）

アシユリーナ様は実はあるものが嫌いなんです……

大臣なんかより、とても可愛いものが……

それではどうぞ～

犬の怪

「なんだコイツ……」

太陽は今日も嫌というほど元気に活動し（ていうか暑いんだよ！
静まれや！！）、王国の首都：ザリスのチビツ子どもにうるさくない奴なんていない、というぐらい街中を走り回っている。街に活気が満ちている……。

しかし、アシュリーナは可愛らしい顔を大きくしかめていた。

「いやぁ……なんだと訊かれましても……」

おずおずと神官が答える。彼らの目の前にあるものは……フサフサの毛にピンとたった耳、スマートな顔。そして特徴的なしっぽ。つまり……

「犬、です」

「そんなこと言われんでも分かる！3歳のガキでも分かるわ！！私が訊いているのはそんな事ではない！！何故この日に限ってコイツが私の目の前に現れるのだ！！」

こんな日……今日は 太陽祭 という国を挙げての祭りの日。国民全員で恵みをもたらす太陽に感謝し、供物を捧げ1日中踊り、歌いこの日を楽しむのだ。最も、アシュリーナはうだるように暑い炎天下のなか感謝の気持ちなど持ち合わせてはいないのだが……。どちらかというと「もうちょっと雲頑張りなさいよ！！毎日晴れじゃ、嫌になっちゃう」と思っているのだが。それはともかく、国の休日なので政務もしなくて良し。そこにおいては感謝している。

「ううゝ、犬なんか」

彼女が犬を嫌っている……いや、『動物』と総称される生き物が嫌いなのだ。ただし例外として、馬と鷹など、戦に使用される動物がある。幼いころから慣れ親しんできた動物であり、かつこいかららしい。

「おいアンドレア。槍持て」

「はっ……って、はぁー！？何故です！？」

「勿論決まっているであろう。こんな（自分が休める）最高の日に、王である私が大っ嫌いな犬に会わなければならないのだっ！！」

「いや……だからと言って……殺す、となると」

「やかましい！！どうせ太陽に動物を捧げるのだ！ここでこんな犬など殺してもいいでしょう！！」

こうなると誰も逆らえない。根っからの動物嫌いの女王様だ。本当に殺さないと気が済まないらしい。

アンドレアは犬に、アシュリーナの非礼を謝りながら、渋々槍を手渡した。

アシュリーナは大きく槍を振りかぶる。下ろそうとした瞬間！

「くぅん」

犬が命乞いをするかのように、キラキラの目でアシュリーナを見上げていた。

「う、うわぁー！！」

焦ったアシュリーナが手を滑らせ、槍を落としてしまった。やってしまった……誰もがそう思ったとき

「キャンキャン」

犬の鳴き声が！

よく見ると、槍は犬の胴体スレスレの所に落ちていた。そして槍の柄の側に青くなって立っているアシュリーナの姿が……。

さすがに犬も驚いたのか、キャンキャン吠えている。このまま立

ち去ってくれるとありがたいのだが……。

「……お、驚いたか。こ、このまま……ど、どこかに行ってくれえ」

アシュリーナが喘ぎながら、本当に向こうの方を指さす。同じことを思っているんだな……

犬は彼女が指さした方向をしばらくの間見つめていた。が、何を思ったか、アシュリーナの方向へ歩みより、彼女の足に顔を押し付け始めたのだ！

「……！！」

アシュリーナはそのまま後退する。しかし犬もついてくる。

「い、嫌だ！！来るな！誰か……助けなさいよお！……助けて！来ないでえ」

彼女は全速力で駆け出した。一方で犬は追いかけること思ったのか、こちらも全速力で追いかけ始めた。

「アンドレア！！ヨシユア！！カイル！！……誰でもいいから追いついてえ」

3将軍は互いに顔を見合わせた。神官たちもクスクス笑っている。

「女王陛下は犬に懷かれておる」

嫌だ！ついてくんな！！……ってどうして誰も助けしてくれないのよ！！……もういいわ。職務怠慢で、減俸処分にしてやる！大臣も、神官も笑ってる……（怒）格下げするぞ、コラっ！

犬も犬でどうして追いかけてくるのよ！！あんななんてこの国から出て行ったらいいのよ！犬を飼ってくれる人いるんじゃないの！？エジプトには犬の神様がいらしいわ！！そこに行つてきなさいよ！！

そこにやれやれ顔の、ヨシユア将軍がやってきて、犬をひよいと

捕まえる。

「陛下。犬ごときで何を騒いでおられるのですか」

「ヨ、ヨシユア將軍！よくやったわ！！……そうだ！犬！殺すのは勘弁してやるから、外国へ行くのだ！！分かったか！！……その通りだ、將軍。部下に命じて、そいつを外国へ捨ててこい！！」

はあく、と息を吐いて、わかりました、と言い彼は戻って行った。

「アシュリーナ様。気分は落ち着かれましたか？」

太陽祭の儀式が終了し、宴の頃優しくタルカシが尋ねてきた。

「うん」

「それは良かった。私は心配で心配で……」

その時、何かが起こった。

「ワンワン！」

……犬の鳴き声だ……しかも朝の。

「ひいひい！！ヨ、ヨシユア！！ちゃんと捨てて来なかったの！？」

「いや、そんなはずは……」

「で、でもほら！アレが……」

全てを言い終わる前に犬がアシュリーナの膝に乗ってきた。

「キャアー！！」

アシュリーナの叫び声。女王の身に何か？と人が集まる。

「い、犬……！！」

タルカシは問題の犬を見た。……足には砂がたくさん付いている。怪我もしている。

「アシュリーナ様、これをご覧ください」

そして彼女はそつと犬を持ち上げた。

「お分かりになりますか？この犬はあなた様に会うためにここまで走って来たのでございます」

「……捨てられた所から……？」

「おそらく。……この犬はあなた様を慕っているのです」

「……えっ、でもあんな事したのに……」

「そうでしょう。さあ」

そう言つて犬を差し出す。犬はしつぽを振つていた。

「……そうね。私は犬が嫌いだが、お前だけは特別に側に置いてやる！名は……ダルーシャにしよう！！意味は、《大地を駆ける者》だ！！お前は私の元へ走つてきた。忠誠を尽くせよ！」

「ワン……」

アシユリーナはダルーシャを抱きしめてやった。

「一足先に誕生日のお祝いが天から届きましたね」

「ええ……つてええー！？もうそんな頃！？」

また盛大に顔をしかめる。そしてどこか寂しい目をした。……思い出したのだろう、8歳の誕生日を。

「戴冠記念日と、誕生祭が間近に控えています」

「そうね……」

彼女は上の空だった。

そしてダルーシャをもう1度、強く抱きしめた。

犬の怪（後書き）

『犬の怪』……結構頑張りました

女王様の好きな動物リストにも、ダルーシャは追加されたことですよー！！

それにしても、最後のシーン。彼女の8歳の誕生日にはある悲劇が起きていたのです。

それはいずれ書くことにします

誕生の宴、そして女使者 〈前編〉（前書き）

今日はアシュリーナの誕生日です
御年9歳です！！

諸外国の使節がぞくぞくやってきます
……プレゼント付きで（笑）

誕生の宴、そして女使者 〈前編〉

「ダングラジェ王、お誕生日おめでとうございます」

恭しく、使節たちは頭を下げる。

「ええ。ありがとうございます」

そういつも通り9歳の少女らしく可愛らしい声で答える。……心の中では、おじさんたちに「なんで9歳のガキに頭下げなければいけないのかよっ!!」って思ってるんでしょ、と思っっているんだが……。

一国ずつ、お祝いの品……まあ自国の特産物を献上し出す。それぞれ最高級の品を携えているらしい。なんせ、アシュリーナが9歳であれど一国の王に変わらず、ここで彼女に見初められれば貿易国として……あるいは同盟国として条約を結べるかもしれないからだ。とにかくダングラジェ王国はこの辺一帯で最大の国なのだ。

「こちらは、海で取れた美しい真珠です。我が国でも珍しい色、大きさに陛下によくお似合いだとお見受けします」

「こちらは我が国に自生する、バラの花から作った香水にございます」

……真珠はともかく、香水なんて使わねーよ（呆）

「陛下、お誕生日おめでとうございます……。どうぞこちらを……」

珍しく女性の使者だった。彼女が献上するものは……美しく、しかしシンプルに装飾された一本の白い剣だった。丁度9歳になったことだし、護身のために剣術でも習うか、と思っっていたところだ。

アンタ、気が利くな。

しかし、アシュリーナはその使者の顔を見て、ゾクツ、とした。端正に整った顔、透けるほど白い顔、薄い唇……そして凍り付くような碧い目……。どこかで見たことがある。たった1度だけでちらとしか見ていないような気がするが、確かにどこかで見たはずだが……

「……陛下……？」

「あ、ああ失礼致しました。どうもありがとうございます。丁度剣が欲しかったところなんです」

「それはそれは良かった。剣は少しでも使えると役に立ちますから」

「え、ええ」

今までに品を献上した国の使者たちがザワザワとなる。なんか怪しい雰囲気だからだ。

「あの者はどこの国の使者だ！？」

「あの服装にあの顔……北のムスリでは！？」

「すると女王はムスリと同盟を……？」

おいおいお前らそれしか考えること無いんかよ……。

「では」

「ええ、どうぞごゆるりと」

使者は立ち上がり、礼をした。……丁度、アシュリーナの耳元に口がくるように……

「いつか私を越えるぐらいの腕前になってよ」

ぼそつと言われたが、確実に聞こえた……。なんなんだ、あいつは……

「あ、あの……」

声を掛けようとしたが、彼女は微笑んでその場を後にした。

その後の使者の話など全部聞き流してやった。いきなり訊いてもいないのに、持ってきた品の説明、自国の自慢、ひどい奴は同盟を促すような話をしてきた。

アシユリーナはそれどころではなかったのだ。先ほどの女使者の最後の言葉、

いつか私を越えるぐらいの腕前になってよ
それが頭の中でグルグル回っている。

（どういう事……？私を越える……？）

終始それに気を取られうわの空で、いつの間にか娯楽の時間……宴の2分の1が終わっていた。

「アシユリーナ様。どうぞ」

さすがに彼女は酒は飲めないので、代わりにジュースを侍女は持ってきた。

「うん。ありがとう……おいしいわ、どうしたのよ、これ」

「あの方が宴が始まる前にくださいましたわ」

侍女の指さす方向には……他の国の使者と打ち解けあつ、あの女使者の姿があつた。

「……え、ホント……？」

「ええ、何でもムスリの特産品であるクラという果物から作られたらしいですよ。甘くておいしいから、女王の口にも合うだろうって」

アシユリーナは顔面が真っ青になってしまった。

そして、彼女と目が合った。……薄い唇の端が微かに持ち上がったような気がした。

誕生の宴、そして女使者 〈前編〉（後書き）

《後編》に続きます

お楽しみに！

誕生の宴、そして女使者へ後編（前書き）

宴もとうとう後半へ……

あの使者の真意とは！？

誕生の宴、そして女使者へ後編

アシュリーナは彼女から目を離さなかった。いや、離せなかった。あの凍りつくような、濃く深い碧い目……何もかもを見透かされているような気がした。本能的に離そうとしても離れなかった。離したら嫌なことが起こりそう……そんな不吉な予感が9歳を向かえたばかりの彼女の頭を駆け抜けて行った。

「……アシュリーナ様……？」

侍女の声で我に返った。

「まあ、汗びっしょりですわ。どうかなさいましたか？」

「いえ、何でもないので……。ちよつと気分が悪くなっただけ……

でも、もう大丈夫よ。あ、アンドレアを呼んでちょうだい」

「本当に大丈夫ですか？アシュリーナ様はまだ幼くていらっしやるから、無理しなくてもいいんですよ？」

「うん、大丈夫だから……しんどかったら声掛けるわ」

「かしこまりました」

そう言って彼女は天幕から出て行った。

そしてあの使者の顔をちらつと見る……もうすでに他国との使者との話に花を咲かせていた。何事も無かったかのように……。

先ほどの5秒間は実に長いものだった。5秒など大したことは無いのだが、すごく長く感じた。彼女の目を見ていると、蛇に睨まれた蛙の気持ちがよくわかった。

「アシュリーナ様呼びですか？」

丁度アンドレアがやって来た。

「ええ、あなたに頼み事があるの」

「頼み事……ですか」

「そう。あのムスリ使者の素性を調べてちょうだい」

「何故にですか」

「あの方をどこかで見た気がする……とても嫌な予感がするの」

「さようですか。では部下を使ってさっそく調べてみましょう」

アンドレアは足早に出て行き、入り口に控えていた部下へその旨を伝えた。これであれが何者なのかわかるだろう。

今の時間、歌女が、楽士の楽器に合わせて祝いの歌……要するに眠たい歌を歌い、真ん中で踊り子が舞いを踊っていた。くるくるターンする。見ているだけで目が回りそう……。それでも彼女達は笑顔を消さずに楽しそうに伸びやかに踊っている。……退屈だな……寝ちゃおうかなw

そう思っであくびをしていると、あのムスリの一団がアシュリーナの前へやって来た。

「陛下。私たちは是非、貴女様に見せたいものがあります。……」

我が国の 剣の舞 です」

「剣の……舞？」

「ええ。我が国はお祝いの日には、 剣の舞 を踊るのです。そのための踊り子もいるのですよ」

「へえ……って……じゃなくて、ということは皆さんは……その踊り子……?」

「そうです」

「じ、じゃあ見せてもらおうかな」

「ありがたき光栄」

そう言っ彼女達は羽織を脱いだ。その下からアラビアンパンツとトップス……それぞれ宝石の飾りをあしらっていた。そして豪奢

な剣を一人一人手に持った。

自然に踊り子たちが引いて、彼女達が前へ出る。よく見ると頭にも同様の飾りがあつた。

会場がシーンとなる。

「では」

そう言つと、何の合図も無しに踊り始めた……一人一人が無駄のない動き、そして息を合わせた圧巻の踊り。

真ん中の2人が剣と剣をぶつかり合わせ、その度に「カシャーン、カシャーン」と、金属特有の音が鳴り響く。その周りで5人が彼女達を取り囲むように剣を持って踊る。動く度に飾りが上下に揺れ動く。光が反射してすごく綺麗だ。

「……綺麗……」

「見事なもんだな!!」

「うちもあの方達を我が国に呼ぶかw」

賞賛の声が響く。アシュリーナも例外ではなかった。

その声を受け、踊りにもますます拍車がかかる。あの使者を中心に6人が組になって、剣を交えだす。その真ん中で彼女が舞っている。ひらひらとした……砂漠にはない優美さがあつた。

そして、ついに彼女だけを残して6人が回りに頼れる。残った彼女は天に剣を突き出す。

わぁー!!と歓声があがる。踊り子たちもみんな笑顔だ。アシュリーナも先ほどのことは忘れて、共に喜んでいた。

宴も終わり、もう寝るだけとなった。アシュリーナはあの出来事全てを忘れずに寝入ってしまった。……アンドレア（とその部下達）は彼女の命に従い、ムスリの使者の素性を急いで調べているというのに。

他の使者たちも、1週間後に控えた、戴冠記念日のために宮殿へ

泊まっている。宴の熱気はすでにここにあらず……という感じだった。

*

*

*

*

「女王は我々のことにはまだ気がついていない」

「今ここで殺すのが良いかと……」

「いや、まて」

一斉にその場にいる人間達は黙った。

「まあ、あれの娘というからどんなお嬢様かと思つたら、かなりキレルぞ」

「では、用心に越したことはない？しかし彼女は護身する術を知りません」

「そうです。例え近衛兵がいたとしても、エリ様と我々では容易に切り抜けましょう」

「現に、彼らも今日は酒を飲んでいるはずだ」

「はあー、つとエリと呼ばれた女がため息をつく。」

「あの娘は我々の存在に勘づいている。部下に我々のことを調べるように命を出していた」

彼女らはザワザワする……任務に失敗は許されないのだ。ましてや彼女らの素性など知られては組織もろとも崩れてしまう。

「まあ、落ち着け……私に策がある」

本当ですか！と声上がる。そして耳打ちしていく。

聞いた彼女らはニヤツと笑う。

「この国も終わりだな……」

密かな嘲笑が砂漠の夜に響いては消えていった。

誕生の宴、そして女使者へ後編（後書き）

これでこの章は終わりです〃3……って特に名前は決めていないですけどね

次からは 戴冠記念 編が始まります
アシュリーナの戴冠1周年を記念した式典です

是非お楽しみに

戴冠記念……めんどくさいな（前書き）

無事誕生の宴を終え、9歳になったアシュリーナ。

次は戴冠記念日までのお話です

戴冠記念……めんどくさいな

「はぁー……」

女王の部屋からわざとらしい溜め息が聞こえる。……今日は戴冠記念日の祭まで、あと2日という日である。着々と準備は進み、賓客もそろそろ入国している（誕生の宴に来た使者たちの何人かは、今も主の到着を待っている）。

しかし主役のアシュリーナは気が進まない様子である。従者の――最大の犠牲者はアンドレアだが――顔を見る度に

「めんどくさぁー、中止にしてえー」と愚痴……ではなくワガママを言っている始末である。その度に宥めてはいるものの、さすがに5日前から言われ続ける自分たちの身にもなつてほしいのだから……と、密かに思っている。

今日も彼女は部屋から出てこない。今日の近衛部隊はカイル將軍率いる青軍だ。声を掛けるとあの調子なので、掛けづらい上に、部屋に入ることすらままならない……愚痴の嵐を聞くはめになる恐怖に怯えて。

「陛下……生きてますかねえ」

こんな事を彼女の部屋の前でこぼした兵士がいる。すると、中から細い腕が、にゅーっと伸びて兵士を捕まえた。そしてそのまま彼は引きずり込まれ、主の元へ帰ったのはそれから3時間後だ。友人もギョツとするほど、青い顔で……

「い、今すぐ……記念日の……祭を……ち、中止する……べきで……す」

やつれた兵士が言った。

「何言つてんだ、トゥール。そんなこと無理に決まってるだろっ！」

友人に諭される。するとそれを聞いた瞬間、

「止めてくれえー！！お願いだ！！おねがいだよぉー！俺が……俺が……」

そう言つと倒れてしまった……

こんな話があつた。因みに事実らしい。

そんなところに、ダルーシャがやってきた。彼は躊躇無く、アシユリーナの部屋へ入つて行つた。

「ああ！おい！！ダルーシャっ！今入つたら……」
そこに制止が入る。

「大丈夫だ！！俺らが犠牲になるより、犬に犠牲になつてもらつたらそれほど良い事はないだろう！！」

「……あつ、そうですね。ははは」
今日の近衛兵は運が良かった。

とてとてとて……

かわいい足音をたて、ダルーシャがアシユリーナの部屋へ入つて行つた。

「……！何者っ！……なんだ、ダルーシャか……」

アシユリーナが咄嗟に手に握つた槍を下ろす。

「おどかすなよ……」

「わんわん」

長い尻尾を振りながらダルーシャが近づいてくる。……それを見て飼い主は引き下がる。

いくらダルーシャは自分の相棒だとしても、犬は生まれつき苦手

なので、まだ恐怖は残る。……それでも、ごくつとつばを飲み込みダルーシャを待つ。……数秒後、彼は彼女の手元までやってきて、撫でくれる手に頭を委ねた。

「い、いいところに来たな」

引きつった笑みを浮かべる、アシュリーナ。

「わっ！」

ダルーシャが彼女を押し倒した。そして驚いた彼女の顔を舐めた。
「く、くすぐりたい！！ていうか汚い！！止めんか、こらっつ！！」

彼女はダルーシャを引き剥がす。彼は尻尾を振りながら、？マークいっぱい顔で彼女を見下ろす。

「ふふっ。近頃の兵はつまらん。女王のワガママさえも聞いてくれない……。そんなんで妻や子供のワガママが聞けるとかってんのか？」

「わんわん！」

「よしよし、お前は相槌を打つのがうまいなあ」
尻尾を盛大に振る。

そして、アシュリーナは昔を思い出した。

よくワガママを聞いてくれた、優しくった父と母を……。しかし今彼らはここにいない。アシュリーナがどんなに泣き叫んでも、もう戻ってこない……。遠い遠いところにいるらしい。

「父さんと母さん、どうしているかな……」
ぼそつと呟く。

昔、母は遊びを教えてくれた。父は最高の教育を施してくれた。

「誰からも愛される王になるのよ」

最期の瞬間、笑顔で母はそう言った。それは生前2人が口癖にしていた。

勿論、幼いアシュリーナは父と母と幸せに王になれると信じていた。

会いたいな……

そう、呟いた。

戴冠記念……めんどくさいな（後書き）

次回は外伝です（笑）

ムスリの影（前書き）

明日……戴冠式です（泣）

残り1日の動きに注目です

ムスリの影

アンドレアはその日、アシュリーナの部屋へ向かっていた。彼の部屋はアシュリーナの部屋までとことん遠い。部屋数はたったの3つだが、間隔がかなり広い……戦には慣れてもこれには慣れない。アシュリーナに言わせると、

「アンドレアは男だから。側近と言っても私は女であんたは男……隣の部屋なんていや」

と、あっさり切り捨てられた。因みに彼女の隣の部屋は、侍女の部屋その1とその2である。そこまで俺が嫌いかー！！ていうか「いや」ってなんだよ「いや」って……。

やっとたどり着いた……長旅だった。頑張った、俺（笑）

そうニヤニヤしていると、近衛兵に不審な目で見られた……が、気にしない。気になるのはアシュリーナが部屋から出ていないと言われたとき。明日戴冠記念祭なんですけどぉー！！どうするんですかっ！！賓客はほとんど来たよ、どうするんだよ！！……そう言えば1つ王が来ていない国があるな。

そう思った瞬間、彼はアシュリーナの部屋にやって来た目的を思い出した。

「アシュリーナ様、アンドレアです。頼まれ事を持ってきました」
そう言うつとすぐ、入れ、といういかにも不機嫌そうな返答が帰って来た……どんだけ嫌なんだよ、戴冠記念祭。

はぁーっと息をはくと、失礼しますと言ってアンドレアは中に入った。……その後近衛兵たちはアシュリーナの癩癪を恐れ、入り口からそろお、つと遠のいた。

やはり思った通り膨れっ面でベッドに腰かけていた……しかし足元にダルーシヤを従えていた。

安心してアンドレアは話し始める。

「アシュリーナ様、例の女たちの件ですが……」

「で？どうだった？」

「それが……あの使者の名前しか分からず……」

「いいから言いなさい」

「はっ……」

そう言うつと報告を始めた。

——女の名前はサルーシエ。ムスリの剣豪で、いくつかの大会にも出場して好成績を残している。男でも敵わない奴はたくさんいるらしい。近々、女将軍として迎えられるらしい。

これしか分からなかった、と言うつとアシュリーナは満足そうに頷いた……だけだった。

「まあいいでしょう……サルーシエ、ねえ……」

「それが何か……？」

「もしかしたら偽名かも」

「でも、偽名で将軍に迎えられるはずがありません」

「そう……！そこが問題なのよ！……王宮の人物が彼女の顔をいかに知らないか……よね」

「しかし大会で好成績を残し、違った人物として名を轟かせることは可能です」

「それで王に見込まれた、っていう可能性は？」

他の声がして、二人が振り返るとそこにヨシユアとカイルが立つ

ていた。ヨシユアはいつも通り無表情、カイルはニコニコ……いやニヤニヤしていた。

「抜けがけなんてズルいですよ。アンドレア將軍が側近だとしても僕達だって將軍なんだ！役に立てるって、女王様（笑）」

「ご丁寧にピースまでしてくる。いらんって。」

「ゴメン……でも私は」

「私だって亡き先王の命でムスリについて調べていたところです」
ヨシユアが重ねてくる。

「それってどういう意味よ」

「陛下はムスリの者に殺されたんです。そのとき、彼女らは『ムスリがお前たちのせいで滅んだ』と言ったので、こういうことかと調査を続けていたんです」

アシュリーナはごくつと、つばを飲む。

「で、どうだったのよ」

「……確かにムスリは荒廃していました。昔のような豊かな姿は失われていました……今の王はアザーンという男で贅の限りを尽くしています……常軌を逸していますよ。しかしムスリが滅んだのは我々のせいではありませんでした。多分我々に濡れ衣を着せようとした国があると思います」

「……で父さんと母さんは勘違いで殺されたと……？ふざけないでほしいわ」

アシュリーナが吐き捨てる。

「あいつらは許さない。私が復讐するとあの日誓ったの……私が、ね。……でもこれで対象が増えたわね……ヨシユアは引き続きムスリを滅ぼした国を調べなさい」

「御意」

「アンドレアは私に剣を教えなさい……あの女が……サルーシェが私に剣をくれたの」

そう言うとおもむろに剣を取り出す。無駄のない装飾の施された、

白い剣。

「わかりました……しかし何故？」

「分からないの？さっき言ったでしょう……私が復讐するの、サルーシエに」

えっ、と声があがる。

「二人の話は繋がるわ……それに彼女私に、私を越えろって言ったのよ……犯人がそれに親しい人物かに決まっているじゃない」

「なるほど……分かりました、お教えしましょう」

「じゃあ僕は？」

そう言ったのはカイルだった。

「みんな仕事をもらっているのに、僕だけないとか不公平だろっ！」

「……そうね……じゃあ私の護衛」

「かしこまりました……ってみんなそうじゃん！！」

カイルが不服そうに言う。

「はいはい。あなたも私に剣を教えなさい。いろんな流派を知ることとは大事だわ」

「やった〜」

子供のように喜ぶ。兄のヨシユアが十分細い目をさらに目を細めた。

「……そろそろ出ますか」

「アシュリーナ様、何故今頃？」

「迂闊に外に出ると危ない……そう言ったのはお前だぞ」

「……そうでしたね」

「今日は護衛が3人もいる。今日でなくていつ出るんだ？」

そう言つとニッコリ微笑んだ……やはり無邪気な笑顔が1番だ。

女王が出てきて、近衛兵がビックリしていた。

ムスリの影（後書き）

あと1日

ムスリの影、女王の決意、戴冠記念祭

どうなるのでしょうか？

戴冠記念祭 〓 1日目午前? 〓 (前書き)

今日はアシュリーナの戴冠記念祭です

これは1週間行われる予定です。

今日は1日目の午前中の王宮の様子です

戴冠記念祭 〓 1日目午前? 〓

今日はダングラジエ13代目の王、アシュリーナの戴冠記念祭である。国内で済ませる記念祭とは違い、今回は即位1周年ということで、諸外国の王たちを呼んだ、大規模な祭典である。因みに、大規模な記念祭は王の即位1周年、5周年、10周年……というふうにきりのいい時にするのが通例である。

国は若い……いや、幼い王の即位を祝って賑わっている。町は活気づき、国民は神に供物を捧げたり、王に一目会おうと宮殿に押し掛けたり大騒ぎだ。……といっても祭が始まるのは、夜の主神オリオンが空に輝く頃であり、今、宮殿は準備で大忙しなのだから門番にしたらしい迷惑なのだが。

当然、祭が始まるのは夜なので、アシュリーナはいつもの王らしくない格好で大広間にいた。そんな格好でうるちよろしている彼女を見て、アンドレアはため息をついた。

「アシュリーナ様……今日はいくらなんでもその格好はお止めください」

「なんでよ!夕方準備したらいいじゃない」

「……今日は私たちだけではないのですよ!?他の国の王たちがいらしているのに……アシュリーナ様の格好を見たらどう思っているでしょうね?」

「うるさい奴だなあ………わかったよ、ダングラジエの面子にかけて着替えてきますよ」

そう言ってスタスタ部屋へ帰って行った。

暫くして帰ってきたアシュリーナは先ほどとは見違えるような格好をしていた。庶民が着るような、綿の貫頭衣をベルトで止めただ

けという質素な服ではなく、淡い桃色をした絹の薄布をまとい、いかにも王らしい格好だった……しかしよく見ると下の服はあまり変わっていないような……

「悪いか……声がダダ漏れだぞ。いくらなんでもまだ正装しないでいいだろう？」

「そうですね……まあいいでしょう」
アンドレアは再びため息をついた。

「今日サルーシエにカマかけてみるわ」
「へえ……どこで？」

「もちろん、出会ったときだ！！彼女ならもうそろそろ来るんじゃないか？」

「なんでそんなことがわかるんですか？」
「……勘。まあ、つまり出会ったときにするんだよ！」

それって答えになってないよね（笑）

そう思うと自然に笑みがこぼれた。私はアシュリーナ様に付いていけばいいんだな……そう思うとなぜか安心した。

「姫さん、おはよー」

そう声をかけたのはカイルだった（後ろに眉をひそめる兄のヨシユアが……）

「ああ、おはよう」

につこりとアシュリーナは応える。

「さつき部屋に兵士を配置に行ったらもういなくてさあー、ビツクリしたよー！」

「まあ、今日ぐらいいは誰よりも早くここにいないといけないしな……賓客に先に来させたら悪いでしょ」

「そうだねー……でもこんな早く来てなにをするの？」

「本でも読もうかと思つて……ほら、これもう少しなんだ」

そう言つと、分厚い本を取り出した……まだ見たところ新しいものだから、部屋にこもつて何しているのかと思つたらこれを読んでいたのか！とアンドレアは思わざるをえなかった。

アシユリーナがカイルと本について語り合つているところで、急に門番が騒ぎ始めた。

「何事だ？」

アシユリーナが立ち上がろうとする。

「陛下大変です！」

そう言つて2人の兵士が走り寄つて来た。

「何事か？」

「突然何者かが襲つてきてえ、私たちがあしやきゆううにい……」
呂律が回つてなくて聞き取りにくい言葉を言いながらゆらゆらと2人は立ち上がった。そして、腰に差していた短剣を抜くとアシユリーナ目がけてダツシュしてきた。

「！！！」

その場にいた3将軍も突然なことに驚いて反応が思わず鈍つてしまった。しかし、1人は取り押さえることができた。が……

「アシユリーナ様！！危ないっ！！！」

どすつ、という鈍い音が聞こえた。彼らの顔から血の気が引いた。自分たちの目の前でまたもや王が死ぬなんて……

しかし、臣下の心配をよそにアシユリーナはイライラしながら立ち上がった……手に短剣の刺さつた分厚い本を持つて……

「おまえらあゝ、いい度胸してるなあ……おかげで本が読めなくなったじゃないか……敵襲に見せかけての暗殺ならもうちょっとマシなの考えてこいっ！！うちの兵に短剣使いなんていないんだよ！！！」

怒りにワナワナ震えているのがわかる……生きてて良かったあ……

しかし問題の兵士は焦点な合わない目で虚を見つめている。まるで彼女の怒り声が聞こえていないようだ。

「どーしてくれるんだよ！そこへなおれえ！説教だ説教！！」
そうアシユリーナが怒鳴り散らしていると、ふっ、と兵士の体がずり落ちた……背中から血飛沫を吹き出しながら。

頽れた兵士の後ろから顔をのぞかせたのは……サルーシェだった。

「陛下……大丈夫ですか？何者かに襲われていたようですけど」

「……おはようございます……すみません、朝からこんな見苦しいところをお見せして」

「いえいえ、陛下が無事なら何よりです」

「まさか……あなたがこれを？」

「ええ」

兵士は上半身に何かしらの防御具をつけることになっている。この暗殺者たちはこの国の兵士の格好をしているので彼らも防御具をつけている。しかし女の手でいとも簡単に剣で打ち壊してしまった……彼女が剣豪であることにはどうやら間違いではないようだ。

「お助けいただきありがとうございました……」

「大丈夫です……陛下に挨拶に部屋へ行ったところ、貴女がいない、もう出て行ったと言われたのでびっくりしました」

「ええ……今日だけです」

まあ、とサルーシェは微笑んだ……しかし目は笑っていなかった。

「ムスリの王様はもうご到着で？」

唐突にアシユリーナが口にした途端、彼女の目は少し大きくなっ

た。が、すぐいつもの冷徹な目に戻った。

「いえ……主上は体調が悪いみたいなので、来られないとのこと
です……申し訳ございません」

「そうですか……この御恩の感謝をお伝えしようと思いましたが
に……どうぞお大事にとお伝えください」

「ええ、そうしましょう」

声に若干の焦りを見せていた……なにかを隠している。

アシユリーナが不自然に思っていると、また突然奇声や悲鳴が彼
女の部屋の方から聞こえてきた。

——まったく今日は騒がしい

戴冠記念祭 Ⅱ 1日目午前?Ⅱ (後書き)

?に続きます……

サルーシエとは一体何者なんでしょう??

そして悲鳴の正体とは??

次回は飄々としたカイルが……

楽しみです

戴冠記念祭 1日目午前？

アシュリーナの部屋の方向から、悲鳴が聞こえる。

「騒がしい！何事だ？」

アシュリーナがうつとおしそうに叫ぶ。

「陛下……陛下の部屋についていた衛兵が何者かに襲われて……全滅しました」

報告に来た隊長らしき人物が躊躇い、喘ぎながら言った。

「……なんだってえー！！……って今日は祝いの日なのに死人が多いな」

彼女はすぐさま立ち上がって、報告に来た隊長についていく。そのあとに今日のついていた衛兵たちを受け持つ、カイルと他の将軍たちが続く。その後ろからサルーシェが続く……のかと思いきや、なぜかついてこなかった。アシュリーナが振り返ると、彼女は不敵な笑みを浮かべていた……いくら兵士とは言え、人が死んでいるのにコイツはなんなんだ？

部屋の前に到着すると、兵士の死体が重なり合っていた。地面を血で染めている。こんな風景を見て気持ちがいいはずがない。アシュリーナは顔をしかめる。

「……何があつたんだ」

アンドレアは思わず呟く。死体と化した兵士たちの顔はどれも恐怖で歪んでいる。この国の兵士はどんな下級兵でも難関を突破して兵士になる。誰もかもが屈強な兵士であり、そう簡単に倒せる者たちではない。そんな彼らの顔を歪ませ、血の海に沈めてしまうような人物がこの近くに……そう思うと歴戦の将軍でも背筋がゾクツとした。

しかし彼以上に呆然としているのが、カイルだった。――部下を自分の知らないところで、得体の知れない何者かに殺されたのだ。彼は正気でいらなかった。なんせ、彼は飄々とした明るい性格とは裏腹に、その戦い様といったら並みの人間ではないほど強いためか部下からも信頼は厚く、そんな彼らにカイル自身も全幅の信頼を寄せている。

そんな、何よりも大切な自分の部下がこうも無残に殺されてしまったのだ。ワナワナ震えていた……その目に怒りを宿して。

「カイル將軍……！」

アシュリーナの部屋から男の声が聞こえた。少し経った後目に涙をいっぱい溜めた若い兵士が現れた。

「カイル將軍……陛下もお来てくださってえ……すみませーん」
彼は幼い子供のように泣き出してしまった。

「怖かったです……みんながあいつらに斬り殺されて……僕は何とか陛下の部屋に逃げ込んで……でも目の前でみんなが倒れていくのを見ていることしかできなくてえ……ホントに怖かったです」

「そうか……もう泣くな……よく頑張ったな。お前だけでも生きてくれて良かったよ」

「將軍……」

彼はカイルの言葉にまた泣き出した。

「ところでその あいつら とは何者だ？」

アシュリーナが言い放つ。すると泣いていた兵士がビクツと身動ぎする。アシュリーナは彼の目の前にしゃがみこむ。

「あなたは何を見たの？ あいつら って何？ 教えてくれないかしら……私はいくらでも待つから」

そう優しく語りかける。すると兵士の方もおもむろに話し始める。

「……真つ黒な人影が見えたんで何事かと思っただけです……ユラさんが見に行ったら……いきなり斬りつけられて！何人かの先輩が駆けつけていくと、この国の兵士の格好をした人たちが5人ぐらいここを乗り越えて入って来たんです！！彼らは正気を失っているようですすぐに倒せました……。安堵していたところに第2波が訪れたんです！！」

聞くところによると、それは黒い布を頭から被った女3人で手慣れた様子で衛兵たちを斬り殺していったそう。顔はよく見えなかったらしい。それを見て彼はアシュリーナの部屋へ逃れ、そのまま見落とされて今に至るそう。

「あいつらだ……1年前は父さんと母さんを……今日はカイルの兵士たちを……！！」

アシュリーナの目にも怒りが宿る。アンドレアが兵士に尋ねる。

「襲撃がある前に誰かアシュリーナ様を訪ねて来なかったか？」

「……そういえば、女性の方がいらしていましたよ……すごく綺麗な顔をしていましたけど、目つきが鋭い……」

「サルーシェだ……」

アシュリーナが呟く。……彼女の中では彼女らが犯人であると確信したようだ。

「次期將軍をこんな祝賀会に使者として送るわけがない。ましてや女7人だ。私がムスリの王でもそんな真似はしない……こんな砂漠に女の身で無事に来れるはずがない。……あいつらはムスリの王に従って行動しているわけではない……なにか別なモノに所属しているはず……」

アシュリーナが恐ろしく冷静に考える。深々と眉間に縦皺を刻んで……。

「あの女へ……サルーシェへの敵討ちはアシュリーナ様、貴女に委ねます……姫さんが1年も前から願ってきたことだから……だけど」

カイルが突然口を開いた。

「その他の6人には私が制裁を加えます……部下の仇を討ちます！僕に……私にそれをお許しください！！そうじゃないと……死んでいったあいつらが浮かばれない……！！」

涙しながらカイルが訴える。それをヨシユアが見守る。……信頼を置いてくれた部下。彼自身も部下を大切にしていた。お互いがお互いを信頼していた。町で家族が、恋人が、そして将来が彼らを待っていたはずなのに……それを一瞬の出来事ですべてを奪われた。家族に会える機会も、昇進する夢も、何もかもが彼らの前から風のように消えていった……あいつらのせいだ。

カイルにはそれが許せなかった。

「……いいよ……ちゃんと仇を取るんだよ」

「ありがとうございます……」

アシュリーナは跪くカイルを撫でて、大広間へ戻って行った……サルーシェの微笑みの意味が今わかった。

戴冠記念祭ですべてにケリをつけてやる！！

戴冠記念祭 〓 1日目午前? 〓 (後書き)

次回は午後に移ります……夜、祭りが本格的に動きます

戴冠記念祭 〓 1日目午後〓 (前書き)

とうとう戴冠記念祭が本格的に始まります

アシュリーナたちはどうなるのでしょうか？

戴冠記念祭 Ⅱ 1日目午後Ⅱ

今夜も夜の主神オリオンは輝いていた。

今の季節は冬。1日の中で一番長い時間は夜である。——つまりオリオンが天の中で強い権力を持っている（と信じられている）戴冠記念祭が夜から執り行われるのは、まず1日の中で強いオリオンに日々の安息を感謝し、王国の永劫の安寧を願うからだ。

そんなわけでアシュリーナは眠い目を擦りながら（夜に備えて昼寝をしていた）起きだして、銀を基調とした豪華な衣装に着替える。今度は中もちゃんとした絹の服装にした。

時間まで部屋ではおーっとしていると、アンドレアがやってきた。実はあの後、アシュリーナたちを襲撃に来た兵士がこの国の者かを調べるよう頼んでいたのだ。

「アシュリーナ様を襲った兵士はチャズの者、衛兵たちを襲ったのは5名とのことでしたが、内2名がアルゴワ、1名がスズリ、残りの2名はうちの兵でした……医師に調べてもらったところ、彼らは何かしらの催眠薬を飲むか嗅ぐかしたか、或いは暗示にかけられた、とのこと。私にはそんな芸当できませんけど、そんなことができる人物っているものなんです……」

アンドレアがなぜか感心気味に言う。5名は他国のものだが、2名はダングラジェの兵士だ、というところにイラツとくる。間抜けな……

「一応他国の王、皆さんにお知らせし兵士の数を数えてきましたところ、総勢15人以上行方が分かっていないようです」

「……ということは、まだ刺客が15人以上いるということね……サバイバルだわ。うちの兵は？」

「全員いました」

「ふつ、奴らもうちのには手出しできないか……。アンドレア、あんたは祭儀の途中は私から離れないこと……。私は護身できないから、万が一のことがあったら守ってちょうだい。ヨシユアとカイルは広間を守るように言っというて。門番は……。他の將軍たちは当てにならないし、かと言って下級兵を置いとくわけにはいかないわねえ……」

「私たちの副官を1名ずつ出して、兵を率いさせては？交代制にするとなおいいですね」

「そうね、それがいいわ。ではそのように2人にも伝えて……。カイルはどうなった？」

「死んだ衛兵たちに謝ってました……。自分が悪かった、と……」
「『悪かった』って何が？置いていったこと？」

「そのようです。傷心していますがもう大丈夫でしょう」

「それならいいけど……。後で声を掛けてみるわ」
「行きましよう、といってアシユリーナが立ち上がり、スタスタと歩いていく。その後にアンドレアも続く。」

月は天を明るく照らし、オリオンはその姿を神々しく輝かせている。

ダングラジエにしか自生しないマシユの木で作られた横笛を樂士が吹く——祭の始まりだ。

民たちが王宮外で歌い踊り、皆が歡喜に包まれていた。

「アシユリーナ様、戴冠1周年おめでとう！！」

「早くいい旦那見つけてくださあい！！」

いや、私まだ9歳だし……。そんなことを思いつつアシユリーナはテラスに出て笑顔で手を振る。すると民たちが一斉に手をブンブン振りだす——まるでこの世に降臨した女神に会ったかのようなだった。

実際銀を基調にした綺麗な服で身を包んでいた彼女が、彼らにはそう見えたのかもしれない。

神殿ではまず、アシュリーナだけが人間の形を取ったオリオンの神像に祈りを捧げる。王国の安寧、国への恵みの感謝——そしてサルーシェたちへの報復の成功を。

神官たちが神への言葉をマニユアル通りに読み進めていき、大神官が宗教的な儀式を恭しく始める。女王であるアシュリーナは大神官に付き添われながら供物を捧げる……とにかく何もかもが初めてで自信がない。

アシュリーナがもたもたしながら何とか無事に終わらせることができた。最後に透明のジューズ（アシュリーナは酒が飲めない）入った銀の杯を手に持ち、再度神像の前へ進む。そして高らかに宣言した。

「汝の豊かな恩恵に感謝し、我ここに誓う。我らダングラジェの民は汝への永劫で変わらぬ忠誠を誓い、尊敬と畏怖と念を持って奉らん。その恩恵……永遠なれ！」

ジューズをグイッと飲み干す。すると賓客たちの間から割れんばかりの拍手がなった。……何を勘違いしている……これはアンドレアが考えたものを一夜づけで覚えただけなんだー！

そんなことは露知らず、賓客の中には涙を流すものさえいた……止めてくれ、恥ずかしい。これはアンドレアが考えたんだ……涙の対象をアンドレアに変えるお！

アシュリーナがあたふたしていると大神官が変な目で見てきたが、彼女はそんなことは気にしない。彼女が警戒しているのは……祭儀を無表情で見つめているサルーシェたちだ。残りの15名以上の行方不明兵をいつ操って、襲わせてくるか……それについてはアンドレアたちも警戒している。

しかし今夜はもう襲ってくることはなかった。大勢の賓客たちの目の前では迂闊に手出しができないらしい。今日の宴は平穩無事に済ませることができた。

「エリ様……女王たちは私たちの策謀だと気づいているようです」
「そのようだな……しかし、このチャンス逃すともう後戻りができない。残り6日間でダングラジエを滅ぼさなければ……あの方に顔向けができない!!」

エリと呼ばれた女が『あの方』と口にした途端、仲間らしき女たちに動揺が走る——『あの方』を怒らせるとどうなるか……それは彼女らが1番よく分かっていることなのだ。『あの方』のおかげで滅んだ国、没落した貴族の数は計り知れない……恐ろしい方だと皆が認識している。

「ボクがやりましょう」

そう笑顔で1人の少女が言った。

「こんな国なんてすぐ滅ぼしてあげるよお……そしたらボク、大出世だなあ」

呑気に言う……しかし彼女の實力も侮れない。『あの方』と同世代であるにも関わらず彼女は任務に参加することができている。……もう既に大出世なのだが。

「姉さんたちはボクの邪魔さえしなければいいから……全部任せ
てねえ」

にこやかに笑うがその顔には既に残忍さが表れていた。

戴冠記念祭 Ⅱ 1日目午後Ⅱ（後書き）

エリたちの正体はほとんど……いや、みなさん分かりましたね（汗）

ここではもちろん明かしませんよ……w

次話もよろしく願いしますm（- -）m

戴冠記念祭 Ⅱ 2日目Ⅱ (前書き)

1日目も終わり2日目突入です

今日は何もない休みなんですよ(笑)

戴冠記念祭 Ⅱ 2日目Ⅱ

今日は祭の2日目だが、これといった祭儀はない……つまり休みということだ。しかしアシュリーナは賓客たちに正式な挨拶を済ませていないので、挨拶回り間違いなしといったところだった。

というわけで、彼女とその護衛3人——アンドレアとヨシユアとカイルは午前中をその時間に潰し、やっとお昼前に済ませることができた。

今、中庭の木陰で仲良く休んでいるところだ。

「ふう〜やつと終わったあ……暑っ」

「ははっ、しょうがないですよ。ここは冬でも暑いんですから」
すっかり機嫌を戻したカイルが笑う。

「今日は休みだっというのによく働いたなあ」

……いや、それは護衛のこっちのセリフなんですけど……

3人とも涼しそうに木陰に座るアシュリーナを見つめる。

すると、パタパタツという可愛らしい足音が聞こえた。そして……

「お姉ちゃんっ!!」

そう言っで、女の子がアシュリーナに抱きついた。ゾゾツと寒気が走る。

「だあああーっ!! 誰だあー!!」

アシュリーナが振り向くと、白い肌に濃緑をした髪と眼の少女がキョトンとして立っていた。歳はアシュリーナと同じぐらいに見

える……誰だ、コイツ？と思いながらも服装を見ると、どこかの王族のような格好をしていた。

お偉いさんだったら困るので気を取り直して、いつもの営業スマイルを見せながらアシュリーナは尋ねる。

「あら、こんにちは。お父様かお母様はいらっしゃらないの？」

「いるけど……お姉ちゃんに会いにきたの……！」

はあ、そりやどうも、としか言いようがない……ていうか『お姉ちゃん』は止めて欲しい。本当に姉みたいじゃないかっ！

するとゼエゼエ言いながら細見の男性が走ってきた。

「ソネアあ（はあはあ）、勝手にうるちよろするなって（はあはあ）言っただろう……」

すごく息切れしながら喋る……そんなに走らなくてもいいんじゃないんですか？というかどこから来たんですか？

「お父様！ やつと来たのお？ 遅かったね」

「『遅かったね』じゃないだろう……！……あ」

今更アシュリーナたちに気づいたのか、慌ててお辞儀を繰り返す。

「アシュリーナ様、娘がご迷惑をかけてすみません」

必死に父親が謝っているというのにソネアと呼ばれた少女はにぱあーっと笑ったままだ。

「だって、ソネア早くお姉ちゃんに会いたかったんだもん……！」

口を尖らせてソネアが言う……ついでにギュウウーっと抱きついた腕に力を込める。

「まあ構わないのですよ……ソネアちゃんというんですか？ 可愛いですね。お幾つなんですか？」

「6歳……！」

ソネアが答える。

「あらそうなの？ 私と3歳違いね」

するとソネアがムズムズし始めた……なんなんだこのガキは？ 勿論口には出さない。

「お姉ちゃん……遊ぼう!!」

アシュリーナを除くみんなが驚愕の表情を浮かべた……1番すこかったのは彼女の父親だ。

「ソ、ソネアー!またそんなこと言って……!!アシュリーナ様は忙しいんだよ。みんな忙しいんだ!!当分ソネアには構ってあげられないけど、帰ったらばあやに遊んでもらいなさい」

「ばあやと遊ぶのはもう飽きた……ソネアはお姉ちゃんと遊びたい!!」

しれっと父親の言葉に答える。もう彼女の中ではアシュリーナと遊ぶことで頭がいっぱいらしい。

そんな親子の会話が10分以上続いた……こんなところで喧嘩するなよ、うざりたい。アシュリーナはそう思い遂に覚悟を決めた。

「わかりました……。ソネアちゃん遊ぼうか」

「うん!!」

ソネアが喜色満面の表情で頷く。

「本当にすみません!!」

彼女の父親がまたまた頭を下げる。

「気にしないでください。ここには私と同じぐらいの歳の子がいないんで、丁度退屈していたところなんですよ……どうぞお気になさらず。さあ、ソネアちゃん行こうか」

アシュリーナはソネアの手を握って立ち上がり、そのまま王宮の奥へ消えていった。

「……うちの娘がどうもすみません……アシュリーナ様をどうしても見たいと言うもんですから、連れて来たらこんなことになってしまつて……本当にすみません」

今度はアンドレアたちに頭を下げる。

「いいえ、アシュリーナ様が良かったらそれでいいんです……私

たちじゃもう彼女の遊び相手にはなれませんか」

それからというもののアシュリーナとソネアは日が暮れるまで遊び倒した。初めは嫌がつていたアシュリーナも、まるで幼いころに帰ったかのように遊んでしまっていた。

父親へ返すとき、「また遊んでね」とか言ってまた怒られていたが、アシュリーナも快く承諾した。

その夜、ヨシユアは仕事も無く、早めに休むことにした。うとうとしていると、部屋の入口の方で物音がしたので何事かと思ったが、すぐにアシュリーナの声がした。

「ヨシユア……まだ起きてるの？……話があるから聞いてくれなにかしら？」

今夜はやけに素直だな、と思い明かりをつけようとした。が、すぐに引き留められた。

「將軍の部屋でこんな時間に明かりがいきなり点けると皆がびっくりするでしょう？だから……明かりはいいわ」

そんなことを言いながらアシュリーナはヨシユアの傍へやってきた。そしてベッドにちょこんと座る。

「アシュリーナ様……こんな時間になにかご用ですか？」

ヨシユアはささやき声で話しかける。

「ええ、実は……」

ゴクツと唾を飲む音が聞こえる。

「あなたには死んでもらおうかと思って」

そう言われた後、背中に焼け付くような痛みが走る。

「！！ア、アシュリーナ……様……！！」

「ごめんなさいねえ……あなた邪魔なの」

すくつとアシュリーナが立ち上がる。丁度月明かりがヨシユアの部屋の中を照らす。……しかしそこにいたのはアシュリーナではなく昼に彼女と遊んだソネアの顔があった。

「あらあゝばれちゃった？まあ、しょうがないね」

声音が突然変わった。しかし明らかに彼女とは声が違う——もつと低い声だった。

「あなた、女王の周りをうるちよろしてすぐ邪魔だったんだよね……アンドレアって奴も十分邪魔だけど……まず手始めにあんたを殺すことにしたわ」

ソネアがニコツと笑う。そして出口へ悠然と歩いて行った。

「明日まで生きれたらいいね……じゃあね」

彼女は手を振って見せる。月を背景にヨシユアに微笑みかけた。

ヨシユアはうめき声をあげることしかできなかった。

戴冠記念祭 Ⅱ 2日目Ⅱ (後書き)

刺されたヨシユアはどうなるんでしょうか？

3日目も注目です!!

戴冠記念祭 Ⅱ 3日目Ⅱ (前書き)

ヨシユアが刺されたまま3日目を迎えることになりました……

祭儀はどうなる？そしてヨシユアの容体は……？

戴冠記念祭 Ⅱ 3日目Ⅱ

はあああゝ

大きく伸びをしてアシュリーナはベッドからのそのそと這い出た。
……今日は確か、太陽神を祀る日じゃなかったつけ……？ああ、めんどくさい。

「タルカシ……まだあゝ？」

寝起きの彼女はとてつもなく機嫌が悪かった。

「いつもは早くしなさいだのなんだのうるさいくせに、今日はほったらかしですか！？今日こそ急がなきゃなんないのに……バーカ」
まだ午前4時を回ったところだ。太陽神を祀る際には、日の出に合わせなければならぬ。だからこうして朝早くから（いやいや）起きているわけだ。

……いつまで経ってもこない……まさかあいつ寝過ごしたか？？
……いやいや、あれに限ってそんなことはない。どっちかというところこの誰よりも早く起きてそうだ……そういう律儀な人だから。

痺れを切らし、アシュリーナは本格的に悪態をつき始めた……普通の9歳の口からは到底でてこないようなあんなことやこんなことを。

するとタルカシではないが、侍女がやってきた。

「大変です、アシュリーナ様！！ヨシユア様が……重体とのことです！！」

……はい？ヨシユアが重体……？なんで？思考回路がやっと動き始めたアシュリーナには、すぐに理解できなかった。

「……それってホント？なんで？」

寝ばけたまま答える……タルカシが侍女にまで私を調教する術を教え込み始めたのか？それはまずいなあ……

「本当でございます！何故こんなことで嘘をつけましょう？急いでください！！」

彼女の顔は蒼白だった。顔……体全体で必死さをアピールしている。

——やっと本気になった。弾かれたように立ち上がり寝着を簡単な普段着に着替え始める。

「あなた、よく知らせてくれたわ……こんな格好で行くわけにはいかないからちよつと待ってて。すぐに着替えるから」

「あつ、お召し物の交換は私どもの仕事です……すみません……気が動転していて全く気にかけていませんでした。私がやりますのでアシユリーナ様は楽にしてくださいください」

「今はそれどころじゃないわ……私のことはいいから。ヨシユアは今どのような状態なの？」

「はい……ヨシユア様は背中を短剣で一突きされたようで……侍医が見てくださっているのですが、どうも傷が深くて……その上傷口が化膿しているみたいなんです。なにか毒物が塗られていたのではないか、とおっしゃっていました……ヨシユア様は助かりますでしょうか！？私は心配で心配で……」

そう言つて彼女は泣き出した……無愛想な彼だが一応慕ってくれている人はいるようだ。

「大丈夫よ……彼は強いもの……あいつがカイルを残して逝けるわけないでしょう！たった一人の弟が近くににいるのに……。あなた名前は？」

「……エシャーです」

「そう……エシャー辛かったわね……ごめんね。さあ行きましょう」

優しく語りかけると、彼女は小さな声ではい、と答えて立ち上が

った。そしてアシュリーナを先導していった。

「ヨシユア様……投薬と止血できていないようなのでその治療だけはできました……。しかし、この状態で縫合するのは大変危険が伴うので、また後ほど縫合いたしましょう」

侍医はそう言った……。が、返事がない。ヨシユアは目を閉じてベッドの上で臥せっている。先ほどまでは治療の痛みに耐えきれず叫び声をあげる場面もあったが、今は落ち着いて寝ているのだろう。その顔は周りの誰よりも蒼白だった。

「兄さん……大丈夫かなあ」

悲しそうにカイルが呟く。二人は幼いころから支えあって生きてきた。貧しさから両親は彼らがまだ幼いころに養子に出した。たまたまそこが剣術の道場で、たまたまアシュリーナの父親……。先王も通っていた道場だった。その当時、彼はまだ王子という立場でその護衛という形で友達になった。いつしか彼は王になり、二人も王宮へ上げられることになった。……いつ何時も何をするにも二人は一緒だった。

そんな兄が今死の淵を彷徨っている……。弟のカイルはとても辛かった。厳しく無愛想な兄だったけど、それでも彼が大好きだった……。カイルの頬を一筋の涙が伝う。

「ヨシユア……生きてるか？」

その声を掛けたのはアシュリーナだった。

「陛下！？もうお目覚めだったのですか？」

皆が驚いて声をあげる。

「……今日は祭儀があるはずだったので、私もうんと早く起きましたのよ……。何か文句でも？」

冷たく笑いながら言い返す。が、皆「あゝそういえばそうだった

たね」という顔で納得していた。

そんな彼らを思いつきり無視して侍医に言う。

「ヨシユアの状態は？」

「なんとか……しかし、後はヨシユア様の体力と気力の問題です。峠は今日になるでしょう。発見が遅れれば手遅れだったかもしれない」

「そう……今日の祭儀は中止にしてもらったから、1日ヨシユアの傍にいろわ……いいかしら？」

「別に構いませんが……陛下はお疲れではないのですか？」

「勿論疲れているけど、私よりヨシユアの命の方が今は大事よ……彼の傍で励ましたいの……ダメ？」

（お得意の）切なそうに見上げる（攻撃）……それを見た侍医もかなり狼狽している。

コホンと咳払いして侍医は言った。

「いいでしょう……しかしヨシユア様の負担にならないように……そして何より貴女様の体を気にかけてください……王は貴女しかないのですから」

「ありがとうございます」

ニコツと笑ってお辞儀する。すると彼はそそくさと部屋から出て行った。

それを確認すると、アシユリーナはヨシユアの耳元へ行き、囁いた。

ヨシユア……あなたの仇も討ってあげるわ

そう言うつとヨシユアが微かに笑ったような気がした。

ソネアは血に濡れた衣装を着て与えられた部屋の前に突っ立って

いた。自分が何故こんな格好なのかもわからなかった。

父親が出てくる……その後うわーっと叫び声をあげた。

——何故だろう……記憶がない……

お姉ちゃん、と呟いて彼女は頷いた。

戴冠記念祭 Ⅱ 3日目Ⅱ (後書き)

いつも通り長文です(汗)

最後をこつやって終わらせることにいささか抵抗があっただんですが、最終的にこうなりました。

物語は遂に佳境に入ります!!

次話もお楽しみに

戴冠記念祭 Ⅱ 4日目 前半Ⅱ (前書き)

佳境に突入しました

ソネアに一体何があったのでしょうか……？

戴冠記念祭 Ⅱ 4日目 前半Ⅱ

気が付くと尊敬するアシュリーナの前にいた……しかし、何か様子が違う。私を侮蔑した目だ。手を動かそうとしたが動かなかった。かわりに何か太いものが手に食い込んだ。それが縄だとわかるのは幾らもかからなかった。

すると、どこからか石が飛んできた。

「……！！イタッ！！」

「お前が……わしの兵を……！！」

「何人殺せば気が済むんだ！！うちの兵だけでなく、他国の兵士もお前が殺したんだろう！！」

「そして、ダングラジエの將軍、ヨシユア様にも手を掛けやがって……！！王族だからってふざけるのもいい加減にしろ！！」

石と罵声は容赦なく飛び続ける。父を見ようと思った……が、そこには何処にもいなかった。——何があっているのかがさっぱり分からない。救いを求めるようにアシュリーナを見上げた。

アシュリーナはそこに横たわる、哀れな少女を見下ろした。

今日の儀式が済んだ後、アンドレアから報告があった——行方不明だった15名余りの兵士の死体の発見、そして彼らの殺害とヨシユアの殺害未遂の実行役が……ソネアだった、という2つだ。なんでも、昨日ソネアが自室の前で、血塗れ（ちまみれ）になって突っ立っていたらしい。それを彼女の父親が見つけ、その後兵士たちの死体が見つかったという。これだけでは彼女が殺ったという証拠はない。が、不運にも複数の目撃証言があった。ヨシユアの件についても同じだった。

これだけの証拠が挙げれば、アシュリーナは彼女と親睦を深めた仲とはいえ、ダングラジェの王として処分を下す他は無かった。しかし、屈強な兵士を、いかにも温室育ちそうな6歳の少女が^{ソネア}15名も殺し、将軍であるヨシユアを簡単に重体に陥らせたのか……疑問は残った。が、彼らは怒りに占領されそこまで考えることができなかった。

ソネアがこちらを見上げた……その目は悲痛そうだった。思わず目を逸らす……しかしある考えが彼女の中で閃いた。そして、暴言を吐いている賓客たちを見回す……いた、彼女らは。

自分の考えに確信を持ったアシュリーナは、さっと手を上げる。

「止めっ！！それ以上この少女を傷つけてはいけません！！」

勿論、彼らからはアシュリーナの方へ矛先が向いた。しかし、また彼女は手を上げて、制止する。すると彼らはやっと大人しくなった。

「この少女が罪を犯したことは証言からも解るとおり……それは今となつてはもう不変の出来事。しかしこんな幼気な少女が逞しい男兵15人に我が国自慢の将軍を簡単に攻撃できると皆さんは思いですか!？」

群衆の間から、確かにという声が漏れる。しかしまだ諦めないものもいた。

「確かに……この少女は15人の命を不本意ながらも奪ったとしましょう。私は彼女を哀れに思っても罰を下さなければなりません……それでもいいんですか？」

唐突に口に出た、謎の言葉……それに動揺する群衆。

「私たちには分かっているんです……。ここで彼女を処刑すればあなたたちが手を汚すことなく口止めができる……しかし彼女を殺せば、あなたたちには私を暗殺するという道は閉ざされるのですよ

？こんな都合のいい人形ソネアを簡単に手放してもいいんですか？ねえ、
そのあなた方！！」

アシユリーナが指差した先には……ムスリの使者があつた。

「……私たちが？何のことかしら……？その子には何の縁もゆかりも無いというのに何故私たちが困る必要があるというのです！？」
サル―シエではない長身の女が前に出て強く言い放つ——その目は怒りに燃えていた。

「お姉ちゃん……！！止めて、殺さないで」

突然ソネアが思い出したように言う。皆の目が一斉にソネアの元へ集まる。

しかしアシユリーナはしゃがんで言った。

「それは出来ない……あなたは罪を犯したから。罪人は——殺人者は処刑になると決まっているの」

するとソネアがくしゃくしゃになって泣き始めた。

「嫌だあ……お父様あ……お母様あ……うう」

その様子を見てアシユリーナが冷たく言い放つ。

「あなた、一緒に遊んだとき言ったわね……『お姉ちゃんみたいな立派な王様になる』って。でもね、私は例え6歳の友達でも容赦なく死刑を下す王様なの……。そうじゃないと王として生きていけないから……。あの顔だけが私じゃないのよ……本当の私は真っ黒な心も持ち合わせているのよ」

そう言つて、執行人たちを呼んだ。彼らは拘束されたままのソネアを大広間の中央へ引つ張つていった。

「嫌だ、嫌だ！！助けてよおー、誰かあー！！」

少女の悲鳴はこだました。誰もが少女の死を想像した。

すると次の瞬間、彼女の体が大きく傾いた。気絶したかと思われたがすぐに、元に戻り縄を引きちぎった。動揺する執行人たちを振り払った後、1人が持っていた剣を奪い彼らを薙いだ。

「危ない、危ない…… ホントにばれてたんだね…… こいつが本気じゃないって。オチビさんの言う通り、こいつが殺されては困るんだよねえ」

ソネアが口を開く…… がその声は彼女のものではなかった。

剣についた血糊を払いながらゆらゆらと彼女が立ち上がる。その目は冷徹でこの状況を楽しんでいるような目だった。

「さあ、ここらで余興を始めましょうか」

彼女はニヤツと笑った。

戴冠記念祭 Ⅱ 4日目 前半Ⅱ（後書き）

ソネアに憑依しているのは何なのか……？

分かっている人にはわかると思います！！

前半の方で飛ばした太陽神を祀る儀式は基本、1日目の儀式と同じです…… 祀る対象が違っただけです

では

戴冠記念祭 Ⅱ 4日目 後半Ⅱ（前書き）

前回の後書きで『ソネアに憑依した』と書いてありましたが、
全なるネタバレですね（汗）失礼しましたm（- -）m

では、後半をどうぞⅡ 3

戴冠記念祭 Ⅱ 4日目 後半Ⅱ

ソネアはニヤツと冷笑する。

「女王様あゝ、あなたは6歳のガキにだって容赦しないって……あれかな、王としての威厳 っていうやつ？ やっぱり血は争えないね」

アシュリーナは無言で見つめる……相手にしたくないということもあつたが、ソネアの言っていることが理解できなかったという点も大きい。

難しい顔をしているアシュリーナを見て、ソネアはニヤニヤしながらまた口を開く。

「あれえゝ知らない？ あんたのお父さんのこと。あいつがボクたちの国を滅ぼしたっていうのは去年分かったはずだよ？ 正確に言うと、ムスリを滅ぼすよう命令したのはあんたの爺さんだけ……あんな老いばれ、指揮している途中で死んじゃってね！ まあなんと情けないっていうか……。爺さんに代わって先頭にたったのはあいつだよ」

ソネアが威圧感たつぷりに話し出す。

「それまで戦況はこっちが有利だった。けどあいつときたら、まず誰を殺していったと思う？ ……女子供だよ。女子供は自分で身を守る術を持っていない……彼女らをまず殺しておけば、相手側は意気消沈するだろうって考えたんだとさ！ まあその策略は見事成功して、男共は混乱に陥ったよ……家族を殺されて正気のものはいないだろう！！ ……ここらでボクの昔話でもしようじゃないか」

「あんたの昔話なんか興味ない……第一、父さんたちはムスリと戦ってないわ。ムスリが滅んだのはつい4年前じゃない。父さんはいつも私の傍にいてくれた……あんたらの方こそ何か勘違いしてい

ないか？」

アシュリーナが敵意むき出しで突っかかる。しかしソネアが声のトーンを一層低めてしゃべりだす。

「お前はただけおめでたい奴なんだよ……自分の幼い娘をわざわざ不安にさせる発言をする親がどこにいんだよ！！だいたい王は戦線でも後ろの方に引き下がって、將軍以下に戦わせるというのが普通だろ？そんなことも知らないのかよ……よくそんなんでも王様やっつけられるなあ！？」

はっはっは、とバカにしたように笑い出した。さすがにアシュリーナもムツとしたが、彼女の言う通りだと思うと、言い返せなかった。

「いいかいオチビさん……。ボクの妹ラーニヤはねえ今生きてたら11歳なんだあ……。勿論生きてたらの話。……言っている意味わかるよね？」

「……あなたは父さんがあんたの妹——ラーニヤを殺したって言いたいのか……？」

「わかってるじゃないかあ……。そういうこと！！ボクがここにいるのはその復讐のため！妹の仇を討たせてもらうよ！！」

最後の方になると激昂した感情がむき出しだ。ソネアの顔は恨み辛みで歪んでいる。

ソネアが体勢を低くし、猛然とダッシュしてくる。常人では捉えきれない速さだ。

「ばさっとするなあっ！！」

剣を上段に構え、アシュリーナの頭目がけて振り降ろそうとする。アシュリーナは目を見張った……。絶対殺される……。！！

ソネアの目は狂気に満ち、彼女の身体能力を遥かに超えていた。

「アシユリーナ様!!」

アンドレアが咄嗟に剣を抜いてアシユリーナの前で防御の姿勢をとる。そのまま階段をジャンプして飛び越えてきたソネアを受け止める…… アンドレアが呻く…… かなりの負荷がかかったに違いない。よろよろと彼は後退したが、ソネアの方は華麗に後ろに跳び、着地した。

「……この国にも出来る人間はいるんだね…… 誰かみたいに主君の皮を被った人間に騙された奴もいるけど」
意地悪くニヤツと笑う。アシユリーナが怒りが頂点に達した。

「ソネアを解放しろ!! その体じゃ身が持たない!!」

「……できない相談だね…… どうせこいつ殺すつもりだったんでしょう? じゃあその手間を省いてあげるよ! この体はボクのものだ……!!」

見せしめのように首に剣の切っ先をあてる…… 先から血が滴り落ちた。

「止めて!!…… 兵士の殺害はあなたが自白したわ…… ソネアに罪はない!! 放しなさい!!」

「ラーニヤはそれでも殺された……!! その時7歳だったわ。彼女にもなんの罪もなかった…… だけどあなたの父親は私の目の前で唯一の肉親^{ラーニヤ}を殺したのよ!!」

再びダッシュしてくる。アンドレアは先ほどの疲労で追いつけない。

命運は尽きた

そう思ったとき、ヨシユアの部屋にいたはずのカイルがソネアを捕まえた。その眼差しは冷たかった。

「邪魔するなあ……！」

ソネアが言い放ち、剣を持った方の手でカイルの腕を切り落とそうとする……が、カイルの方が一歩早かった。手刀で首筋を狙い打った。ソネアの体がガクンとへたり込む。

空には少し欠けた月が南中していた。

戴冠記念祭 Ⅱ 4日目 後半Ⅱ（後書き）

今回は比較的短めのつもりです……つもり、はい。

本格的に戦闘シーンを入れては見たものの、微妙な出来栄です（泣）

次話も楽しみにしてください！！

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 前編Ⅱ（前書き）

月は南中し、夜半を少し過ぎたところ……無理やり日にちを次へ進めました（泣）

というわけで、5日目が始まります！

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 前編Ⅱ

「カイルっ！！」

アシュリーナは嬉しそうに叫ぶ。アンドレアを始めとする賓客たちも安堵の表情を浮かべる。

「姫さん！怪我はないですか？」

「私は大丈夫……ソネアを避難させてほしい……それよりヨシユアは大丈夫なの？」

「兄さんは大丈夫ですよ。さっき物音がしたから、兄さんが行け、って言っただけでやってきました……衛兵！」

カイルはテキパキと駆けつけた兵士たちに指示していく。

「カイル將軍……助かった！礼を言おう」

「いえいえ、何てこともありません！！それよりアンドレア將軍の方こそ大丈夫ですか？相当お疲れのようですけど……」

「ああ……ソネア様に何者かが——ムスリの一味が憑依していたらしく……半端ない力で押されたもので、つい……」

アンドレアが言い終わると同時に、賓客の方からドサツという音と、甲高い悲鳴が聞こえた。

「何事ですか？」

アシュリーナが歩み寄ると、サツと彼女をみんなが避けていった。そして開けた先にあったのは、つつぶしって肩で息をしている黒いフード付きマントを着ている少女と、それを取り囲むようにムスリの使者たちがしゃがみこんでいた。

「ロザ！しっかりして……あれだけ無茶するなって言ったのに！！」

「そうよ……あんなに急ぐ必要はなかったのよ……おかげで計画

が全て水の泡だわ」

……心配しているのか、責めているのか、どちらともつかない声が汗だくの少女に掛けられていた。

「……ロザって言うの、あんた。よくもソネアを悪者にしたてたわね」

「う、うるさい……突然……意識を……引きはがす……な……。体力の2分の1は……確実に……持つて行かれた……じゃないか」喘ぎながら答える。アシュリーナを見上げる目には敵意しか宿っていないかった。

「まっ、計画も私たちにばれちゃったし、お客様の前であんたたちの罪をさらけ出してもらいましょうか……カイル！中央へ連れて行って」

「……調子に乗るなよ小娘がつ！あの方がいずとも、我らがダングラジェなど簡単に滅ぼせるのだぞ……！」

「やってごらんないよ……ダングラジェ王として返り討ちにしていあげるわ」

「なにっ！ふざけるなあ……！」

別の女が抜剣しながらアシュリーナの元へ走ってきた。

「私はロザのようにはいかないぞ……雑魚などには止められない……！！！」

「ばっ、姉様……！危ない……！！！」

ロザが渾身の力で叫び、激しく咳き込む……しかしその忠告を無視して女は走り続ける。

「この恨み……今まで1度足りとも忘れたこなどない……ここで死んでもらおう……！」

しかしまたしてもカイルに妨害された。

「姫様には指1本たりとも触れさせはしない……！！我が剣を受

けよー!!」

カイルとの激しい打ち合いになった。金属音が辺りに響く。

「衛兵！皆様を早急に避難させろ！！この場は危ない！」

アシュリーナが叫ぶ。

「お姫様、よそ見していてもいいんですかね？」

突然アシュリーナの後ろ側から鈴のような音が聞こえた。急いで振り向くと笑顔で血の付いた剣を下けている少女が立っていた。

「ふふ……ざまーみやがれ、ということですよ、あなたには何の罪もないけど死んでもらいます……そうでもしないと姉様たちが落ち着かないので」

表情を変えず剣を無造作に持ち上げ、振り降ろす。

「うわっ」

さつと後ろに避けた……切っ先が目の前を通り過ぎて行った。

「あなたはつくづく運がいいですねえ……本気出しますよ？いいですか？」

閉じていた目を少しだけ開けて、また振り降ろしてきた。

「くっ、こんな至近距離じゃ……できない!!」

「どうしました？やはりあなたは誰かに守ってもらわないといけませんか？」

「う、うるさい!!」

傍に置いてあった剣を掴み、抜剣する。振り降ろされた剣を何とか受け止めた……が、力の差は歴然としていた。

「あっ」

相手に押され、剣を離してしまった。

「サク！やっちまいな!!」

そうカイルと交戦中の女が叫ぶ。

しかしアシュリーナにはその名前に聞き覚えがあった——両
親を殺されたときアシュリーナが放った弓で負傷した女だ。確か……
「ここだ…… たつつけ？」

サクの懐に入り込み、右肩を肘打ちする……すると、相手は痛み
に顔を歪め、頽れた。

やった——そう思った瞬間

「危ない！アシュリーナ様っ！！」

アンドレアにそう叫ばれたとき、アシュリーナは自分の影に覆い
被さる別の影を見つけた。

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 前編Ⅱ（後書き）

続きは中編で……

意外としぶとい戦いになってきました。アシュリーナ様、大丈夫で
すかね？……作者がこんな事言っているようではダメですねw

もうそろそろ「あの方」を登場させるつもりです。。楽しみにして
いてください

よろしくお願いしますm（・・）m

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 中編Ⅱ（前書き）

今回はあんなことやこんなことがあります……説明になってないです
ね。

負傷者が出ます……一人はグロいです。

では、本文をどうぞ！

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 中編Ⅱ

「捕まえた！」

アシュリーナは自分よりも遥かに大きい体に抑え込まれた。いつもなら逃げられるが、相手の抑える力が強すぎて身動きさえできなかった。

くつくつと笑いながら女——サルーシェは見下ろしてくる。

「やっと、捕まえたわ……この時を私たちが待ったか……！」

サルーシェの薄い唇が持ち上がる。それを抑え込まれたアシュリーナがキツと睨みつける。

「アシュリーナ様！！」

アンドレアがアシュリーナの元へ駆けしてきた。

「おっと、あなたの相手は私だよ」

横から新たななる5人目の女が出てきた。……とことん用意周到である。

「あのチビを助けるのは私を倒してからにしないで……まあ、あなたには無理だけど」

「ちいっ」

アンドレアも渋々抜剣し、女の方へ構える。

「アシュリーナ様！なんとか持ちこたえてくださいー！」

「そんな事……言われないでもわかってる！」

……そう強がりを書いてみたものの、アシュリーナは祭儀のために朝早くに起床。後3時間ほどで24時間起きていることになる。寝不足と疲労で9歳の体は悲鳴を上げていた。

一方サルーシェは底なしの体力か？と思わせるほどの力でアシュ

リーナを床へ押しつける。

「抵抗しないのかい？」

そう彼女は薄ら笑いを浮かべながら、さらに腕を抑える手に力を込める……こいつ骨折させる気か？

「つつ！止め……」

アシュリーナが悲鳴を上げかける。腕の辺りからピシッという変な音がした。

「……ああああー！！」

腕に激痛が走る……細い腕は多分骨折したのだろう。

サルーシェが手を離すとアシュリーナは腕を抑えながら転げる。

「くっ！！この……」

痛さに涙が出てきた。

「アシュリーナ様……」

主の変化に気づいたアンドレアが叫ぶ。

「よそ見してる場合か？ほらっ」

アンドレアと交戦中の女が彼の顔へ向けて剣を放つ。

「ちっ」

咄嗟に避けたが頬に赤い一筋が走った。

「よそ見してるから怪我するんだよ」

「黙れ！！何なんだ、お前たちは！？」

「いや、普通にダングラジェ国王の誕生祭と戴冠記念祭に呼ばれた善良な使者ですけど？」

しれっと言い返す。

「嘘だ！ならば何故ヨシユア將軍を攻撃した？」

いつもは大人しい將軍であるアンドレアが憤る。その様子を楽しんでいるように女は笑う。

「実行犯じゃないし。なんでだろうね？多分口ザが間違えたん

だよ、殺す順番を。ホントはあんたが死ぬはずだったんじゃない？
代わりにあいつが傷を負ってくれたんだよ？あんたは強運の持ち主
だったってわけさ」

「……ふざけるなあー!!」

アンドレアが女を薙ぐ。が、掠っただけだった。

「戦場において、感情的になることは禁物。冷静な判断が下せな
くなり、結果敗れることに繋がる……残念でした!」

アンドレアの懷に滑り込み、剣で一刺しする。辺りに鮮血が飛ん
だ。

そしてアンドレアの体が後ろ向きに倒れて行った。

「アン……ドレア……」

アシュリーナは薄れゆく意識の中で呟いた。折れた腕は赤く腫れ
ている。

「まあ所詮あいつの娘……結局私に殺されるのね」

「黙……れ……。私は……まだ死なない……死なない……!!」

「……その気力がどこまで持つか……見物だね」

剣の刃でアシュリーナの首元をなぞる……金属の冷たさが生々し
く感じられた。

「では……あの世で父親に会えるといいわね……」

剣をリズムに合わせて横に振る……タイミングを確認しているよ
うだ。

アシュリーナの目の前に死が迫ってきた……父さん、母さん……
ごめん……仇が討てなかった。

頬に涙がこぼれたとき、不意にサルーシェが剣を落とした。はっ
として見ると、腕に一本の矢が刺さっていた。

矢が飛んできたであろう方向を向くと、衛兵に支えられたヨシュ

アの姿があつた。

「ヨ……ヨシユア……！」

彼の姿を見て安堵した途端アシュリーナは意識を失った。

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 中編Ⅱ（後書き）

次は後編です！

負傷したアシュリーナとアンドレアはどうなるんでしょうか？

終わりが見なくなってきました……。無事完結できるよう頑張りますので、今後ともよろしく願いします！！

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 後編Ⅱ（前書き）

時は夕方。アシュリーナが意識を回復したところから始まります

では、本文をどうぞ！！

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 後編Ⅱ

目が覚めると西日が傾きかけていた。

「う……」

「姫さん…… お目覚めですか？」

呻いた彼女に声を掛けたのはカイルだった。

「カ……イル……か」

起き上がろうとした……が、体が鉛のように重く、腕が痛み起き上がることは出来なかった。

「姫さん…… どうかそのままで」

「うん…… この腕…… 本当に折れたんだ？」

「ええ。侍医に固定してもらいましたので、大丈夫だとは思いますが……」

ふとカイルの体に視線を移す……その体には包帯があちこちに巻かれていた。血が滲んでいるところもある。

「カイル…… それ……」

「ああ、これですか？ 大したことないですよ…… それより……」

カイルは続きを言おうとしない。まさか……！？

「今度はアンドレア將軍が重体です」

…… やっぱりね

「従者が重体なのに見舞いに行くことができない…… なんか情けない」

「そんなことないですよ！ アンドレア將軍も言っておられました…… どうか心配しないように、と」

「…… 何があったんだ？ 私が意識を失った後…… ヨシユアがやつ

て来たところから、私には意識がなかったんだ……あの後どうなったんだ？」

「そうですね……」

カイルはぼつりぼつりと話し始めた。

「エリ様っ！！」

ようやく起き上がったサクが叫ぶ。

「私は大丈夫だ……！それより女王を倒したぞ」

その言葉に、交戦中だった女たちの間から嬉しそうな声が漏れる。

「アシュリーナ……様……」

ヨシユアがか細い声で言う。

「將軍！しっかりしてください！！」

支える衛兵が、今にも倒れそうなヨシユアに言う。

「私のことは良い……それより……」

ヨシユアが指差す方向には、仰臥したまま動かないアシュリーナと、腹部から出血しても尚、戦い続けるアンドレアの姿があった。

「陛下っ！！」

衛兵が叫ぶ。それを受けた矢を抜きながらサルーシェ……いや、『エリ』と呼ばれた女が見ていた。

「心配するな。まだ死んではない……腕は折らせてもらったがな」

しれっと返されヨシユアはキツとエリを睨む。

「お前がやったのか……！」

「まあね」

「……おい衛兵。もう一本弓をくれ」

手を出す。が、そんな無茶な！？と衛兵に言われた。

「將軍は本当はまだ安静にしていなくていけないのですよ！？少

しだけというから連れてきたものの……それだけは許しません！」

「……ちっ」

舌打ちをして、衛兵を睨んだ。その目——線のような細い目に衛兵は竦みあがる。

「役に立たん奴だな……」

腰に下げていた剣の柄に手を伸ばす。

「手負いだからってなめるなよ」

「ほあゝお前が来るのか……てっきりカイル將軍が来ると思っていたよ」

「望み通り行つてやろうか？」

カイルがエリの元までやってくる。確かに交戦していた女は……肩から大出血をして蹲っていた。

「なんなんだ、お前？ 姫さんといい、アンドレア將軍と言い……」

何の恨みがあるのか？」

「それは勿論」

カイルが綺麗に被せて言った。

「ムスリ滅亡の仇か？」

「そうだ……このままでは主上が浮かばれない……！！」

「あのさあ……そういうのって《八つ当たり》って言うんじゃないのか？」

「黙れ……《八つ当たり》ではない！ れっきとした仇討ちだ！！」

エリが怒りをあらわにしてアシユリーナを蹴飛ばそうとする。しかし、それは叶わなかった。

「エリ様！ 大変です！！」「あの方」が……来られます……！！」

エリの顔が強張る……明らかな動揺だ。一呼吸置いた後言った。

「……それは本当か？」

「そうです！」

エリは少し考えた後、踵を返し大広間から出て行った。

「待てー！」

カイルが叫ぶ。エリは立ち止まり応える。

「……今お前たちは殺されなくても、どうせ明日は死ぬ……寿命が延びたな」

フツツと笑う。

「明日はせいぜい足掻くことだな……無事なのはお前しかない。女王も無防備だ……残念ながらこの国は砂漠の砂と化すだろうよ……楽しみにしていなさい」

そう言つてエリは仲間たちと出て行った。

はぁーつとアシユリーナは息をはく。

「サルーシエの本名はエリ……やっぱり偽名だったか。そして……」

……明日その『あの方』というのが来るのか……。カイル、何か思い当たる節は？」

「ないです」

「そう……ソネアはどうなった？」

「先ほどまで起きていましたが、また眠りました……姫さんにごめんなさい、と言っていましたよ」

「そりやどうも」

「兄さんは無理が祟って発熱してましたが、もう下がったことでしょう」

「……怪我人は寝てればいいものを。カイルも疲れたでしょう？もう今日はお休みなさい」

「え……でも」

「でも、じゃない。あんたは今日1番働いたんだからもう休みなさい」

「……わかりました……姫さんもお大事に」

はいはい、と手を振ってアシユリーナもまた深い眠りへと落ちて行った。

戴冠記念祭 Ⅱ 5日目 後編Ⅱ（後書き）

長文すみませんでしたm（- -）m

6日目について『あの方』が出てきます！

更新はいつになるかわかりませんが、楽しみにしててください

ありがとうございました♪

戴冠記念祭 Ⅱ 6日目 前半Ⅱ（前書き）

6日目に入りました！

予告通り『あの方』が登場します

では本文をどうぞ

戴冠記念祭 Ⅱ 6日目 前半Ⅱ

アシュリーナはもう既に起きて大広間へと向かっていた。

王宮はいつにも無く静かだった。それは多分賓客は外出を控えるように伝達し、ダングラジェの武官・文官、侍女などにも必要最低限の外出しか認めていないからだろう。

腕に痛々しいギブスを巻き、険しい顔で歩き続ける。すると途中でカイルに出会った。

「姫さん、おはよう」

「おはよう……アンドレアとヨシユアのところには行っただの？」

「ええ勿論……將軍は寝てましたけどね。顔色も昨日よりは格段に良かったですよ。兄さんは相変わらずです。熱は下がったからいい、って支度してましたよ……無理するとは言っておきましたがね」

「それでいいよ……『あの方』とやらはもう来てると思う？」

「……衛兵たちが騒いでないからまだじゃないんですかね？」

無言のままアシュリーナは大広間へと入って行った。

大広間にはまだ誰もいなかった。

「……あいつらもまだ来てないってか……」

すたすたと玉座の両隣にある神像へ向かう。そしてそれに向かつて跪く。

「……今日こそは私たちに助力を願います……父さんと母さんと……犠牲になったみんなの仇を討ちたいんです……どうかお願いします」

必死に祈っている姿は小さかったが、なにか神々しいものを感じた。

そこへヨシユアが入ってきた。

「アシユリーナ様……ご無事ですか」

「ヨシユア……お前、無理するなど言っただでしょう！何でちゃんと休まないの！？」

「……貴女様には私の気持ちがわからないのです」

「なんだって？」

「一人だけ刺客の刃に倒れ、肝心な時に出勤できなかった……將軍なのに務めを果たせないこのやるせなさ……貴女にはわかりませんか？」

「……わかるさ」

ヨシユアは細い目を少しだけ開く。

「この国の王なのに私は誰かに守ってもらわないと王座に座ってられない……自力でするには私はあまりにも非力で小さい人間なんだ……それがお前にはわかるか？」

「……わかります……すみませんでした」

ヨシユアは俯いた。アシユリーナはヨシユアにそっと抱きつく。

彼もそれに応えてただ佇んでいた。

「もういる……あつ、ヨシユア將軍がいる！！元気になったんだねえ！よかったね」

体力を回復したロザが声を上げる。その後ろからゾロゾロとムスリの女たちが出てきた。しかし若干人数が少なかった。

「カイル將軍のおかげで戦闘要員が減ったわ……まあ今日は『あの方』がお見えになるから、どうってこともないけど」

1人の女がクスツと笑う。

「『あの方』って誰なんだ？」

「『あの方』……今まで5年間の間に3個国を滅ぼしたお方よ」

「……それって本当か？」

「本当かどうかはこれからわかることじゃない？」

「ふざけないでほしい……」

ヨシユアが弓をつがえ、カイルが抜剣する。しかしロザが思いっきり手を振る。

「ちよつと！今日は『あの方』が来るまで待つてないと、体力の無駄だよ！ボクだって嫌だよ……乗り移る奴いないし」

「なんだと……」

今にも2人が飛びかかりそうだった……が、そこでサクが歓声を上げた。

「見て……！とうとう来られたわ……！」

アシュリーナたちは一斉に振り返る。そこには馬に乗って優雅にやって来た1人の少女がいた。見た目は15歳ぐらいの小柄な少女だった。とてもじゃないが国を簡単に滅亡させるような感じじゃない……しかし何やら異質な雰囲気をもが感じた。

少女はみんなの前までやってくると、馬から華麗に飛び降りた。そしてフードを払う。

「女王陛下、ごきげんよう」

そう笑いかけた彼女の目は薄紅と緑の神秘的な瞳だった。

戴冠記念祭 Ⅱ 6日目 前半Ⅱ（後書き）

どうしてもオッドアイな人物が欲しかったんです……許してください（何を？）

では、読んでくださりありがとうございましたm（- -）m

戴冠記念祭 Ⅱ 6日目 後半Ⅱ（前書き）

ついに『あの方』も登場し、物語は急展開を見せます

では、本文をどうぞ

戴冠記念祭 Ⅱ 6日目 後半Ⅱ

「女王陛下、ごきげんよう」

神秘的な瞳オッドアイの少女が言う。ムスリの女たちはその姿を認めると走り寄って行った。

「宗主様……ご無事でしたか」

「ええ……それより、あの子が立っているということは任務失敗かしら？」

彼女らはその冷たい声に体を強張らせる。

「……申し訳ございません……しかし、ここの將軍を2名負傷させることができました」

「言い訳はいいわ……私は結果だけを知りたかったの」

くつ、と声を漏らしその女は引き下がる。そして少女はエリの元へ悠然と歩いて行った。

「エリも良い様ね……こんなに傷を受けて……」

「すみません」

「他の子も何やってるのかしら」

その一言にみんな一様にしゅんとなる。

「お前は一体誰だ？」

アシュリーナは少女へ尋ねた。彼女はゆっくりと顔をこちらに向ける。

「ああ、挨拶がまだでしたね」

につこり笑って続ける。

「私は『神々の黄昏』ラグナロクと申します」

深々とお辞儀をする。しかしアシュリーナの顔は険しかった。

「そんな趣味の悪い名前にする親はいないだろう……私は組織名を訊いているのではない。貴女の名前を訊いているんだ」

「私の名前、ですか」

『神々の黄昏』と名乗った少女は考え込む。そしてしばらくした後解答した。

「私は名前を捨てたんです……強いて言うなら『マリア』、とでも呼んでもらいましょう」

「『マリア』、か……変な趣味だな」

イエス・キリスト

『マリア』……遙か昔この世に救世主を産み落とした聖母の名前だ。彼女は慈悲の象徴であり……神たる救世主の産みの親、つまり新しい世界の根源に位置するものだ。

ラゲナロク

わざわざ組織名を『神々の黄昏』とするのには、神が見限った国は滅ぼされる……文字通り、国は神々の黄昏ラゲナロクを迎えるということなのだろうか。自分たちが神になったつもりか？

「では『マリア』……なぜ貴女は我が国を滅しようとするのだ？」

「別に……私が指示したわけではないわ。ただ私は手助けしているだけよ」

クスクスツと笑う。

「私たちは何かしらの絶望を抱えて集まった者たちで出来ているの……一個人の時もあるし、この子たちみたいに集団の時もある……復讐の種に私が水をやっている、それだけのことよ」

「楽しそうに笑う……笑うところじゃないだろうか！」

「そうねえ……ここは一筋縄には行きそうにもないわね。思ったより頑張ってるわ」

「何っ！」

カイルとヨシユアが反応する。それを見て、また面白そうに笑う。
「一旦私たちは引きましょ……何も連れて来なかったから、さすがにここで滅ぼすことは出来ないわ……何事にも用意が肝心」

『マリア』は翻つて自分が乗ってきた馬に乗る。

「今度来るときは……そうね、バジリスクでも持つてくるわ……
そうすれば、反撃できないでしょうし」

その言葉に衛兵たちが顔を強張らせる。バジリスク……伝説上の妖怪を彼女らは手にしているということなのか？——そういう動揺が走る。

「エリ……他の子も帰るわよ」

乗馬したまま言い放つ。それにエリたちは従った。

「またいつか会えるといいわね」

「良くないわ……貴女たちは砂漠で野垂れ死にしてくれた方がいわ」

「まあ、そんなこと言うの？ 酷い女王様ね」

また笑った……彼女の敵はまるでいないかのようだ。この状況でさえも楽しんでいる……そんな雰囲気を出していた。

「では……私に会う前に死なないでね」

彼女らは去って行った。それをダングラジエの女王とその部下一同が見ていた……アシュリーナの顔はいつにも増して険悪だった。

戴冠記念祭 Ⅱ 6日目 後半Ⅱ（後書き）

「バジリスクってなんですか」

そんな方がいらっしやるかと思いますが、某小説に載っている説明を書かせて頂きます。

「バジリスク」

ヨーロッパ及び中近東や北アフリカでは、バジリスクが世界で最もおぞましい生物だとされている。だが、バジリスクを見た者はほとんどが殺されてしまうので、その姿は想像で描くほかない。

雄鶏が産んだ卵をヒキガエルに少なくとも1日は温めさせる。すると生まれてくる。その鳴き声は聞いた者の麻痺体を麻痺させ、その視線は植物を枯らし、飛んでいる鳥を焼き殺す。

大きさは蛇よりも小さいが、上記の威力は凄まじい。

では、次話も楽しみにしててくださいね

戴冠記念祭 Ⅱ 最終日Ⅱ（前書き）

ついに戴冠記念祭も最終日を迎えました

長かったです、これで終わりです（話はまだまだ続く予定ですけどね）

では、本文をどうぞ

戴冠記念祭 Ⅱ 最終日Ⅱ

嵐が去った翌日、賓客たちは自国への帰路に着くことになった。アシュリーナが彼ら一人一人に挨拶していく。

「今回はどうもすみませんでした……貴国を危険な目に合わせるなんて……私どもの監督不行き届きで御座いました。まことに申し訳ございません」

深々と頭を下げると、賓客たちは笑って手を振る。

「そんなことないよ……陛下はまだ幼くていらつしやる。初めての失敗で嘆くことないよ？大丈夫だ！奴らがまた貴国を攻めてきたら、いつでも言ってくれ。すぐに助けに行くからな」

「ありがとうございます」

「そんなかしこばらなくていいよ！小さい子は何にも悩みがないように笑ってるのが一番だ！では……陛下お元気で」

優しい一言に涙が出そうになるのを堪え、アシュリーナはニッコリ笑った。

そうだ、その顔だよ、と先ほどの男は言った。他の賓客もそうだ……何かあつたら援護するから気兼ねなく言ってくれ、とみんな笑顔で言ってくれた。

賓客たちの見送りが済んだ後、アシュリーナは深い溜息をこぼす。

「いろんなことがありすぎて……わけわかんない」

不意に涙がこぼれる。

「姫さん、しっかりしてください……大丈夫ですよ、僕たちはいつでも姫さんの傍にいる。大丈夫だって……」

カイルがいつもの調子で励ましてくれた。

「ありがとう」

さらに涙が溢れ出す。優しい臣下に恵まれたことに感謝しかなかった。

その時、タルカシが走り寄って来て、アシュリーナとカイルに向かって叫んだ。

「アンドレア將軍がお目覚めになりました！！」

「アンドレア……ごめんなさい」

アシュリーナがベッドに横たわるアンドレアに向かって言った。

「ごめんなさい……って何がですか？」

「私の事情に無理やり引き込んだせいでアンドレアが大怪我してしまった……本当にごめんなさい」

「いやだな……今日はやけに殊勝じゃないですか……いつものアシュリーナ様に戻ってくださいよ」

血の滲んだ包帯を腹部に巻いたまま、アンドレアが笑って答える。

「それに、これはアシュリーナ様だけの事情ではないんですよ……貴女の父上様・母上様の臣下でもあった、私たちの仇討でもあるんですから……こんな大きな荷物、貴女の小さい肩では背負いきれないでしょう？……強気のアシュリーナ様も良いですけど、たまには私たちを頼って、甘えてくださいよ」

「アンドレアの……バカっ」

アシュリーナがワンワン泣き出した。それをアンドレアとカイルが微笑ましそうに見守る。丁度その時入ってきたヨシユアは何が起きているのかさっぱり分からず、啞然としていた。

「それで、カイル將軍」

アンドレアが口を開く。

「あのムスリの女たちは一体何者だったんだ？」

「ああ……昨日奴らの宗主なる人物が来てましたよ。歳は……14・5ぐらいだったな……。そいつも女なんですけど、またいずれ来るって言うて帰って行きましたけどね」

「そうか……まったくもって変な輩だな」

「カイル……奴らはいつ来るって？」

「それがさあ、兄さん。わかんないんだよ……ほら『天災は忘れたころにやってくる』っていうノリなんじゃないの？」

「おい……まあそれにも一理あるな」

「とにかく、奴らがいつ来てもいいように我々は一層精進せねばならないってことですな。これからアシュリーナ様をお守りし、この国が繁栄するように頑張りますよう……ね、アシュリーナさ……」

アンドレアが言葉を切らす。彼の視線の先を辿ると……さっきまで泣いていたアシュリーナがベッドの縁でスヤスヤと寝ていた。

3將軍は互いに顔を見合わせ、フツツと笑う。

「……いろんなこともあってアシュリーナ様もお疲れなのだろう

……ほら、タルカシ殿！アシュリーナ様を寢室へお運びください」

「はい……まあアシュリーナ様！こんなところでお眠りになって

……本当にお疲れ様でした」

タルカシが優しくアシュリーナを抱きかかえる——ダンゲラ

ジェにも平和な日々が再び訪れようとしていた。

戴冠記念祭 Ⅱ 最終日Ⅱ（後書き）

はい、いよいよ次回から新章突入です

ちよつとだけネタバレすると…… 5年後の世界が舞台です！
当然アシュリーナは14歳で……ここからはトップシークレットです（笑）

では、次話もお楽しみに♪

長い間ご精読ありがとうございましたm（・・）m

アシユリーナの報告（前書き）

予告通り14歳になったアシユリーナからこの5年間にあったことを報告してもらった、という無責任な回です……（笑）

では、本文をどうぞ

アシユリーナの報告

14歳になりました……戴冠記念祭から5年が経ったということですね（笑）

まず、一番変わったことと言えば……ヨシユアが結婚したことですかね？カイルも結婚したんですけど、別に「ああそう」で終わりますよね？あのヨシユアがですよ！？聞いた時には我が耳を疑ったものです……しかも双子が出来ましてねえ……実はムッツリス。ベだったということかしら？名前は確か、女の子のほうがシャイ、男の子のほうがネルだったような……？どっちも顔が似てるからわからないですよ。というか双子の片割れの子供も双子というのは、微妙ですよ。うちに双子が2組もいるんですから……ここは学校じゃないんだよ？……失礼。因みにカイルのところは子供はまだいなくて、アンドレアは依然独身ですよ。彼曰く「募集中」とのことですので、みなさんいかがですか？まあ私はお勧めしませんけどね

あの『神々の黄昏』^{ラケナロク}たちはこの5年間ここには来てませんね……私の最後の言葉通り野垂れ死にしてくれたらいいんだけど。調査に行かせたら、死体なんて残ってないし、原因不明で滅んだ国もいくつかあるから、生きてるんでしょうね……まったく鬱陶しい奴らだ。どこかで返り討ちに遭えばいいものを……そしたら私たちの手を省くことができますしね

王宮にいるみんなはいつも通り元気です……ホントにうるさいくらい元気です。原因はチビが2人増えたからでしょうね。

私は海辺の国、トステムの王の戴冠1周年記念で呼ばれたから行くことになりました。初めて海を見るんです！！楽しみですねー）
笑）

独身男が私を呼んでるんで、この辺で。さようなら

アシユリーナの報告（後書き）

……こんな感じです 相変わらずダングラジエは平和です！

ではノシ

出発前の王宮（前書き）

前回は書きました通り、アシュリーナたちは海辺の国、トステムに
出発するんですが、その少し前のことを書きたいとおもいます

出発前の王宮

「アシュリーナ様！準備はよろしいですか？」

タルカシの声が響く。

「大丈夫だつて！全部侍女に任せただから」

14歳になった女王、アシュリーナが答える。

「全部つて……アシュリーナ様！！」

「ああゝうるさい、うるさい……少しは黙つて。まったくタルカシはいつも怒鳴つてばかりなんだから……」

タルカシの怒りから逃れるためにアシュリーナは剣を持って部屋を出た……自由奔放な性格は少しも変わってないようだ。

中庭に出ると、抜剣し、それを振り始めた……練習しているのであつて、周囲を傷つけようとしたわけではないらしい。

5年前の日に誕生日の贈り物として例の女——エリにもらったものだ。

——いつか私を超えてみせて

その言葉が今も耳に残っている。それを胸に今までアンドレアたちと練習してきたものだ。かなり上達している。あの頃はアシュリーナも小さく剣はそれなりに大きいものだったが、今は背も充分伸び、すらりと伸びた手にフィットする大きさだ。

「「あしゅりーなさまあゝ」」

幼い声が聞こえた……二重奏。これは誰が何と言おうと間違えない。ヨシユアの子供、シャイとネルだ。

「まあ、よく来たわね……ちゃんと名前を憶えてくれたし！いい子ね、シャイ、ネル！」

名前と顔が一致しないから、なるべく一緒に名前は言う。そして走り寄って来た2人の頭をなでると、2人は擦ったそうに笑った……まだこのころは可愛い。でも将来あんな堅苦しい父親に似ないでもらいたいものだ。

「誰が堅苦しい父親ですか、アシユリーナ様？」

ヨシユアが現れる。

「勿論あなたのことですけど？違ったかしら？」

負けじと言い返す……ヨシユアが眉をひそめた。

「いい加減にしてくださいよ……私をからかうのは止めてもらえませんか？妻からもからかわれるんです」

「まあいいことじゃないの！私が奥様にもっとヨシユアの弱点を言っておいてあげるわ」

ヨシユアの顔が青ざめる……そして深い溜息をついた。

「おとうさん！あそんで！」

シャイとネルがヨシユアに駄々をこねる。

「駄目だ……お父さんはトステムに行く準備をしなければいけないんだ」

……自分で『お父さん』って言うてる……プツ（笑）

「なんですか、アシユリーナ様……？」

「いや、なんでもない……よし！シャイ、ネル！私と遊ぶか！？」

「やったあ〜」

ぴとつとアシユリーナに張り付く。

「ほら、ヨシユア！準備して来い」

「わかりました……2人ともいい子にするんだよ」
ヨシユアが優しく言った。チビたちは元気よく返事をした。

……出発2時間前のことであつた。

出発前の王宮（後書き）

はい、こんな感じです

勿論シャイとネルはお留守番です（笑）ヨシユアの奥さんは一体誰なんでしょうか……？いつかは明かすつもりですw

こんな感じで新章が始まります！

旅路（前書き）

いよいよ出発です

さて、今回はゆるーい感じで書きました（笑）

それでは本文をどうぞ

旅路

チビたちと遊んでせっかくの服が汚れてしまったのでタルカシにお叱りを受けたが、いつもの通りスルーして、先ほどアシュリーナ一団は出発した。

今回はダングラジエからはかなり遠く、砂漠を超えたところにある、海を臨む国トステムの新王の即位1周年記念に招待された。5年前に自分も1周年記念でこの先王に来てもらったような気がするので行くことにした。というより彼女はそんな儀式よりも、初めて海を見るという体験に心が動いたようだが。

「……どうにかなんないのこの景色！どこ行っても砂の海しか見えないじゃない！！」

そんな当たり前のことを言われ従者は困惑していた。

「アシュリーナ様……まだ出発して何時間も経ってないのですよ？というよりも我が国は砂漠の中心にあるのですから、まだまだ砂漠を超えることは出来ません……少なくとも5日はかかるでしょうね」

アンドレアが答える。それにアシュリーナはふてぶてしく言った。

「……行進速度を速めることは出来ないの？もう私飽きちゃった」

「……アシュリーナ様……飽きたは無いでしょう？貴女は砂漠を統べる王なのですよ？ここも貴女の領土なんですよ？」

「だったら切り捨てようか……代わりにオアシスらへんをもっと手に入れようか」

そんな恐ろしい独白をするアシュリーナを見てアンドレアが溜息をつく……それ本気で言ってますか？

「冗談に決まってるでしょ！そんなバカげたことするわけないでしょうがっ！！……ホントあんたって頭が固いよね」

ケラケラ笑いながらアシュリーナが言った。

「……まあ旅は始まったばかりですから大人しくしていてください」

うはぁーと溜息を再度ついた……溜息をつくな、とアンドレアの頭に拳骨が落とされた。

その日の夜……澄んだ空に星が輝いていた。

「やっと1日が終わった……あと4日も砂の上かよ！背中痛いし、もう嫌」

アシュリーナが砂の上に立てたテントの部屋で嘆く。

女王なので他の奴とは扱いが違う。彼女はラクダに引かせた狭い御車で移動するのだ。お蔭で足は延ばせないし、とにかく身動きを取りづらいから姿勢を変えることなんて不可能に近い。しかも降りたいと言えば例の3将軍に止められる……とにかく息が詰まった。

「そんなこと言わないでください」

そう言いながらヨシユアが入ってきた……その後ろにカイルがいた。

「なに勝手に入ってきてんだよ」

「別にいいじゃないですかぁ。何もするわけじゃないし……それよりこれ」

カイルが籠を差し出す……中には新鮮なブドウが入っていた。

「これどうしたのよ……ここはブドウなんか一房もならない不毛地帯のはずよ」

ニパァーっとカイルが笑う。

「さつきキャラバンの人たちに会ってね、これどうぞって」
「ふーん」

そう言いながら一粒口に運ぶ……瑞々しくて甘い。

「おいしい……2人とも食べなよ」

そう言っただけで差し出すと、どうも言いながら2人もつまみ始めた。

「これで機嫌直してくださいよ？まだ先は長いんですから」

カイルがブドウをパクパク食べながら言う……彼だけでももう半分は食べてそんな勢いである。

「はいはい、わかりましたー……もう寝るから出てって」
シッシと手を振る。

「ではこの辺で……おやすみなさいね」

ヨシユアが一礼して、その後ろにカイルがついていく……手をピラピラと振りながら。

2人が出て行ったあと、いつも通り彼女はまだ見ぬ海と若い王を想像した。

海の国の王は自分と同年代らしい。その王が統べる海とは……？

一時思いを馳せてから、アシユリーナは眠りについた。

旅路（後書き）

トステムの王様はどんな感じなんでしょうか……

砂漠で育ったアシュリーナはまだ「海」を見たことがないんですね

（・ω・＊

私も厳密にいうと海に行ったことはありません……見たことはあるんですよ？ なんとって住んでるところが海に囲まれていますから（笑）

では

潮の匂い（前書き）

旅の詳細はすっ飛ばして、いきなり5日目の話ですw

その間特に何もなかったので安心してください（何に？）

では、本文をどうぞ

潮の匂い

毎日ちまちま歩いて、ようやく4日目が終わわり5日目 came。

「今日でこの旅も終わりね……やっとなるかあ」

アシユリーナが名残惜しさでなく、嬉々とした声を漏らす……それをばっちりアンドレアが聞いていた。

「何喜んでるんですか？トステムに着いたら、アシユリーナ様の嫌いな祭典があるんですよ？しかも全日程いるんですから早く帰れませんよ？」

フツフツと怪しい笑みをこぼす。

「わかってないなあ……確かに私は祭典が嫌いだ！だけど今回の主役は私ではなく、トステムの王なのだ！！私はちょこんと隅の方にいて、嫌になったら海に行く……寧ろ楽しみだぞ」

……まったく何考えてんだ、この女王様

そう従者全員が思った。

コホンと咳払いしながら、アンドレアが代表して言う。

「アシユリーナ様……海を見たことが無いから楽しみになされているのわかります。が、私たちは招待されたのであって、謂わば『賓客』なのです……祭典がつまらないからと言って、途中で抜け出すなんてナシですよ」

「こういうのはばれなきやいいんだよ？知ってる？」

アシユリーナがしれつと言り返す。それに、と言葉を続ける。

「あんただって楽しみなんでしょう？ここの国は美人が多いらし

いから……あんたこそ物色しないでよ？ダングラジエの將軍が他国の記念式典に行つて女を連れて帰つた……なんて恥ずかしいことしないですよ」

アンドレアが顔を真つ赤にして反論する。

「アシュリーナ様っ！なんてことを仰るのですか！？それぐらいのことは心得ております！私は……断じてそんなことを……！あなたのお父上様に顔向けができなくなります……！」

「大丈夫よ。あんたがそんなことするはずがないっていうのは私が一番知つてゐるから……まあ、そのうちいい人見つかるよ（笑）」

「……最後の一言は余計です」

アンドレアがしゅんとなる……意外と気にしてるのか？まあ大丈夫でしょう！まだ若いから……！

そうこうしているうちに、ダングラジエでは嗅いだことのない独特な匂いが漂つてきた。

「臭い……」

アシュリーナが思わず鼻をつまむ。するとヨシユアとカイルのテンションが少し上がった。

「アシュリーナ様！これは潮の匂いですよ」

「潮……？」

「そうです……トステムに近づいてきたという証拠でしょう……もうすぐ海も見えると思いますよ」

それを聞いて、やったあと声を上げて喜んだ。

「これが……海の匂い……！！」

しょっぱいような生臭いという変な匂いが漂つてきたがアシュリーナは気にしない……初めて海の匂いというものを嗅いだ彼女にとつては、とても新鮮なものだったからだ。

しかししばらくするとやはり我慢できなくなったのか、顔をしかめる。

「臭い……です……早く着かないの？」

「もうすぐですよ！……懐かしいなあ」

カイルが呟く。

「どうして？」

「義父に連れて行ってもらったことがあるんですよ……寂しいだろっからって」

この双子は幼いころ家庭の事情で養子に出された。その里親は道場を開いていて、多くの門下生を抱えていた。そして大層な旅行好きだったとか。

「僕たちも海を見たくて2人で一生懸命頼んだら連れて行ってくれました……いやあ、懐かしいなあ！」

心なしかヨシユアの顔も綻んでいる……2人にとっていい思い出だったことには違いない。

「陛下！！町が見えてきましたよ！！」

そう先頭を行っていた兵士たちが嬉しそうに戻ってきた……あんなたちも見なかったんだね。

潮の匂い（後書き）

やっとトステムに着きました

次回は王様も登場する予定です……予定ね。

では、ありがとうございましたm（・・）m

トステム王（前書き）

はい！予告通りトステム王が登場します！！……出番少ないですけど（笑）

では、本編をどうぞ

トステム王

「ダングラジェ王国の国王陛下。到着をお待ちしておりました」

トステムに着くと、正装した男たちがアシュリーナたちを出迎えた。

「お心遣いありがとうございます」

アシュリーナもそれに応えた。後ろから続々と同行してきた人間が続く。

全員が来るのを確認して、男たちが笑顔で言った。

「それでは、みなさまのお部屋へご案内いたします。式典は明日行われるので、今日は長旅の疲れをお取りください」

丁寧にお辞儀をされた。それを見た兵士たちが、おおっと声を上げる……丁重な処遇が初めてだったのか、それとも自分たちがしたことが無いのか……いずれにせよ恥ずかしいから声は上げて欲しくなかった。

案内人の男がニコツと笑ってアシュリーナたちを先導していった。

部屋は白を基調としたシンプルだが美しいものだった。備え付けである窓からは碧く輝く海が見えた。

「すごく綺麗ですね……」

「そう言っていただければ幸いです。我々も自慢の部屋なのです。後でトステム王が伺いますので。何かあったらお気軽にお申し付けください」

一礼して彼らは去って行った。

「トステムってすごいなあ……」

アシユリーナが呟く。そうですね、とアンドレアが返す。

「私ここにずっといてもいいな……って、嘘に決まってるでしょ！そんな顔するな、うつとおしい」

先の発言にアンドレアが顔をしかめたので、慌てて訂正した。

「アシユリーナ様は婿入りされても、あなた自身が嫁入りすることはないんですよ？」

「いや……そういう意味じゃないんだけど……というか私結婚する気ないし」

「え？……血が絶えますよ？」

「それなら遺言で『ネル』に継がせると言うから安心しなさい！」

「お止めください、アシユリーナ様……あれに王位を渡すなんてバカなことを」

「黙つときなさい、ヨシユア！どうせ私が死ぬ頃には、あんたは既に墓の中だからいいのよ！！」

「なんと……」

途中参戦したヨシユアも呆れ顔をする……絶対こつするからな！

「いやあ……これは驚いた！ダングラジエの皆さんはとても仲がよろしいですね！」

突然背後から声がしたので、ビックリして（盛大に喧嘩していた）3人が振り向いた。

そこには綺麗に手入れされた金髪に健康的な小麦肌をした、少年が立っていた。その目は海のように青かった。

「どちらさまでしょう……？」

アシュリーナが取り繕ったように声をだす……先の発言からして絶対聞いてたな、こいつ。

少年がああ！と声を上げてニコツと笑う。

「申し遅れました。私がこの国の王、レンです。^{トステム}以後お見知りおきを」

この国の専売特許であるスマイルを見せる。

……ちよつと待って？今この人自分がトステムの王って言ったね

……？最悪だ……さっきの会話、完全に聞かれてたよ！？

アシュリーナはフラツとなりそうだったが、なんとか堪えることができた。でも多分、顔面蒼白。ヤバい……！

トステム王（後書き）

出しましたよ！ははは……

次回はちゃんと出しますよ！もっと出番を増やしますよ！！

では次話もお楽しみに

春嵐到来（前書き）

……お久しぶりです　？前の話で書くべきでしたがすっかり忘れていましたw

覚えていてくださって感激です（泣）

それでは、今回は意味深なタイトルです……え？そうでもない？まあそう言わずに、ね（笑）

春嵐到来

「この度は私の即位記念祭にお越しいただきありがとうございました」

ありえないほど丁寧に挨拶された……去年そんなこと言っただけ？絶対言っていないな、うん。少なくとも、団体一つ一つには言っていない。

「こ、こちらこそお招きいただきありがとうございます……この国は何もかも美しくて気に入りましたわ」

今の私にはこれしか言えない……最高レベル。満点。

そんなアシュリーナの様子を気にする風もなくニパツと笑ってレンが言った。

「そうですか！いやあよかったです！……あ、どうぞ。御掛けになってください」

すつ、と備え付けられてあるソファアに手を差し出す……言葉もさることながら所作も自然で、ホントに王様って感じがする。私と比べるなよ？

改めて顔を見る……キリツとした顔。いつも海に出ているのかと思うほどその肌は日焼けしていた。でもアシュリーナたちみたいな砂漠の民の焼け方じゃない。優しい太陽の恵みを受けた感じ……説明になってない？それは気のせいですよ。そして輝くような金髪に海のように深い青色……顔全体で トステム を表しているかのようだった。

そんな顔にも一つ気になるものがあつた……頬に入った、3本の線。互いに交じり合つて * のような印になっていた。まだ新しい傷なのか、周りの肌がほのかにピンク色をしていた。

それに視線を集中させていると、レンがそれに気づいたようだった。そして恥ずかしそうにポリポリ掻いた。

「これは、トテム王の証なんです……男王は頼に、即位したときに入れるんです。最も女王はこの国にはいまだかつて現れていないので……」

「そうなの……へえ……」

しまった！やらかした……もう普通にアンドレアたちと話しているようなノリになっちゃったよ！？

……クスクスと笑われた。

「確かお名前はアシュリーナ様、でしたよね？」

「はい……」

「噂通り、本当に可愛らしい方だ」

「はい？」

「いえ……去年はわざわざお招きいただいたにも関わらず、お伺いすることができなかったので、今日までにお会いした諸国の王の方々にお尋ねしたんですよ。自分と同年代の女王陛下はどのような方なのか、と。」

「……それではみなさま『可愛らしい方だ』と？」

「ええ。噂にたがわず、可愛らしいですね」

ニコツと笑う……お世辞？お世辞だよね？

そう思ったのになぜか顔が真っ赤になった。

社交辞令 という言葉があるように、そういうものは大抵間違っていることが多い……今回のことも間違いという方針で。うん、そうしてほしい。

そう自分に言い聞かせ落ち着こうとする……が、依然として顔は赤い。それを見てレンは笑った……が、カイルがむっとした。

「レン様……アイルダから国王陛下がお見えになりました」

丁度その時、トステムの、あの案内係を務めていた男たちがやって来た。

「ああ、そうなの？じゃあすぐ行くよ」

彼らに声を掛けた後、ニッコリ笑ってアシュリーナたちに言った。
「では失礼しますね。どうぞごゆるりとお過ごしください……本日
はまことにありがとうございます」

ソファアールから立ち上がり、悠然と立ち去って行った。それを思わず目で追ってしまった。

不機嫌そうなカイルがボソッと呟く——アシュリーナ様に春嵐が来そうだね。

春嵐到来（後書き）

カイル嫉妬。そんなキャラにした覚え無いんですが、自然とそうになりました（笑）

『春嵐』が何を指しているかもうお分かりですね？この章ではこんな感じで話を進めていきたいと思ってます

では、次話もお楽しみに

不機嫌到来（前書き）

前回の続きです……多分。

今回もドタバタ劇です（笑）そしてレンとその側近も最後の方で出てきます……どんな側近なのでしょうかね？

では本文をどうぞ

あ、それとついに本作を読んでくださった方が延べ人数で1000人を超えました

みなさんありがとうございます！！まだまだ続く予定なのでこれからもよろしく願いしますm（- -）m

不機嫌到来

「姫さん！なんかあい……じゃなかったトステム王って僕とキヤラ被ってません！？」

そんなことどうでもいいよ……別にトステム王とあんたのキャラが被っていいように被っていいが。

「そんなことないです！なんか僕の存在感が薄くなりますよー」

「？」

「陛下。声漏れてます」

「あっそう」

完全に上の空。

『噂にたがわず、可愛らしいですね』

笑顔のトステム王……忘れられない、たとえ社交辞令だとわかってても。

そんなアシュリーナを見て、カイルが文句を言う。

「だいたいあの王ときたら、姫さんに馴れ馴れしくないですか！？そう思いませんか？アンドレア將軍！？」

「……はい？ああ……まあでも歳が近いようですし、親近感を覚えていられるのでは？」

「親近感！？はっはーん……歳が近いからって姫さんは一国の主ですよ！？それなのに……」

「色目使いやがって、てか？カイル……豊かな妄想力ありがとう」
アシュリーナからの鉄拳（しかも笑顔）。直撃したカイルは痛み
に悶絶している。

「だいたいねえ！トステム王が私なんかに気を留めるわけないでしょう！！バツカじゃないの！？」

「でもアシュリーナ様もまんざらでもなさそうでしたよ？」

「話がこんがらがるからアンドレアは黙ってて」

まあ確かに他人から『可愛い』と言われてうれしかった……しかも歳の近いトステム王に。そして彼の外見的魅力にひかれたのも事実。だけど、そういう『恋』とかそういう感情じゃない（と思う）。

「姫さん！僕は反対ですよ」

「何に？」

「姫さんがあんな男にキヤーキヤー言うのは」

「絶対に言わないから！安心しなさい！私はどんな男が目の前に立っていてもそんな事言うつもりはないから！」

「果たして……」

「ヨシユアも黙る！」

「僕泣きますからね？」

「なんで！？というか一旦トステム王から離れなさい！」

「アシュリーナ様、顔ま……」

「黙れって言ってるの！あんた聞こえないの！？」

アンドレアがひそかにため息をついた。

ここはトステムの王宮の一角。

ここでは静かに時が流れる……普段は。

今日アシュリーナたちがやってきて、すごくにぎやかになった。

今もなにかを大声で話し合っている。話題はわからないが……

今回トステムに来てくれた諸外国の王たちに挨拶周りをしている、

トSTEM王レン。

アシュリーナたちの喧騒を聞いて思わずクスツと笑う。

「あの方たちは本当に楽しそうだね」

側近のアダムが答える。

「そうですね……一気に花が咲いたようですね、レン様にも」

「……アダム、お前何言ってるんだ？」

「いえ、ただの戯言ですよ」

「そう聞こえないんだけど」

「でも、あの方たちが楽しそうだというのは私も思います……ここでは気兼ねなく話せる人間なんていませんからね」

「そういう人間はお前ぐらいだよ……でもお前も堅苦しいのがわかった。従者とあんなに仲がいい国の王もいるんだね」

「驚きですね……私が堅物だと言われたのは生まれて初めてです」「そつち？」

ぷつと吹き出す。アダムが怪訝そうな顔でこちらを見返す。

レンとは対照的な、透き通るような白い肌。切りそろえられた黒髪。そして緑の目。

そんな彼をレンは見つめ返す。

「でも俺はお前のことが好きだよ……勿論従者としてだよ」

「そう言っていただけだと嬉しいですよ……私もレン様のことを慕っていますから。勿論王として」

「当り前だよ！……堅物でもお前が側近じゃないと俺は多分ダメだと思っよ？だって王様がこんなんだから」

アダムが初めて笑った……というより微笑んだ。

……記念祭は明日に迫る。

不機嫌到来（後書き）

アダム氏がこれから出てくるのかは不明です（おい）多分出てくるでしょうw

アシュリーナたちは多分自分たちが賓客だということを忘れていきます。そして次話は記念祭当日の様子を書きたいと思います

……ひとつお知らせです（・ω・）000

もう一つの連載作『咲かせ屋』との兼ね合いから本作の投稿日を日・月・水・金に決めたいと思います！……もちろんテストとか、私自身が決めたことを忘れていたり……なんてこともあります（笑）

では、ありがとうございました

海が目の前です（前書き）

今日はアシュリーナの話を投稿します！ちゃんと守りました……はたしていつまで続くのやら？

もうタイトルテキストですね（笑）気にしないでください……私のちっちゃい脳みそで頑張って考えました（笑）

海が目の前です

アシュリーナは感激の声を上げた……目の前が海です。海だよ、海！！

砂漠にも『海』はある……『砂の海』という一面黄土色の海が。そしてそこに住む生物なんてほとんどいない。いたって茶色とかくすんだ赤とか……とにかく単色系。

しかし目の前に広がる『海』は青かったり、青緑色だったり。生き物なんてすごすぎる！黄色でしょ、水色でしょ、鮮やかな赤でしょ……しかも水の中に海藻というものが生えているらしい……サボテン？いや、それはないな……。聞くところによるとワカメとかコンブのことらしい……。あれってどうやって生えてるんだ？

「アシュリーナ様。頭が完全に違う方向行ってますよ？」

アンドレアの声で我に返る。

「そんなことないし！ちゃんとトステム王の話、聞いてたし！！」

「では、最初からどうぞ」

「……いちいちそんなもん覚えてるかよ」

「私はちゃんと聞いてましたから、覚えてますよ？」

「それはお前の頭がおかしいんだ……私は化け物頭を持っていないのでな。はっはっは」

カイルがくるっとこちらを向き、人差し指を立てた。

「お2人ともうるさいですよ？他のお客様に迷惑です」

手で口を押える……うるさかったかな？お互いの目を自然と見る。そしてぺこりと頭を軽く下げる。

満足そうにカイルが頷き、再び前を向いた……お前は先生かよ？

トステム王の計らいでアシュリーナたちは一番前での式典参加となった。

この国では、この国自慢（とトステムの兵士が言ってた）の海を前にして、永遠と発展を神に願うらしい。やはり国によって文化は違うものだ。レンの服装なんかまるで漁師のようだ……とは言っても漁師を見たことが無いのだが。多分こんな感じなのだろうという憶測で……。

「ダングラジエの陛下は退屈ですか？」

「ほえ!？」

いきなり振られた……目の前にレンが笑顔で立っていた。そしてはい、と杯を差し出される。

「これは……？」

「“海の雫”というワインです……これを儀式で飲むんですよ。みなさんに私の即位記念を祝ってもらうんです」

「なるほど……」

「半分飲んで、半分は母なる海に還す……それが我が国の伝統なんです」

「へえ……あつ、でも私はお酒ダメなんです」

「大丈夫ですよ。これは『ワイン』と名付けられた『ジュース』のようなものです……もちろんお酒の部類なのですが、甘いので陛下もすんなり飲むことができると思いますよ」

「……飲んでみます」

まずは一口……本当に甘い。

「おいしいですね!」

「でしょう?」

お互い笑顔で見つめあう……そしてはっ、となつてまた“海の雫”を飲む。

半分飲み終えた後、アシュリーナはレンに教えられた通り海に還した。

「陛下、ありがとうございました」

にこつと笑つてアシュリーナが手に差し出した杯を受け取った。

「アシュリーナ様あ」

カイルがなぜか『アシュリーナ』と呼んだ。

「気持ち悪いからその呼び方止めてくれないかしら」

「また……トステム王は……」

「？」

カイルの様子が変わった。それを見たヨシユアがあと声を出す。

「すみません、アシュリーナ様。カイルは多分酔っているんです」

「は？」

「こいつはいわゆる下戸なんです」

「……」

下戸なのに飲んじやったわけ？いや、私もお酒を飲んだのは初めてだったけど、普通にいけたよ？というかお酒の味しなかったじゃん……何こいつ？

「アシュリーナ様！！」

ガシツとアシュリーナの腕をつかむ。

「やめなさい！カイル！！」

「アシュリーナ様の顔が赤いです……！！」

「それは！あんたが賓客の皆さんの前で、そしてトステム王の前

でこんな恥ずかしいことしてるからでしょう！！バカっ！！」

「……はっ！」

今更気づくなよ……カイルが顔を真っ赤にしてうわぁーとしゃがみ込む。

「カイル……立ちなさい。アシュリーナ様の方がお前より恥ずかしいのだよ」

ヨシュアが兄らしく弟を立たせる。そして一礼した後彼を連れてどこかへと去って行った。

海が目の前です（後書き）

方言が出そうなシーン（……出てますねw）があって焦りました（汗）

だんだんアシュリーナが私に似てきました……いや、私がアシュリーナに似てきたのかな？どっちにしろお互い似てますΣ（・Д・；）
（）（）

では水曜日にお会いしましょう

側近からの忠言（前書き）

もう、ぐっちゃぐちゃで何がしたいのかわかりません……が、なんとか終わらせます！そして次の次で絶対戦闘シーンを入れます！
↑
なんの宣言？

もう少し、お付き合いください！

29話のグダグダです！

側近からの忠言

「姫さん、本当にすみませんでした!」

カイルが部屋の前で土下座をして待っていた。

「ほんとーにあんたって奴はあゝ……私がみなさんの前であんなに謝ったのは後にも先にも今日だけよ! バカ!」

なんかさつきから『バカ』ばかり言っていない?

「といつかなんであんたはアレ飲んだのよ?」

「え……」

「見栄、ですよ」

ヨシユアが代わりに答える。

「他の方々はアレを普通に飲んでいた………だけど自分だけアレを飲めないとなると恥ずかしいでしょう? そんな見栄ですよ」

「……飽きた」

はあーと大きなため息。

「これからちゃんとお断りしなさい………それにもうあなたはお酒飲んじゃダメ」

「はい……でもなんで姫さんはアレ飲めたわけ?」

「だってお酒の味しなかったじゃない」

それでも酔ったあなたは凄いと思うよ?と心の中で付け足す。

しかし3將軍は顔を見合わせていた。そしてアンドレアが口を開く。

「私たちが飲んだものは……酒気がありました……なぜでしょう?」

カイルがピンと来たらしい。そして威勢よく言った。

「やっぱり！あのトステム王は姫さんを気に入っているんだよ！それで姫さんに気に入られようとして……」

「ばっ……何言ってるのよ！」

でもカイルの顔は真剣そのもの。そんなにトステム王が嫌い？嫉妬？止めて欲しいですね……邪推だよ？

「アシュリーナ様、顔真っ赤」

アンドレア……あなたはそれしか言えないの？もっと気の利いたこと言いなさい。

助け船を求めようとヨシユアを見る……が、明らかに目を逸らした。

……結局3人とも役に立たない。なんのためにみなさん付いてきたんですか？冷やかしかですか？

「あら……お取込み中でしたか。失礼しました」

なぜかいつもこういうタイミングで来るのがトステム王。だからアシュリーナが慌てる羽目になる。

「す、すいません！！本当にうちのカイルが折角の式典を台無しにして……」

「いや、大丈夫ですよ！お気になさらないで……男性の方には同じ“海の雫”でも酒気のある本物の酒をお出しいたんです。だから酔っぱらっていらっしゃる方も何人かいらっしゃいましたよ……だから大丈夫ですよ」

いつも通りニッコリ笑顔……この国の人間は常に笑っている。なぜだろうか、と不思議に思う。

しかしそんなアシュリーナの思いを早速打ち壊してしまった人物がひとり。

レンの後ろにぴつとりくつついている男。じいーつと無表情でアシュリーナたちを見ている……はつきり言って気持ち悪い。

「トステム王……後ろの方はどなたですか？」

「ああ、こいつですか。これは私の側近でアダムといいます」
ペコツとアダムが頭を下げる。

「それは失礼いたしました。アダム様、私はダングラジェ王国のアシュリーナと申します。後ろにいますのは私の側近、アンドレア、ヨシユア、カイルです……頭下げなさい」

カイルが頭を下げなかったから小声で注意する……しかし下げない。しかもしかめっ面して立っている。

それを見てアダムは何を思ったかカイルにつかつか歩み寄った。

「ア、アダムさん！なんです……」

「あなた、そんな顔していたらみなさん驚きますよ？」

「は？」

「あなたは仮にもダングラジェ王国の1使者なのですよ？国を背負って我が国に来ているわけでしょう？陛下や他の側近のみなさんが取り繕っても、あなたの顔ですべてが台無しです……それをお分かりでそんなしかめっ面を？」

「なっ……！」

カイルが明らかに狼狽する。でもアシュリーナはおおーと小さく声を上げた。

「アダム！お前は本当にバカじゃないのか！？」

真っ青なトステム王がアダムを引き寄せた。

「お前………どうしてお客様にそんな齒に衣着せぬようなことをずけずけ言うことができるんだ？……ああー、もうほんとと最悪」

「なぜです？私はカイル様のことを思っ
て申し上げたまでです…
…ご自分がどんな立場かお分かりであ
れば私の言ったことに狼狽な
どするはありますがありません」

しれっと言い返す。カイルが赤くなっ
ていく。

「本当にすみません！アシュリーナ様…
私の側近の無礼をお許
してください」

「いえいえ、とんでもない！許すも何
も私はその言葉を求めているので
すから、実際アダム様に感謝してい
るぐらいですよ！アダム様、ありが
とうございました！」

ペコッと頭を下げる。いえ、出過ぎた
真似をしました、とアダムが引き下
がる。

……しかし、依然としてカイルとア
ダムの間に火花が散っているよう
な気がしてならなかった。

側近からの忠言（後書き）

アダム氏……なんかもう出さないかもしれないと言ったときながら、もう準主役級のキャラになってしまった……！自分の中では印象が強すぎて『レンくアダム』ですwレン様、ごめんなさい！

最近知ったんですが、『アンドレア』って女性の名前なんです（泣）

では、ありがとうございました！……無事戦闘シーンを書けるよう持っていきますw

カイル謹慎（前書き）

はい、タイトル通りです。カイル氏が謹慎になります……。氏
というのは私の癖ですw大体の人は「氏」と呼びます……。え？意
味わからん？スミマセン（汗）

やっと30話いきました♪では、本文をどうぞ

カイル 謹慎

夕刻の宴。アシュリーナたちは勿論招待された。が、彼女らの中にカイルの姿はなかった。

「あんた、謹慎。宴に来なくていいわ」

レンとアダムが帰った後、そうカイルに言い渡した。
アンドレアたちにも動揺が走る。

「ちよつと、アシュリーナ様！それは……」

「私たちだけでアシュリーナ様の護衛を？」

ふん、と鼻を鳴らす。

「別にカイル連れて行つたつて、トテム王と喧嘩するでしょ？
トテム王だつて折角の祝いの席なのにいい思いしないわ。それに……」

「それに？」

「カイルは迷惑かけすぎ。護衛に不安があるなら將軍職を降りなさい……私だつてもうあの時と違つて自分の身ぐらいは守れるわ」

あの時——5年前の戴冠記念祭。

ラグナロク

『神々の黄昏』一団の襲撃でアシュリーナもアンドレアもヨシユアも、みんなみんな傷ついた。アシュリーナは当時8歳。自分の身を自分で守れなかったことに強い自責の念を感じていた。『幼いから』では済まない——そう思つて事件の後から3將軍と、エリからもらった剣の稽古をしてきた。結構な實力であると誰もが認めるようになった。

「私だって成長したんだから、別に1人欠けたところでどうってことないでしょ？」

「しかし……」

「もう、みんな国に帰ったら!？」

怒鳴り声……久しぶりに聞いたなあ、とつい思ってしまった。

「もう私知らないから……すつごく恥ずかしいんだから」

お迎えに上がりました、という声が聞こえアシュリーナはスタスタ行ってしまった。それにカイルを除いた將軍がついていく。カイルはただ窓の外を見ていた。

「あれ？カイル様は？」

レンがアシュリーナたちを迎えながら尋ねる。

「ああ、もうみなさんに迷惑かけすぎだと言って謹慎にしました」

「ええー!？」

レンが驚きの声を上げる。

「そんな迷惑だなんて……そんなことないですよ!」

「いや、いいんです」

口数少なし。そんな様子を見たレンもこれ以上はなにも尋ねなかった。

「陛下、どうぞ」

トステムの侍女がアシュリーナに飲み物を渡す。

「ありがとうございます」

こくつと一口飲む……甘いが微かな酒気。

「ワインですよ」

レンがニツコリしながら言う。

「本物の、ですか？」

「ええ、まあ。でも甘くて飲めないことはないでしょ？」

「そうですね……このワインは甘いのですね」

「そうでもないですよ？なんなら持ってこさせましょうか？」

「……いいえ、結構です」

もらったワインをちびちび飲むだけで精一杯です、はい。

ちらつと後ろに控えているアンドレアとヨシユアを見る。

彼らもなにかを飲んでいる……まあワインなんでしょうけどね。

そう思うとカイルの姿が浮かんで、少し胸が塞がるような思いだった。

宴も中盤。酔っている人間も何人かいる。トステム特有の陽気な雰囲気にも誰もが酔いしれていた。

「遅れましたあ」

突然の声、そして向こうの方から近づいてくる人影。門兵がざわざわしている。押しとどめようとしているらしいが、その人物は無視してどんどん歩いてくる。

「誰だっ……！」

立ち上がったトステム王の顔に焦りの表情が浮かんだのを見た。

「どうなさったのです……」

アシュリーナが声をレンに声を掛けたのと同時に近づいてきた人間が喋った。

「義兄さん！お待たせしました」

ぱさつとフードを外す。レンと同じく金髪碧眼の男……義兄さん！？

カイル謹慎（後書き）

新キャラ登場させました……が、なにやらレン氏と因縁がある様子……

これからちよこちよこの因縁を明かしていきたいと思います！
乞うご期待ですね では……予告通り戦闘シーン書きますよ、下手
だけどw

それでも読んでくださると嬉しいです（・艸・*

義兄と義弟（前書き）

前回の続きですね……いつもそうですけどw

今回は宣言通り戦闘シーン入ってます（↑！？）でもなんかなあ
ー……うーん……誰か書き方教えてくれませんか（泣）

義兄と義弟

「なんでお前が……！」

レンの顔に明らかな動揺が走る。

金髪男がクスクスと笑う。

「だって義兄にいさんの戴冠記念祭でしょ？ 義弟おとうこが来るのは当たり前じゃない？」

「……お前は招待してはいないはずだぞ！ なぜ来たんだ」

「だからあ……ふう、話すのもめんどくさくなってきた」

「帰れ……私はお前のことを弟だと思ったことは一度もない。早く国に帰れ」

「相変わらずひどいなあ、もう」

ケラケラ笑う……義弟とはどういうことなのか……。腹違いの弟とか？

「こちらは義兄さんの恋人？ 可愛いねえ！ 義兄さんもやるじゃない」

ずいっと顔を覗きこむ男。うわっと思わず声を上げる。

「ち、違います！ 私は……」

「帰れって言うてるんだよ！ お前の顔なんか見たくない！」

レンが男を突き飛ばす。男の目が妖しく光る。

「いったいなあ……」

レンが彼を睨みつける。アダムがつかつかと歩み寄って男を外へ連れ出そうとした。

が、アダムが突然悶え始めた。顔が真っ青だ。見ると腹から真紅に染まった銀色の鋼が突き出ていた。

ニヤリと男は笑う。

「アダム、お前には用はないんだよ……引っ込んでろ、この裏切

り者！」

思い切り蹴飛ばす。悲鳴があちこちから上がる。

「あなた、何しているんですか！」

アシュリーナが叫ぶ。血糊を振り落した男がこちらを向いた。

「ああ、見てわかりませんか？裏切り者を消したんです。私は義兄さんに用があるのでね……それなのにあいつは……邪魔しやがって」

「貴様……許さない！」

レンがすらりと剣を抜く。

「衛兵！皆さんを避難させろ！」

アシュリーナも避難を促された。が、彼女らは男の後ろから武装した男たちが続々と出てくるのを見た。

「トステム王！後ろから兵が来ます！……アンドレア、ヨシユア！私たちも応戦しましょう」

そう言つてアシュリーナもあの白銀の剣を抜く。

「アシュリーナ様！？早くお逃げください！」

「そうですよお、俺は女の子と戦う趣味はないですから」
男がへらへら笑いながらアシュリーナに向かって言った。

「女だからって……嘗めてもらつては困ります！」

3人はトステム王と金髪男を中央に残したまま広間の後方、武装兵が押し寄せている場所へ突っ込んでいった。

「お前、用事つてなんだ……早く言え」

「ええー言っちゃっていいんですか、義兄さん？」

悪魔的な笑みを漏らし、一呼吸置いた後言った。

「この国、もらちゃおう……ということです、義兄さん」

「な……、貴様！そんなことはさせん！妹と……母上を奪って置いてこれ以上私から何を奪うつもりだ！」

はっ、と短く掛け声をだし、金髪男に飛びかかって行った。

それを悠然と受ける男……全然手ごたえを感じていない。それどころかニヤニヤ笑っている。

「妹？ああソネアのこと？……あれはしょうがなかったんですよ。それにお母様は勝手に侵攻してきたんだから一国の王として防衛したまでさ……俺はなんにも悪くない」

「黙れ！そうやって俺の……俺の大事なものを……ああああ！」
受け止められていた剣を払い、体勢を低くする。そして懐に入って剣を薙ぐ。

鮮血が飛ぶ。

「がっ……！」

はあはあと肩で息をするレン。そして蹲った男。

レンはさらに剣を正眼に構え、男を叱咤する。

「立て！そんなんでは私は倒せんぞ！そんな甘い気持ちでこの国を取りにきたのか！」

「くくく……勇ましいなあ、義兄さんは……」

すくつと男は立つ。ぼたぼたと血が落ちる……はずなのになにも出て来なかった。

「！？」

「くくく……おかしいなあ？さっき確実に斬ったはずなのに。だけど……こういうことさ」

裂かれた胴着を脱ぐ。そこには赤い染料の入った皮袋がクツションとして這っていた。

「なん……だって……？」

「残念だったなあ……だから義兄さんは好きなんだよ……単純だから？」

「くっ！アダ……だめだ！」

「じゃあその王座は俺のものということだ。ソネアによろしく義兄さん」

男が上段に剣を振り上げる。アシュリーナは武装兵を倒しながら、そのシーンを見てしまった。

「トステ……レン様……！」

ビーンという耳障りな音がして、何かが目の前を通り過ぎて行った。

「！？なんなんだ、これは！くっ」

よろよろと男が後退する……その腕には1本の弓。

「ヨシユア……？」

ヨシユアは弓の名手。彼が射ったのかと思ったが、その手には弓はなかった。

「誰……？」

「僕ですよ、姫さん」

広間の入口に弓をつがえたカイルが立っていた。

義兄と義弟（後書き）

なんか見たことのある名前が一人。ソネア氏です。

知らない人は無視してもらっても構いません。が、一応『戴冠記念祭編』の2日目から途中まで出てきてますw興味があれば見てください……ああ懐かしいなあ（笑）

レンとソネア（いや、書いてるからわかるよ）、アダムそしてあの金髪男。どういう関係があるんでしょうか……。これからアシュリーナが国に帰るまでには明かします（・ω・）ノ

では読んでくださりありがとうございました

……こんなところで難んですが、日本語をラテン語に翻訳するサイトって知っていらっしゃる方いますか？もし知っていらっしゃる方がいるなら教えてほしいです……何に使うかはまあ……その……カンニングとかではないのであしからず！では！

勝負の行方（前書き）

もうサブタイトルが考えられませんwwどつしまじょう（泣）

今回もメチャクチャですね、はい。

勝負の行方

「カイル……！」

アシュリーナが驚きの声を上げる。

「なんで……？」

「そりゃ勿論、姫さんが心配だったからですよ」

ふふふつと微笑む。側近としての職務を果たしただけ、と言っているのか。

「あなた……どうしてトステム王を……？」

そう言つと頭と手を大きく左右に振った。

「とんでもない！私がトステム王など助けるわけじゃないですよか！」

「でも現に助けたわ」

「それは……姫さんが泣いているところを見たくないからですよ」最後の部分はやつと聞き取れるぐらいの音量。それでもアシュリーナにはちゃんと聞こえた。思わず涙がこぼれそうになる。

「カイル……アダム様を！お怪我をなさっているの！早く医者に見せないと」

「はいはい……あんなこと僕に言っておいて無様あ」

呟きながらトコトコ歩いていく……と、あの男に阻まれた。

「お前がやったのか……！？」

「なにを？」

「くそがあ！どいつもこいつも俺の邪魔しやがって！」
持っていた剣をカイルに振り上げる。

「カイル様！」

「カイル!!」

レンとアシュリーナが同時に叫ぶ。

「うわ」

咄嗟に避けた。ほっと安心する。

「もういきなり人に剣向けてくんなよ」

そう言いながら帯剣していた剣を抜く。

「僕はトステム王みたいにはいかないぜ？」

「ほざいてろ！俺たちには女神がついているんだからな！」

そう言っ て闇雲に剣を振り回す…… 先ほどのような正確さは微塵もない。

「ふうー…… 女神だろうが、なんだろうが、勝負の当事者は僕たちなんだから、勝ちも自分で掴むもんだろ？」

「くくく…… そう言っ てられんのも今のうちさ！」

相変わらずテキトーさが目立つ剣の振り方。それを見てカイルがさらに溜息をつく。

「ダングラジエの將軍が直々に剣の使い方教えてやるよ」

さっ と左に動く。それに男も続く。

「いつまで逃げてんだあ！？俺に剣の使い方を教えてくれるんじゃないかったのか!？」

「まあまあそう焦らずにね」

そう言っ たままどんどん左に移動していく。男はちっ と舌打ちをし、全力でついていく。

そして突然カイルが立ち止まる。

「なっ！」

男は突然さ故に立ち止まることができなかった。そして彼の行く

方向に待っていたのは、カイルの冷たい色をした鋼だった。

「……………汚え……………！」

「戦場に汚えもくそもあるかつ！油断したお前が悪い」

そう言つて既に男の脇腹に触れていた剣腹を思いつき右に薙ぐ。そして罵声をカイルに浴びせながらその男は赤い海に沈んだ。

「カイル……………怪我不い？」

肩で息をしながら、アシュリーナが近づく。するといつものニコツという笑いを見せながら振り向いた。

「全然。それよりアシュリーナ様の方は？」

「私は……………大丈夫……………それより、この人」

「私の義理の弟です……………そしてかつて私の妹の夫だったものです」
レンが近づいてきて言う。その肩にはアダムが担がれていた。アダムはまだかろうじて息をしているようだ。しかしその顔は真っ青を通り過ぎて白くなってきている。

「レ……………さ……………ま」

「アダム！喋るな！傷が開く！」

「私は……………もう……………」

「そんなこと言つな！お前は……………お前は……………！」

レンがぼろぼろと涙を、その青い目から溢れさせていた。

「早く治療を……………誰か！お医者様は！……………レン様。私たちの者も何かお役に立てないでしょうか……………アダム様を」

「……………アシュリーナ様……………是非よろしく願います」

「こういう時はお互い様です……………アンドレア！侍医を呼んできて！早く」

祝いの宴は1人の男の襲撃によって騒然となった。

勝負の行方（後書き）

アシュリーナがどさくさに紛れて、「レン様」とか言ってます……
なんつー奴だw

そしてカイル氏。なにが剣の使い方を教えてやる、ですか！？ま
ったく教えにも何にもなっていないではないですかっ！………とい
うのを今ぐるぐる考えていますw

さてさて本当にみなさんどうなるんでしょうか……作者自身も心配
です（おいっ）

では、読んでくださりありがとうございました

………当作品では宴の最中に襲われることがパターン化してますね……
………ダメじゃん！

再会（前書き）

この話早く終わらせたい……なぜならば重いからです……はぁー
o
r
t

まあ新章始まりましたし、明るく行きましょう！……うん。無理だ
なw

再会

「アダム……すまない……」

レンが俯いたまま横たわるアダムに言う。それに応えるようにアダムはレンに手を伸ばす。

「レン様……なにを謝っているのですか……ヴィート様がこの国に関わるようになったのも……元はと言えば私のせい……なのですから」

弱弱しくぼそぼそと言う。レンはそれを聞いてますます涙をあふれさせた。

「ヴィート……？」

アシュリーナが呟く。多分会話の流れとして、あの金髪男の名前だろう。

丁度アンドレアが侍医を連れて広間へ入ってきた。この国の医者とみられる人間も入ってきている。

「アダム様！なんてお怪我なのですか！……レン様は無事でしょうか」

「私ならこの通り無事だ。それよりアダムの治療をしてくれ……早くしないと手遅れになる」

「おいたわしや……」

そう言いながらトステムの医者がテキパキと準備をし始める。それに倣ってダングラジェの医者も手伝い始める。

「アダム様の胸着を脱がせてください」

「清潔な布はありますか？それと白湯も必要です。薬は私たちが持っています」

「布……白湯……あります！薬は使わせていただきますね」

医者同士にしかわからない会話が進んでいく。アシュリーナたち

はただ見守るしかなかった。

「レン様、ダングラジエの王国陛下。お下がりください。ここは私らが……」

「わかりました。レン様、さあ」

涙を流しっぱなしで呆然と立っているレンにアシュリーナが手を差し出す。

それにアンドレアたちも続く。

「レン……！がつ……」

はあはあと肩で大きく息をしながら、ふらふらと男——ヴィートが立ち上がる。口から血が滴っている様子が無気味であった。

ヴィートがレンに向けて指を指す。

「俺が……ここからいなくなっても……きっと女神が必ず……この国を海の藻屑にしてくれよう……あの方は誰にも……」

「お前、さつきから『女神』だの『あの方』だの……ちったあ自分の力でどうにかしろよ！」

カイルが口を出す。

ヴィートが突然笑い声を立てた。

「お前さんは本当に威勢がいいなあ……だがな。威勢がいいだけじゃこの世はやっていけないんだよ……あのアダム（裏切り者）はもうすぐ死ぬだろう。あの出血じゃあ助かりっこない！そして……あの方がこの国を……かはっ」

赤い咳をする。よろよろとふらついて、とてもじゃないけど立っていられる様子ではない。

「もう……お前だって持たないんじゃないのか？アダムのことを言っている場合じゃないだろう」

レンが口を開く。するとヴィートがきつ、とレンを睨む。

「黙れ！俺は……俺は……この国を手に入れるまでは死なないんだ」

「そんなにこの国がほしいなら自分の手で（……）俺を殺せ。でなければ俺は死んでもこの玉座に座り続ける……お前なんかに渡すものか、この愚か者」
くくくと笑う。

その時、ぐらつとヴィートの体が傾いだ……真つ赤な軌跡を描きながら。

「!？」

思わず身構える。が、その必要はなかった。ヴィートはそのまま床に倒れてしまったからだ。

そしてその後ろから現れたのはあの深緑色をした目を持つ少女だった。

再会（後書き）

現実逃避したいです。。どうしてこういう展開になるんでしょうか
……？それは私が曲がっているからなんでしょうか、性格が？

再会……ふう。なんか後書きが愚痴になってませんか？気のせい
ですよね！？

では読んでくださりありがとうございました……ハッピーエンドが
恋しいよお

他人の空似（前書き）

4月ですね！！うはぁー……… 実力テストが2週間後だ。泣きたい。。

それはさておき、なんか4月でテンションmaxな方多いですよ
今回は明るい話ですよ……… というエイプリル・フルなテンションw
前回同様暗いですよ……… 同様じゃない、ますます暗くなりました。
誰か止めてください（泣）

他人の空似

「ソネ……ア……？」

ヴィートの後ろから姿を現した少女。深い緑色の目と緑がかった髪。長髪だったのが短くなっているのはさておき、それはまさしくソネアそのものだった。

ただ、一カ所違う……明るいものを宿していたあの眼は、どこまでも深いものになっていた。どこか冷たさを感じさせる。昔の快活さは微塵も見られなかった。

「ソネア！ソネアでしょ！？」

アシュリーナは叫んだ。が、少女の顔はピクリとも動かない。

そしてしばらくした後、返答が来た。

「私はソネアではありません。エルマです」

「そんなはずはないわ！あなたはソネアのはずよ！！その明るい緑の髪に深緑の目……絶対そうだわ！ただの他人の空似ではないわ！！」

少女——エルマは首を振る。相変わらず無表情。

「私はエルマです。ソネアではありません。アレはもう死にました」

「『死にました』……？」

こくつと頷く。その答えはあまりにも残酷でアシュリーナを愕然とさせた。

「ちょ……それってどういうことよ！？」

「そのままです。あなたに話はありません。私はヴィート様を御迎えに来ました」

そう言っアシュリーナたちには目もくれず、床に倒れたままのヴィートをひょいっとう肩に担いだ。ヴィートの体格は小さいわけで

はない。一般男性と同じぐらいだ。それなのにあの華奢なエルマが
いとも簡単に担いだので、アシュリーナたちはもつとびっくりした。

「では……ヴィート様がご迷惑かけました」

「待って！ソネアのこと詳しく聞かせて……そのヴィートってい
う男の奥さんなんでしょ？なんで『死んだ』なんて言うの！？」

アーモンド形の目でこちらを見ている。そして口を開いた。

「アレは皇太子妃としてはあまりにも無能でした。そして王の御
命令より処刑されました。ただそれだけのことです」

「どうして……無能だからって処刑されなければならなかったの
……？」

「アレは無能でありながら、トステム王を想い、いつしか間諜と
しての役割を始めたからです。王の怒りに触れるのは必然的なこと
です……もうよろしいでしょうか？」

ソネアにそっくりの少女がソネアの死を語る。それはすごく不思
議で気味が悪いと言えば気味が悪い。本人に多くを語られないまま、
淡々と死を告げられたような錯覚に陥る。

「もう行ってください……エルマさん」

そうレンが言った……自分の妹似の少女に向かって。

こくつと頷くと外へ向かって走り出した。そして黒馬に跨って引
き返していった。

「レン様……どうして……帰したのですか？」

レンは微笑んでいた。

「私には分かっているからです……ソネアはいないって」

「……どうして許していられるんですか？」

その青い目に一瞬影が見えたが、それはすぐに消えてしまった。

「アシュリーナ様は疲れていらっしやるようだ……早くお部屋に

戻られた方がよろしいかと……」

「そんなことはありません!!」

明らかにレンが話題を逸らしたようにしか思えなかった。

そしてアンドレアたちに付き添われ（というか勝手についてきて）
アシユリーナは部屋へ戻る羽目となった。

他人の空似（後書き）

さてさてどう話が進むのやら……もちろん考えてはいますけどねw

……これから暗さmaxです、多分。というよりこの章全体が暗くなりますね、うん。それでもいいという方は、これからもよろしくお願いしますm（- -）m

……それとお知らせ（？）

アシュリーナの話（てっとり早く言えばLegend of Girly）、多分夏ぐらいに終わります。。多分ですけどねw

海辺の邂逅（前書き）

……書くことがないなあ……w

まあ話もタイトルそのまんまですからw

海辺の邂逅

トステムの民は歌い、踊る。町には光が溢れ、音が満ちている。

しかしアシュリーナの部屋は違った。誰もが無言のうちに、明かりの一つもついていない。そう彼女が命じたからだ。

そしてアシュリーナは窓の外を見ていた。その頬に一筋の涙が伝う。

「ソネア……」

膝を抱え込み、ぎゅうつと頭をうずめた。

「お姉ちゃん！」

そう言って彼女はアシュリーナの元へ飛び込んできた。まだアシュリーナは9歳、ソネアは6歳だった。

「遊んで！」

その深緑色の目に見つめられ、誘われるままにソネアと遊んだ、久しぶりに羽目を外して。王宮で同世代の子供と会うことなんてまじない、その時は気分がこころなしか沈んでいた…… 勿論戴冠記念祭という重圧のせいだ。

そんな昔を思い出し、一層膝を抱える手に力を込めた。

~~~~~

ふと顔を上げる。町人が歌う、陽気なメロディーとは違い、どこか寂しげな旋律。

そろそろと窓から半身を乗り出す。そして目の前に広がる海を見る。

夜の海は暗く、明かりなど見当たらない。そしてところどころに浮かぶ影が人魚のように見える。

「人魚は……本当にいるのかしら……？」

人魚のその歌声は美しく、人を惑わすと言われている。そしてその口から紡がれる旋律は儂げで、人の幸せには明るい歌を、不幸には寂寞とした歌を歌う、と言う。

「あなたたちもソネアの死を悼んでいるのね」

そう思うことが救いだっただ。そして窓からひょいっと下に広がる大地へと降りて行った。

\*\*\*\*\*

「あら、レン様」

アシユリーナは海へ来た。そこでレンに出会った。

声を掛けられたレンは後ろを振り向く。そして微笑んだ。

「ああ、アシユリーナ様ですか……」

「ええ、隣いいですか？」

「どうぞ」

レンの隣に座る。波が足元まで来て冷たかったが、今のアシユリーナには気持ちのいいものだっただ。

「部屋から誰かが歌う声が聞こえました……私、人魚かと思いました」

するとくすつとレンが笑った。

「あれは私のです……昔母がよく歌ってくれたものでした。気持ちが落ち着かないときにここにきて、よく歌ってるんですよ」

「お母様……私の母も優しかった」

「アシユリーナ様のお母様は？」

首を振る。それからしばらく2人は口を利かなかった。

「ソネアのことですが……」

突然レンが話を切り出す。アシュリーナは思わずびくつと体を震わせる。

「寒いですか？」

そう言つて上着をかけてくれた。

「ありがとうございます」

「いえいえ。夜の海は冷えますから」

レンは微笑んで、再び口を開いた。

「アシュリーナ様の話は以前ソネアから聞いていました」

「ああ……5年前の戴冠記念祭の時ね」

「その節は……」

ぺこつとレンが頭を下げる。

「レン様、頭を上げてください……あの……失礼ですけど、でもどうしてレン様はあの時いらっしやなかったのですか？」

10歳のレンに会つてみたかったのも事実。何故、妹に行かせたのかかなり気になった。

レンはふふつと笑つて答えた。

「私、幼い時は体が弱かったのですよ……それで母上が許してくれなかったのです。それで代わりに妹と、父が行きました」

「父？お父様が王でなくつて？」

「違うんですよ、それが。母は王家の者だったんですけど、父は身分の低い貴族で。それで両親が結婚したとき、どちらを王位に据えるかでもめて……結局去年、私が即位するまで空位だったんですけどね」

……なんか複雑だな……ダングラジエではまずありえない。なんせ8歳の私が王になれたから。

「それで、本題に入りますが……」  
レンがそう言ったとき、丁度冷たい風が吹いた。

## 海辺の邂逅（後書き）

レン様、微笑み過ぎ。。でもそれが彼なのですからw

……書くのを忘れてましたが、アダム氏どうなったの！？

では読んでくださりありがとうございました

## a v i ー 誓 い ( 前 書 き )

今回は無駄に長いですw多分初めて2000文字超えました(汗)  
前編後編に分けてもよかったんですが、事の成り行き上こうなりました。

## avi―誓い

風が収まった頃、レンは再び口を開いた。

「エルマってのが今日来たでしょう？」

エルマ――ソネアによく似た容姿だった。絶対ソネアだと思ったのに否定されたし、ソネアの死まで告げられた。それを思い出すと、また涙が出そうになった。

「アシユリーナ様？」

「あ、いえ、大丈夫です……話を続けてください」

「そうですか……では」

こほんと咳払い。一呼吸置いてぼそつと言った。

「あのエルマとソネアは同一人物です」

「嘘っ！！……あ、失礼しました」

思わず叫ぶ。それぐらい衝撃が来た。……やっぱり同一人物じゃないかっ！でもどうしてエルマは否定したんだろうか。

「でも、ソネアは処刑されたのでは……？」

「確かにソネアは諜報として働いていました。それがあそこの王に露見して、処刑宣告されたのも事実らしいです。そうやって手紙が来ました」

ふうーっと思を吐く。

「でもソネアは処刑されなかった……？」

「そういうことになります。で、妹は処刑の代わりに人体実験されたらしいです。なんでもあの国は新しく洗脳の方法を見つけたようで、ソネアを第1号にしたらしいんです。それで見事成功して、『ソネア』という人格は完全に意識が消滅。代わりに『エルマ』と

いう人格を作り上げ、彼女をヴィートの昔からの家来だと思わせている」

「……複雑ですね。ソネアの肉体は朽ちてない。けれどもその体には『エルマ』という別人格が宿っている………それを知っているということは、レン様は何度がエルマに接触しているということですか？」

うん、と小さく頷く。

そしてソネアの殺害（実際にはしていないけど）を理由に母親がヴィートの国に攻め込んだことも話してくれた。そして母親が戦死した後、レンが即位し、あのヴィートという男が付きまとうようになっただけらしい。

「すみませんね、こんなに暗い話をしちゃって……」

「いいえ、とんでもありません！私だって真実を知りたかったのですから」

するとずっとレンがチュニツクのポケットから何かを取り出して、アシュリーナの首にかけた。

「これは……」

「サンゴの首飾りです。この国の特産品ですよ」  
にこつと笑ってレンが言った。

確かに特産品と言ってもいいような良質なサンゴで、全体的に朱色を基調としたデザインとなっていた。でも、市場とかでは売ってないような高価そう——たとえば、あちらこちらに小さな金や銀があしらわれている、それぐらい貴重そうなものだった。

「私がもらってもいいんでしょうか……？」

「ええ。もう受け取る相手がいませんから」

「受け取る相手……？」

「それはソネアにあげようと思っていたんです。12の誕生日に

ね。でももうソネアはいないから……アシュリーナ様にあげます」  
「そ、そんな大切なものを私が受け取るわけにはいきません！」  
急いで首から外そうとする。が、レンがそれを押しとどめた。

「アシュリーナ様、“a v i”というものを知っていますか？」

「“アヴィ”……？」

「そうです。“a v i”です。これは古い言葉で“誓い”を意味する言葉です」

「“a v i”……それがどうかいたしましたか？」

“a v i”なんて聞いたこともないし、ましてや口にもしたことが無い。古い言葉と言ってもどれくらい昔の言葉なのか、見当もつかないし……

そんなアシュリーナを見て、レンが微笑む。

「私は誓ったんです……この母なる海を統べる海神に。ソネアが  
グイートの妻になるとき……妻と言っても名目ですから。本当は人  
質ですよ……妹をこんな目に合わせなければいけなかった、自分の  
非力さに憤りました」

あつ、とアシュリーナは思う。両親が殺害されたときも、5年前  
も自分もそう思ったことを、同年代の少年王も感じている。自己の  
非力さを苛んでる。

そこになにかを感じた。けれどそれがなんなのかはわからなかった。

レンは続ける。

「だから自分に問うたのです、王あるまじき姿とは一体何か。私は文章の中でしか王に会ったことがありませんでしたから。だけど勉強しても答えは見つかりませんでした。結局行き着いた先は……今です」

寂しそくに微笑む。

「でも私は誓いましたよ、国家のためになる王になると。こんなこと誰でも誓うことでしょうけどね。でも私にはこれしか思い浮かばなかったし、ソネアの仇とも思いつきましたけど、それでは王の役目は務まりません。利己主義な王はつぶれますから」

「それがレン様の“a v i”<sup>誓い</sup>？」

「そうです……笑ってもいいですよ？でも私はいつだって本気で。そしてそれ……」

サンゴの首飾りを指差す。

「私の感謝の気持ちです。受け取ってください。それに……」

「それに？」

「本気でアシュリーナ様と友達になりたいんです。貴女は大切な人だから。あ、勿論国交の方もね……だけど純粋に友人が欲しいんです」

「では、それを私の“a v i”<sup>誓い</sup>にしましょう……私は友人を裏切らない、とか？」

くすくすつと笑うと、レンも笑い始めた。

「そうしてください……では、受け取ってくださいますね」

こくつと頷くと、レンは満足げに立ち上がった。

「あ、そうだ」

レンが振り向く。

「アダムの治療は無事終わりました。アシュリーナ様たちのおかげです……ありがとうございました」

「ありがとうございますって言わないでください……さっき誓ったでしょう？困ったときはお互い様ですよ」

そう言ってアシュリーナも立ち上がり、レンの隣へ走って行った。

## a v i―誓い（後書き）

無駄に長くてすみません（汗）でも洗脳を人体実験というのか……  
疑問ですけど書きました（おい）

あと、“a v i”は（多分）ラテン語で意味は（多分）「誓い」です。「使い方ちげーよ」と思われた方は指摘してください！というか教えてください！！

では、次から新章突入です 読んでくださりありがとうございます  
た！

## いつもの朝（前書き）

これからアシュリーナたちは帰国します。。（と言ってもまだ1日残ってますけどねw）

でもその前にアシュリーナたちはどこかへ行きたいようです。

## いつもの朝

「で、アダムさんはあの金髪男ヴィートの元副官ですかあ……」  
すっかり日が昇って朝になった。アンドレアたちも起きて、アシ  
ユリーナの話聞いていた。

アシユリーナはあの後、レンからアダムとヴィート、そしてソネ  
アの過去を聞いた。

なんでもアダムはヴィートの元副官。で、彼はヴィートのはけ口。  
手酷い暴行を受けていたそうだ。

彼はなんとかヴィートの元でやってはいたが、主君ヴィートのある計  
画——謎の一団に加担して、トシステムを滅ぼすというものを耳にし  
てしまった。

それで彼はヴィートの元を脱走。この国にやって来た。そのとき、  
彼の身体中には生々しい傷の跡があったらしい。

そんな彼を見てレンの母親がアダムを保護。彼はそのままレンの  
側近になったらしい。

一方でアダムの脱走に気づいたヴィートがトシステムにやってくる。  
理由はアダムの奪還。しかしそれが叶わなかったので、代わりにソ  
ネアを要求——名目上は正室だが、まあ彼女もまだ幼いわけだし、  
事実上人質としてヴィートの国へ渡った。

それから後の話もアンドレアたちに語った。

「はあー……複雑ですねえ……」

「まあどんな形にせよ、ソネアが生きてるとわかったから良かったわ」

ほうっと息をつく。それが本心だから。

「姫さん、それなんですか？」

カイルがアシュリーナの胸元に朱く光る首飾りを指差した。

「秘密」

につこり笑って返すと、カイルは何かを察知したらしく、ぶつぶつ言っていた。が、まあ良かったですね、と渋々答えた。

「ありがとうございます」

さつきよりも明るく笑って言った。

\*\*\*\*\*

「アダム様は……」

アシュリーナたちは、午前中のうちにアダムの様子を見に行った。するとレンがアダムの横たわるベッドの横に座っていた。

「あら、アシュリーナ様。それにアンドレア様、ヨシユア様、カイル様」

一人一人の名前を言ってから軽く会釈する。

「アダム様のお見舞いに来ました」

アシュリーナが言っているとレンも笑った。

「ありがとうございます！でも傷からくる熱でまだ寝てます。顔もまだ青いし……」

確かに顔色は良くない。けれども昨日の表情よりはまだマシになった方だ。

それを見てひとまず安心する。

「今は安静にしていらいしいですよ。無理せずね」  
ちらっとヨシユアの方を見る。彼は俯いていた。

ふふつと微笑んでレンの方に向き直す。

「明日、私たちは国に帰ります」

「あ、そうなんですか……残念ですね」

アシュリーナの唐突な発言に寂しそうに微笑む。

「なので今日はこの3人と海に行ってみようかな、と思っていま  
す……またいつ見られるかわからないので、見納めに」

「それでしたら私が町にご案内しますよ」

「ええっ！？レン様が直々にっ！？」

思わず呟く。

「しかし、アダム様はよろしいのですか？」

「ええ、ちゃんと侍医がつきますから……というか、私がここに  
いたら邪魔だとか言ってくるから。ですから一緒に行きませんか？」  
どうする？という目で後ろの3人を見る。警護で（いらんけど）  
ついてくる？ここに残る？

「私は……残りましょう」

そうヨシユアが言った。

アンドレアも残ると言っていた。で、肝心のカイルは……

「行きま……ふえ！？」

行く、と言いそうになったところにヨシユアが口をふさぐ。そし  
てこの通りですよ、と無愛想に言う……意外と空気読むじゃん。で  
もやり方が気に食わない。恥ずかしいなあ、もう。

くすくすつとレンが笑って、じゃあ行きましょうか、と椅子から  
立ち上がり、出口へ向かっていった。

## いつもの朝（後書き）

はい、次からトステムの首都探検です（1年生ですかつ！）

ヨシユアさんは俯いています……理由は5年前、自分が無理してばたんきゆうしたからですww

では、読んでくださりありがとうございました

## 首都探索 その1（前書き）

そのまんまです（笑）

あと、なんか投稿日ミスってましたね。すみません（泣）というわけで2日連続投稿ですが許してください（<人>）（

ではどうぞ

## 首都探索 その1

ちゃっかりマントを羽織って、長く伸ばした髪を一つにくくって……一応変装をする。でも自分が一国の王だとは、トステムの国民は気づかないだろう。顔なんか知ってる人いないと思うし……それはそれでまた寂しいんだが。

で、トステム<sup>レン</sup>の王はというと、完璧に別人に見えるほどの変装振り。

目立つ金髪は黒髪のかつらを被って、あの碧眼はサングラスをかけて外からは判りにくいようにしている。その上、服は平服。誰がどう見てもただの国民。アシュリーナもその変貌ぶりには驚いて、初めは誰かがわからなかったぐらいだ。

そんな2人は徒歩で首都リベアへ向かっていった。

\*\*\*\*\*

「朝市、というのですか……やっぱりここは国柄で海産物が多いですね」

アシュリーナは思わず呟く。

確かにここまでに、もう10軒以上、新鮮そうな魚が並ぶ店があった。さらにその先も所狭しと店が立ち並んでいる。ダングラジェとは大違い……

「アシュリーナ様のところはどんなんですか？」

「え……うーん……ダングラジェが砂漠のど真ん中だから……あんまり生ものはないですね……どっちかというと、綿とか麻とか……とにかく織物が多いかな？」

「へえー……それじゃあ食べ物とかはどうするんですか？」

「あんまり物が育たないから、野菜は輸入が多いです。遊牧民が

多いから家畜は多いですよ。あ、キャラバンが来るのでその方と物々交換している国民もいます」

「はあ……それより」

じつとレンがサングラス越しにアシユリーナを見つめる。いくら目をサングラスで隠していてもアシユリーナはどきつとせざるを得なかった。

「敬語、やめませんか？ 私たち折角、庶民に変装しているのにお互い敬語で喋っているというのがおかしいと思うんですけど……」

「あ、そうですね？ 助かります！ 私、敬語とか苦手なんですにこつと笑うと、レンもつられて笑った。」

「でも私のことをレンと呼んではいけませんよ……そうですね……トウイ、なんてどうでしょう？」

「トウイ、ですか……わかりました。では私はカレンで」

「カレン？」

「私の苗字です！ なぜか人の名前みたいなんですよねえ……あはは」

ホントに人の名前。だからと言って両親の苗字がカレン、だったわけじゃない。別に気に入らなければテキストにつけていいのが、ダングラジェの風習。そこところはよく理解できない。昔からの謎な風習その1である。

「じゃあ、いこつか」

早速友達口調。まあいいけど……

「カレン！ これ見てよ」

レンが言う。これ——美しく装飾されたブレスレッドをレンが指差して、一人盛り上がっている。

「まあ、彼女かい？」

店の主人らしい、ふくよかな女性がレンに向かって言った。慌てて首を振る。いや、振ろうとしたがレンがその前に頷いてし

まった。

「ちよっ！トウイ！」

「まあいいじゃん。これください」

「これ？いやあ、これよりこっちあげるよ！はい」

台の下から何かを取り出す。それはレンが指差したものよりも地味なものだった。が、貝殻やら、青系のビーズやらで作られていた。

「……ねえ、地味じゃない？」

「そうだけだね。これはペアで買ってもらいたくなう、っていう噂があるのよ。でもちゃんとつけてないとダメなんだって」

「へえ……」

「兄ちゃん、彼女に買ってやりなよ！因みにこれ売ってやるのはあんたたちみたいなお似合いのカップルにだけさ！今まで3組にしか売ったことないよ。しかも3組とも2人は幸せになったってさ……どうだい？」

「買いましょう！いくら？」

「いやあ、久しぶりにおばさんをいい気分にしたから、お代はいいよ！持ってきた」

はい、っとレンに手渡す。そしてお互いそれを手首に着ける。意外としつくりくるかも……でも、話からしてこの願いは『恋愛』じゃないか……でもお互い違う意味で幸せになれたらいいけど。

一応ありがとうとだけ言っておいた。笑顔で幸せに……とか恥ずかしいセリフを言ってるおばさんを見て、こっちの顔が真っ赤になっってしまった。

レンを見る。その顔は満足そうだった。

## 首都探索 その1（後書き）

もう完全にカップルですねwあははは……

それで日曜投稿はナシで。理由は……月曜日にテストがあるからです（泣）

でも学校から帰ったら投稿するので！

では読んでくださりありがとうございました

## 首都探索 その2（前書き）

2日ぶりですね

その2です。

ではどうぞ、

## 首都探索 その2

「ねえ、お腹空かない？」

レンが言う。

「え？朝ごはん食べてないの？」

「まあね。俺、朝ごはん食べない派だから………いつつもアダムに怒られる」

「朝ごはん食べないなんて………体持たないじゃん」

「あはは！アダムとおんなじこと言ってる！」

笑うところじゃねえ！とアンドレアとかになら言うところだが、レンにはさすがに言えない。苦笑い程度にとどめておく。

そんなわけでレンはなにやらサンドイッチのようなもの、アシュリーナはお菓子のようなものを買って食べた。その後もあれやこれや言いながらレンは食べ歩きして、アシュリーナはほとんどお供状態に。

「トウイ……いくら朝食食べてないって言っても、それは食べすぎじゃない？昼ごはん食べられなくなるよ？」

「へーき。実はこうみえても大食いなさ」

へへへと笑う。こうみえても………というのはレンの見た目。別に太っているというわけではない。寧ろ引き締まっていて、ぜい肉というものを探す方が難しいと思われる。

「つまり………食べても太らない？」

「そういうこと」

………なんて羨ましい体質なんだッ！

そう思いながらレンにとことこついていった。

その間、あのブレスレッドを売ってくれた（いや、厳密にいうと

くれた）おばさんのようにこの2人をカップル扱いしている押してくる商人が多数いた。

でもみんな一様に2人がトス<sup>レン</sup>テムの王と、ダン<sup>アシュリーナ</sup>グラジェの王だなんて気づいていない。自分はまだしもレンは気づかれるはずだな、とは思っていたので改めてレンの変装振りに感服。しかも「みんな友達」みたいな態度にも感心するなあ……

とんつ

混雑する道ですれ違いざまに誰かとぶつかった。

「あ、すいません」

後ろの人ごみに向かって言う。すると薄茶のマントをかぶった女性がちらつと振り向いた。

そしてにこつと微笑んで軽く頭を下げる。

その顔を……いや、深くかぶったフードから覗いた目を見る。

それは他でもない、あの薄赤と緑の目。<sup>オッドアイ</sup>

アシュリーナは一瞬どきつとなる。

まだこちらを見ていた彼女の口端が軽く持ち上がる。

そしてふいにその女性が横道に入った。

「あっ！」

駆け出そうとする。しかしそれをレンに止められた。

「カレン！どうしたんだ？」

「早くしないと、あの人が！」

「あの人……？」

「後で話すっ！！」

あ、ちよつと待てよ、と叫んだレンを完全無視して人の波に向かって駆け出す。そして彼女が曲がった道へ滑り込む。

しかしそこには人っ子一人いない、寂れた通りだった。勿論彼女

もない。

「……あれ？」

ハアハア息を切らしながら呟く。でもない。道を間違えたはずはないんだが……

「もう、急に走り出すから……どうしたんだい？」

レンが追いついてアシュリーナに問いかける。

「……知り合いを見かけたの……挨拶しなきゃと思っただけ……」

『挨拶』したい……できればこの手で

そんなことを一瞬思ったが、やっぱり馬鹿馬鹿しくなってやめた。こんなところで斬りかかっても迷惑だし。

でもなぜ、あいつが現れたのか。一応レンに尋ねる。

「トウイ……あなたは『神々の黄昏』を知ってる？」

「知ってるよ」

「……！」

衝撃。この国と彼女ら——『神々の黄昏』ラグナロクが繋がってるなんて……

しかしこれは思い違いだった。

「あれでしょ。『神々の黄昏』ラグナロクには気をつけろってやつ」

「……は？」

初耳。なにそれ？『神々の黄昏』ラグナロクには気をつけろ？まあ十分気をつけなきゃいけないやつではあるが……

「え、知らない？『神々の黄昏』ラグナロクに目をつけられたら殺されるってやつでしょ？でも選ばれた人間は『神々の黄昏』ラグナロクの導き手になることができるんだって。でも生贄が必要だから、国滅ぼしをしな

ければならない……そういう伝説」

「伝説……なの？」

「そうだけど……それがどうしたの？」

「なんでもない……そう。なんでもないの。忘れて」

でもアシュリーナはそんな『伝説』を目の当たりにした。という  
か今さっきその『導き手』を見つけてしまった。

……砂漠でへたつてたら良かったのに

小さく舌打ちする。そしてくるっと翻って大通りへ戻って行った。

## 首都探索 その2（後書き）

私は朝は食べる派です。。といつか3食ちゃんと食べてます。。

レンの体質が羨ましいです……お菓子ばりばり食べても平気だななんて……

では、読んでくださりありがとうございました

## 2人の主人

——『ラグナロク神々の黄昏』には気をつける

その目を見たら喰われるぞ

その声を聞いたら喰われるぞ

みんなみんななくなる

一瞬で町が灰になる

『ラグナロク神々の黄昏』には気をつける

可愛い子供は黒フードに誘われる

赤月の晩にパーティへ御招待

おいしいお肉にあったかいスープ

ケーキもたくさん置いてある

そして『リーダー導き手』に選ばれる

「明日は友達を喰ってきて」

『ラグナロク神々の黄昏』には気をつける

「……はっ」

頭がくらくらする。

体中が痛い……まだ熱があるようだ。

「……レン様……？」

辺りを確認する……誰もいない。さっきまでは人が——レン様がいたはずなのに。

彼の優しい声が遠い。安心させてくれる強い声。

それを押しのけて、あの男の声……夢に出てきた。

そして『ラグナロク神々の黄昏の詩』を何度も何度も繰り返してきた。

「くそっ」

まだ頭の中で停滞しているあの詩。どこかへ忘れ去りたい過去がよみがえる。

+++++

「いいかい、アダム……『ラグナロク神々の黄昏』はねえ、今日お前を迎えにくるんだ」

この国の皇太子がケラケラ笑いながら言う。

「そ、そんな御冗談を」

「冗談じゃないさ……お前は『リーダー導き手』に気にいられているんだ」

「なぜ、私が……？」

「勿論」

ニヤツと口端を上げる。

「お前を生贄にするためさ」

そう言っただけで彼はどこからともなく鞭を取り出した。

1時間後、皇太子はようやく手を止めた。

「アダム、どう？痛かった？」

痛みに喘ぎ、咳き込む従者を見ている。

「ハアハア……なぜ……」

「なぜって、もうすぐその『リーダー導き手』が来るからだよ。生贄にはまず主人からのちゃんとサヨナラを言わなければならないらしいから」

「なぜ、私が生贄にならないといけないのです！？」

「だからさっと言ってるじゃん。お前は『リーダー導き手』に気に入られているんだよ」

「生贄は……生贄は何のために必要なのですかっ！」

「うるせーなあ……ちったあ静かにしろ」

最後の一振り。

そしてちつと舌打ちをして、彼は奥の部屋へ行ってしまった。

「ケホツケホツ……」

「大丈夫ですか……？」

「……？」

背後から細い、少女の声が聞こえた。

後ろを振り向くと、そこには本気で自分のことを心配した表情で、華奢な少女が立っていた。

この国では珍しい緑色の髪と同色の目。服装から見てここに勤める侍女のようだった。

なんとか立ち上がる。

「大丈夫です……早く仕事に戻りなさい」

「アダム様……ですよね？お怪我なさっていますよ……どうなさったのですか？」

「なんでもない。なんでもないから……」

ふらふらとどこかへ歩いていこうとする。しかし彼女が腕にしがみついていた。しかも丁度傷のあるところに。

「いたっ……す、すみません」

「い、いえ！こちらこそ！！それよりお手当てを……！」

「大丈夫ですから！女官長に言いつけますよ？」

そう言っではみたが、彼女はテキパキと手当の準備を始めた。そしてさあさあ無理矢理アダムを横たわらせた。

「できましたよ……一体どうしたんですか？」

侍女が汚れてしまったタオルを洗いながら訊ねた。  
頑なに首を振った。

それを見て彼女ははぁーっと溜息をついた。

「今日は皇太子様にお客様が来ます」

「知っています……聞きました」

「それで……私は聞いてしまったのです」

「何を？」

膝の上できゅっと握りしめた手に力を込める。

「私の故国が滅ぶのですっ！」

「……え？」

彼女はぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「私は皇太子様とお客様が前にお話していたことを聞いてしまったのです！『トステムが欲しい』って皇太子様がお話していたんです……それでお客様が『生贄をくれたら、必ずや御心にそいまいよう』と……」

ひつくひつくと肩を震わせた。

「なぜ……それを……？」

「私はアダム様にそれを止めて欲しいんです！……あなたの傷を見て……村の家族のことを思い出してしまつて……」

「いけません……私なんかでは」

「何故です？」

「私がその……生贄なのです」

顔を伏せる。少しした後彼女が口を耳元まで寄せてきた。

「では尚更です……どうか、私のトステムを……トステムの皇太子様へ……レン様へお知らせください！レン様なら……助けてくだ

さいます！あなたも、トステムもっ！」

「私などに……そんな……」

「私を信じてください」

にこつと微笑んだ。ぎゅつと手を握ってくる。

——そして頷いてしまった。

++++++  
++++

そうだった。私がここに来たのはそれが理由だった。

彼女はどうなったのだろうか。ヴィート様に酷い仕打ちをされて  
いないだろうか……一目会えたら……そして無事で元気なら……

「アダム。起きてて大丈夫なのか？」

あの声。今1番聞きたかったレン様の声。

後ろを振り向く……確かに彼はそこにいた。

「レン様……どこかへお出かけに？」

彼は私の体を支えながら、ダングラジエアシユリーナの王と首都へ行って遊ん  
できたことを話してくれた。

それを聞きながら微笑んだ。

「アダム……良かった……」

そう言っレンがぎゅつと抱きしめてきた。

「れ、レン様？」

主人にそんなことをされたのは生まれて初めてだった。  
それでもまだ抱きしめ続けている。

「私にはそのようなことをされる資格はありません」

その腕を必死に外そうとする。が、外してくれなかった。  
しばらくして諦めた。

「どうして……？」

レンがニツコリ笑った。

「言つたろ？俺はお前が好きなんだって……あ、勿論従者として  
な。別にそういう気があるわけではないぞ！」

「でも……」

「もうグダグダ言うな！いつまでも俺はお前のことを心配してる  
！！本当に生きてて良かったと思ってるよ」  
涙がこぼれる。

「泣くなってもう！」

そうやって平和な昼下がりは過ぎていった。

## 2人の主人（後書き）

今回は視点を変えてアダム氏のお話でした

『ラグナロク神々の黄昏の詩』はどうだったでしょうか……なんか変なところないですか？「おめえ、ここどう考えても変だろっ！」と思われた方はご指摘ください！

では読んでくださりありがとうございました

## 帰国（前書き）

お久しぶりです♪

最近不定期になりましたwコロコロと更新予定日を変えてしまいすみません（汗）

でも土日には絶対更新できるように頑張ります！

これからもよろしく願いしますね

## 帰国

今日は、トステムでの最終日——つまり、アシュリーナたちがダングラジェに帰る日だ。

名残惜しいので4人で海に出かけた。

「ああー……これ持って帰りたい」

頬をぷくつと膨らませて海を指差す。

「いや、それは無理でしょ」

「……あんた、私をバカにしている？それぐらい私でもわかるわよ」  
アンドレアの真面目な指摘にイラつく。

「それぐらい、海に感動したのよ……砂の海はもう見飽きたわ」  
ごろんと砂浜に寝転がる。

するとアンドレアが慌てた。

「アシュリーナ様っ！お召し物が汚れます！」

「うわぁ……私、タルカシ連れてきた覚えはないんだけど」

侍女、タルカシのようなことを言うアンドレアを軽く睨む。

別に服が汚れたら着替えたらいいだけの話じゃない！というか砂なんて払えばいいのよ。ダングラジェにいたら嫌でも砂が服に付くというのに……何を言ってるんだ。

ふと、横を見る。

珍しいことにヨシユアとカイルが笑ってる（特にヨシユアの笑みはかなり貴重だ）。2人は結構端正な顔立ちだから、この風景はきつと絵になる——そんなことを考えてみる。

「ねえ、2人はここに来たことがあるんでしょう？」

2人に投げかける。

するとカイルがこちらに顔を向けた。

「ええ！ホントに子供の時だけだね……懐かしいなあ！ここで兄さんと遊んだんだよ」

「そうだったかな……義父は魚釣りがうまかったな」

「そうそう！3人で競争したけど、兄さんが一番下手だったんだよね」

「違うぞ。ドベはカイルだったぞ」

「そんなことないって！兄さんだって」

……喧嘩するなっ！そんな過去の栄光はどうでもいいんだ！……栄光じゃないな。うーん……こういうのを見ると兄弟だなって思う。見え張り合いこしてついつい喧嘩に……というのが本でよくある話。だって私には兄弟いないし。

まだワーキヤー言ってる2人は無視することにした。

アンドレアの方に向き直す。

「あのお……ちよつといい？」

離れている2人には聞こえないだろうけど小声で言う……まあ聞こえたっていい話だけど、うるさいのが1人いるから。

「なんですか？アシリーナ様がそんな折入った話をしてくるなんて珍しいですね」

「そりやどうも……あのさあ、私、レン様と出かけたでしょ？」

「はい」

「そこでさあ……『ラグナロク神々の黄昏』に会っちゃったんだよね」

「……ええええええっ!？」

声のポリウムが自然と大きくなる。

ちらつと後ろを振り向く……が、まだ2人は喧嘩していた。OK。

大丈夫……

「あんた、うるさいのよっ！折角小声で話してる意味ないじゃないっ!！」

「あ……スミマセン」

ふうっと小さくため息をつく。

「まあ……彼女1人だったし、遠くから見たただだから何にもされてない。脇道に入ったから追いかけていったんだけど……忽然と姿を消しちゃったんだよね」

「なぜでしょうか……彼女って『マリア』と名乗っていたあの人でしよう？なぜ、彼女はここにいたんでしょう……」

「私が思うに……あの金髪男の言葉を覚えてる？俺たちには女神がついているって……」

「ああ、そんなことも言っていましたね」

「あの女神が『神々の黄昏』のことだと思ふの……それに昨日話したでしょう？アダム様がこの国に来たとき、ヴィートが追って来たって。それでソネアを要求したって……絶対何かあるわ……」

「まあそうだとっても、しばらくはトステム侵攻はありえないでしょう」

「どうして？」

にこつとアンドレアが微笑む。

「だって依頼主が瀕死ですから」

「……そうだといいいけど……もう帰ろっか」

「おい、とカイルとヨシユアを呼ぶ。そして4人で来た道を戻り始めた。」

\*\*\*\*\*

「レン様。私たちは帰りますね」

ラクダに乗りながらアシュリーナは言った。

「ええ。気を付けて……滞在中はご不便ばかりかけてすみませんでした」

「いいえ、とんでもない……寧ろ楽しかったですよ！またいつか

機会があれば来ますね」

「ぱあっとレンが笑う。」

「そうですねっ！いつでもお待ちしてますよ！」

「すつと手首を見せる。そこにはあのおばさんがくれたブレスレックスがあった。」

『ペアで買おうと願いが叶うっていう噂があるんだよ。ちゃんとつけてないとダメらしいけど。今までこれを買っていったカップルはどれも幸せになったってさ』

おばさんの言葉を思い出す。

くすつと笑って、自分も手首を差し出した。

「お互い幸せになれるといいですね」

「そうですね……アシュリーナ様。ちょっと……」

レンが手招きする。

なんなんだろうかと、ラクダの上から身を乗り出す。

するとレンが素早く頬にキスした。

「！！れ、レン様っ！？」

レンはニヤツと笑って、

「また来てくださいね。アダムと待ってます……そのネックレスも忘れずに」

さあ、とアシュリーナの肩を押す。そしてラクダにちゃんと乗ることができたアシュリーナの顔は真っ赤だった。

「また来てくださいね」

レンが大きく手を振る。それに応えアシュリーナも手を振る。

これでアシュリーナたちのトステム旅行は完結。

## 帰国（後書き）

はい。完結しました。

次から新章突入です

では

隊商（前書き）

おひさしぶりです

今回は平和な章です♪平和っていいなあ……w

## 隊商

ふあああ

アシユリーナがあくびを噛み殺す。

彼女があくびをするときは大抵会議の時だ。王と言えども事実上参加していないにも等しい。

「こんなめんどくさいもん、やってられないしっ！」

そう漏らしたこともある。

今日は朝会議。眠い＋退屈という悪要素が2つもあるもんだから、<sup>アシユリーナ</sup>弱冠14歳の女王にはきついものがある。だが彼女は強制的に目を開けて一応頑張っている。頭は……どこかへ飛んでいそうだが。

「陛下。私はですねえ……」

いつも通り尻尾を振ってご機嫌を取ろうとする大臣。でも無視。

「陛下はどうお考えですか？」

「は？」

いきなり振られた。話を全く聞いてなかった。どうしたものか……

「ええっと……何の話？」

「聞いてな……いらっしやらなかったんですか！？」

「ええ、だってつまらないもの」

自称天使の笑みで返す。するとげんなりして発言中だった彼は椅子に着席した。

「では朝議はこれで……」

まだ若そうな青年宰相が言う。

そこで1人の男がやってきた。そして宰相に耳打ちする。

「……わかった。ご苦労」

男はぺこつと頭を下げるとすぐに退室していった。

今度は宰相がアシュリーナの傍にやってきて耳打ちする。

「どうやら隊商キャラバンの一行が陛下にお目見えしたいとのこと……」

「ほう。隊商キャラバンが……。わかった。会いましょう……もう来てるの？」

「ええ。謁見の間で待機させてありますので。いつでもどうぞにこつと微笑むとアシュリーナも退出した。」

\*\*\*\*\*

「アシュリーナ様。トステムで『神々の黄昏ラグナロク』に会われたのですから、警戒を怠りませんよう……」

「もう、タルカシ！ わかったって！！ さっきから何回言ってるの？……ちゃんと佩刀していけでしょ？ してるじゃない」

「でも私は心配なのですよ」

「あーはいはい。父さんと母さんに言われてる、でしょ？ もうそれ何回聞いたことか……行こつ、アン……ひゃっ！！」

何かが膝上の辺りを通り過ぎた。きゃっきゃつという笑い声も聞こえる……正体あばけたり。

「ちよつ！ ネル！！ シヤイ！！……私用事があるのっ！！」

まだ幼い双子がその大きな目で見上げる。少し潤んできている。

「「あしゅりーなさまあ……」」

「ああ……タルカシ、パス」

「まったく……ほら、シヤイちゃん、ネルくん。こちらでアシュリーナ様の御仕事が終わるのを一緒に待ちましょうね？」

「やだあ！」

「わたちもあしゆりーなさまといくう！」

2人がそろって駄々をこねる。泣く子（特に幼児）の扱いはすごく困る。あ、もう涙が……！

「と、とにかく！タルカシ、よろしく！！シャイ、ネル！タルカシの言うことをよく聞いてて大人しくしててよっ！！」

「「やだあゝ」」

まあこういう場合の対処法は、とにかく逃げることだ。それに尽きる。全力で走ったら追いつけないし……我ながら大人げないな。でも仕方がない。

「アンドレア！走れっ！！」

謁見の間までダツシュする。軽装を許してくれなかったので、着物の長い裾が邪魔で走りにくいがとにかくダツシュした。

後ろから泣き声が聞こえるような、聞こえないような……無視敢行。2人には我慢してもらおう。

\*\*\*\*\*

「お待たせいたしました」

謁見の間に入ると、おじさんを先頭に人々が玉座に向かって低頭しだした。彼らの背後には荷物を積んだラクダやらなんやらがあった。

「私はこの隊商のリーダーを務めています、ファルと申します。以後お見知りおきを」

以後お見知りおきを、っていうことはこの後もちよくここを出入りするということ？それは……

「え、ええ……どうぞ顔をお上げください。それで御用件と言うものは？」

するとニコツと日に焼けた顔が笑った。

「あのですね、これから『赤の砂漠』を越えようと思ひまして。

なにかと盗賊も多いところですから……それで少し兵士をお借りしてもよろしいかと……」

「はい？」

何、兵士を借りたい？ そんなずうずうしい。

『赤の砂漠』——そこは大した村も街も無いから警備兵もない。だから死角となりやすく、盗賊やら未知の怪物がいるとかいないとか……だから隊商キャラバンの人たちもなるべく避けて通るという、別名、魔の砂漠。

「あ、あの、そこを通らなければいけないのでしょうか？」

勿論、兵士たちだって嫌がる道だ。喜んで同行するものなど皆無だろう。

「いや、そこを通るのが最短距離なんですよ、『赤の砂漠』の途中にある町に寄るには。遠回りして行ってもいいんですが、それにはちよつと食料が……」

「で、では、食料をお渡しします！ それで如何でしょうか？」  
するとますます顔に笑顔を広げていった。

「ありがとうございます」

それが目的だったのね……そうならそうと云えばいいのに。

「ではお詫びに陛下に珍しい品を献上いたしますね……ほら、メシー、こつちへおいで」

メシーと呼ばれた、妖艶な美女が荷物を積んだラクダを引いてきた。

「これなるは遠い東洋の国の織物です。特別な方法で織られているから丈夫ですし、何と言ってもエキゾチックでしょう？ こころへんではまず手に入りませんよ」

「はあ」

それからどんどん異国の品を紹介してくる……つまらない。

ふあああ

小さくあくびをした。

## 隊商の青年（前書き）

土・日がちよつと来れないので……今日更新です

## 隊商の青年

「……今すぐ、食料の手配を……」

ファルからの執拗な商品の勧めを受けて、すっかり疲れてしまった。

まあ、受け取らないわけにはいかないから、テキトーに物をもらっておいた。それが礼儀だよな？

彼らは当分町に泊まるらしい。で、食料の調達ができれば呼びに来い、と。どんだけずうずうしいんですか。

隊商が切り上げてから、そこら辺にいたテキトーな大臣に命じておいた。

「……疲れた」

玉座を立つと、まっすぐ自室へ向かった……。あ。シャイとネルが疲れた上に、また疲れが……。！考えただけで疲れるな。でも、少しぐらいなら相手してもいいかな。

「「それで、それで!?!」」

綺麗な2重奏。あれ、ご機嫌？

「続き聞きたいか？」

「「ききたいよお」」

「じゃあ特別だぞ……。お姫様は隣の国の王子様と幸せになったんだよ」

「「わあー！よかったね」」

ぱちぱちという拍手。というか男の声がするぞ？誰だ??

「あんた、誰よ」

シャイとネルに話を聞かせていたらしい青年に言った。

「「あ、あしゅりーなさまだあ」」

双子がアシュリーナを指差す。タルカシが低頭する。

「僕かい？」

「そうよ……見た感じ、ここの人間じゃないわね」  
えへつと笑う。

「うん。僕は今日来てた隊商キャラバンのリーダーの息子だよ」

「……フォルって人の？なんでこんなところにいるの？」

「だってえ……つまんないじゃない」

しれつと言う。いやいやいや……つまんないって……

「誰を差し置いてそんなこと言ってるの」

まったく。というかどうしてこんなとこいんだよ？

「タルカシ。こいつどこから来たの？」

タルカシが地面すれすれまで頭を下げた。

「申し訳ございません……ただシャイとネルが泣き止まないのを見て、この青年があちらから……」

「止めなかったの？」

「……すみません」

はぁーつと溜息を吐く。こんな甘々の警備、じゃ侵入者歓迎という看板を立ててるみたいじゃないか。しかもこんな奥まで。ホントにダメ。

「……あんたも今回は見逃してあげるわ。だけど、もうここには2度と来ないで。今度はちゃんと牢屋行だから覚悟しておきなさい……あなたの隊商キャラバンは町へ下ったわ」

「君は女王様かい？……失礼したね。父の居場所を教えてくださいありがとうございます」

実に軽々しい男だ。女王と（一応）認識してるなら、敬語使えよ……後で大臣に言っておこう。1人分（勿論、こいつの分）減らせって。

男はシャイとネルに手を振ってから、出口の方へ歩いていった。

「あしゅりーなさまあ！あのね……」

2人はどうやらあの男に教えてもらった、おとぎ話をアシュリーナに話してくれているようだ。ここは真剣に聞いてあげる。

そして（支離滅裂な）話が終わった後、ちゃんと感想を言っておいてあげた。

「あのおにいちゃんにまたあいたいね」

「……ダメよ。もうあの人はここに来ないの」

「どうして？」

「不審者だもん」

「ふしんしゃ？」

「そう。悪い人なのよ、本当は」

「うそだあ」

2人はほっぺを膨らませながら抗議する。でも会えないのは事実ですから。

「ねえ、どこにいったらあえるの？」

「もう会わなくていいわ。その代り私がお話聞かせてあげるから昔読んでいた童話集がまだどこかに残っているはずだ。もしなくても近くにある図書館に行けばいい。」

「ほんとに？」

「ええ……もつと面白いのを聞かせてあげるわ」

「やったあ」

黄色い声。そしていつ聞かせてくれるのかとせがむ攻撃。

「あ、あしたね！」

……明日、首都を視察しようかなと思っていたところだし。多分2人を連れていくことにはなるだろうから、その時にでも……

「ホント？」

「明日、一緒に首都へ遊びに行くわよ……大人しくしてないと連れて行ってあげないから」

タルカシに聞こえないように2人の耳元でそばそと言うと、2人はぱあっと花が咲いたように笑った。

「「やくそくだよっ！」」  
「はいはい」

「アシュリーナ様、なんの約束ですか」

うるさいの——双子の父親、ヨシユアが来た。

「ええつとお……2人に童話を聞かせる話」

「……本当ですか？」

「あたりま」

「「あしたね、あしゅりーなさまがおそとにつれていってくれる  
つて！」」

おいっ！早速バラすなよっ！！

しかしヨシユアの反応は意外なものだった。

「そうか。それは良かったな……ちゃんとアシュリーナ様の言う  
ことをよく聞くんだよ」

「「わかった」」

「え……いいんですか、ヨシユア將軍？」

「將軍とか今更付けないでください……まあ今のうちに王宮の外  
を見るのもいいかと思つて。シャイとネルをよろしく頼みますよ」

ぽんつと子供の頭に手を置く。それが嬉しかったらしく、双子は  
きやつきゃ、と笑つてゐる。

……まだ、決まつたわけじゃないんだけどね。だつて朝議でも公  
表してないし。反対されたら力で押すけど、行けなかもしれない  
から。

でもこの状況を見る限り、行くことになりそうだ……ラッキー」

## 隊商の青年（後書き）

ラッキーⅡ 退屈から抜け出せる

です アシュリーナの頭の構造は基本コレです。どうやったら退屈な生活から脱却できるか、なのです！

では読んでくださりありがとうございました

## 視察（前書き）

首都の名前を出した記憶があるのですが……忘れちゃったので……テキストに付け直しています。覚えていらっしやる方がいれば、このダメダメな玖龍に教えてくださいm（- -）m出してなかったら……この話を忘れてくださいね

予約投稿なので……土日来れないのは確実です。。

## 視察

「いいですか？アンドレア將軍の言うことをちゃんと聞いてくださいよ」

「はいはい、わかってるって…… たくタルカシはそういうことばかり」

「「ばっかりー」」

シャイとネルがアシュリーナの真似をする。

タルカシがきつとアシュリーナを睨む…… なぜ？

はぁーっと溜息をついて、タルカシは続けた。

「あくまでも今回の目的は首都の視察ですからね。余計なことは一切なさってはいけません」

ずびしつと人差し指を突き立てる。

「わかったからって、もう……」

今度はこつちが溜息をつく。

朝議で提案すると満場一致の賛成。え？そんなわけない？力でねじ伏せた？そんなわけないでしょうが。フフフ……

それでアンドレアを率いて首都に下ることになった。

「それと、シャイとネルも同行するんですから、しっかりお世話してくださいね」

「はいはい」

「……真面目な話なんですけど」

「じゃあ、いこっか」

「「うん」」

双子の手を引いて王宮を後にする。

\*\*\*\*\*

賑わいを見せる、首都ケシユア。人々は平穏な生活を送っているようだ。

そこへアシュリーナたちが通る。庶民とは違った、煌びやかな格好をしている彼女らはかなり目立った。そして人々はアシュリーナ国王の姿を認めた。

「ねえねえ、あれって……まさか……」

「アシュリーナ様？」

「絶対そうだわっ！！アシュリーナ様あー！」

歡喜に沸く人々が一斉に通りつで集まり、手を振る。

それに応えるようにアシュリーナも微笑んで手を振る。

それを真似するようにシャイとネルも手を振る。

彼らの姿を見た民衆はぎょっとした。なんせカイルの子供のことは公表してなかったからだ。

「なんだ、あの子供？」

「まさか……アシュリーナ様の……！？」

「んなわけないだろっ！？アシュリーナ様はまだ14歳なんだぜ？」

「まあ……そうだな……じゃあ、あいつらは誰の子供なんだ？」

みんなが一樣に首をかしげる。

そこへ花束を抱えた女性がアシュリーナに近づいてきた。

「陛下、今朝摘んできた花です。どうぞ」

笑顔で渡される。

「まあ、ありがとう……珍しいわね。とても綺麗だわ。自室に飾らせましょう」

にこつと微笑み返すと、女性は顔を赤らめた。

そしてシャイとネルに話しかける。  
見知らぬ子供

「ぼうやとおじょうちゃんはこの子？」

「「？」」

「あ、この2人はヨシユア將軍の子供なんです」

「え……うそ……！」

どよめきが走る。いや、そこまで驚かなくても……いや、驚くか。  
「い、いつの間につ！？というかヨシユア將軍ってお堅い人だと思つてたのに」

「いや、お堅い人だぞ！なんせ子供出来たつてことも知られてなかつたんだし……女の影も見えなかつたぞ」

「一体相手は誰なんだ……？」

ひそひそ声が飛び交う。

「アンドレア……どうしようか」

隣に立つアンドレアに横眼をやる。

アンドレアは肩をすくめた。

「どうしようって……ここを早く抜けますか」

「そうね……それがいいわ」

アンドレアの案に賛成すると、もう一度手を振り、そそくさとその場を逃げ出した。

「あ、アシュリーナ様だっ……！」

「ホントだー！」

「うちに来てっ……！おいしい果物あげるよ」

「ずるいぞ、オクア！俺だって……！アシュリーナ様、うちの父ちゃんうまい飯作ってるんですよ！来てください」

道端で遊んでいた子供たちに捕まった。

彼らの存在を無視したいことはやまやまだが、そんなことしたら泣かれると困るし……。

というわけで一軒一軒回って行った。

案の定、その家の大人たちは大パニック。

「あ、あ、あんたっ！女王陛下だよっ」

「なんだって？お前ももうもうろ……わっ！あ、アシュリーナ様だっ！！」

「あんた、ちゃんとおしっ！！……アシュリーナ様、今日はどうなさったのですか？」

「ええ、ちよつと視察にケシユアに来たところです。みなさんお元気そうですね。安心いたしました。では、これで……」

（再度）ニコツと微笑みながら、家々を後にする。

子供たちの不服そうな声が後ろから聞こえてきたが、それは無視しよう……ゴメンね

ケシユアを回るのは一日かかった。  
首都

最後の集落に入った頃にはもう日が沈みそうだった。

「アシュリーナ様、これから王宮へ戻るのは危険です。ですからここを見た後は少し引き返して、宿場にでも泊まりましょう」

「……迷惑じゃないかしら？」

「でも、それ以外方法がありませんし……」

「じゃあ、お忍びで。あとこれだけの人数じゃあ迷惑だわ。3」

4人に分散しましょう」

で、グループを作る。

アシュリーナは当然、護衛のアンドレアとチビ2人と泊まることになった。

「「わあーい」あしゅりーなさまといっしょだあ」「  
きやつきやとシャイとネルははしゃぐ。」

と、そこで微かに笛の音が聞こえた。

「……田楽？なんかちよつと違うなあ……なんだろう」

「お祭りじゃないですか？」

誰かが言う。でもそんな賑わいはここにはない。

……ではなんなんだろう……？

アシユリーナは音のする方へ駆けて行った。

段々音が大きくなる。近づいている証拠だ。

そしてついに発見した。

「あんたは……」

異国風の服装をした青年——庭でシャイとネルを宥めるために物語を聞かせていた男が笛を持って岩に座っていた。

こっちに気づくとニコツと笑う。

「あれ？女王様じゃない？それにチビたちも……どうしたの？」

アシユリーナは自分の顔が引きつるのがわかった。

## 視察（後書き）

読んでくださりありがとうございました

## 迷子青年

「どうしてあんたがここにいるの？」

苦い顔でアシュリーナが言う。

青年は笛を吹く手を止め、えへへと笑う。

「ここで笛吹いてたんだよ」

「そんなの見たら分かるわよ……あの人たちは？」  
キャラバン

「さあ」

そんなんでいいのかよっ！？

それって完全にはぐれちゃってるよね！？

思わず天を仰ぐ。

「だってどこにいるかわからないから……」

あたしだって知らねえし。

「だからさ。どこか宿紹介して」

「厚かましい」

一蹴。すると青年はええーと岩の上で嘆いた。

「「ねえおにいちやん！またおはなしきかせてよお」」

シャイとネルがててつと彼の方へ走って行く。

アンドレアがそれに反応する。

「また……？どういうことですか？」

なぜかアシュリーナの方を見る。

「ん……あんたうるさいから教えない」

「なんですかそれ？ますます怪しいですよ」

「「このおにいちやんがおはなしきかせてくれたの！」」

シャイとネルが暴露。

「どこで？」

「「おうちで」」

「おうち……王宮のことか……おまえ、なにやつだ」

血気盛ん。アンドレアが剣の矛先を青年に向ける。

彼は笑いながら両手を挙げた。

「怪しいものじゃないってえ……あの隊商キャラバンの隊長の息子です。名前はゼンです。なんにも悪いことしてないってえ」

「「そうだよ。あんどれあのばあか」」

シャイとネルが言うと、アンドレアが顔を真っ赤にした。

笑ってはいけなйдらうか？

それはいいとして……

「まあこいつは何にもしてないし、私が放免したんだ。アンドレアが今更どうこうする問題じゃない。……で、本当にどこにいるか知らないのか？」

「うん。宿教えて」

「しょうがないなあ、もう。ええっと……メセトと同じ宿に泊まれ。メセト」

メセトと呼ばれた男が駆けてくる。

外見はアシュリーナと同一年ぐらいの少年。綺麗な黒髪に黒眼。

「なんでしよう？」

「今日はこいつも一緒に宿に連れて行ってくれ」

「ええ、めんどくさい」

「正直に言うな、おまえ」

「だって、男嫌いだし（笑）」

「大丈夫だ、こいつは男じゃない」

「いや、待って！男だし」

ゼンが抗議するが無視。

「「ええおにいちゃん、いっしょにとまらないの？」」

シャイとネルが甘えた声を出す。

「だって私が嫌だから」

「「じゃあシャイとネルはおにいちゃんといっしょにとまる」」

「ええ、俺ガキの相手苦手だから却下」

メセトがにつこり微笑みながら毒づく。

顔はそれなりに整っているのに、性格は最悪なのがこの男。アシ  
ユリーナの学校の同級生だから容赦がない。

「「でもお」」

「アシユリーナ様の警護の問題だからシャイもネルも諦めろ」

「「やだ。けいごつてなに？」」

「こいつが怪しい奴だから」

「「あやしくないもん。おにいちゃん、やさしいもん」」

「優しくてもダメ」

「「あしゅりーなさまあ、あんどれあがこんなこといってる！お  
にいちゃんわるいひとじゃないよね」」

「え……う……わからない」

微妙な返答に2人は頬を膨らませる。

「ガキのおもりまで俺に押し付けんなよ、アシユ。いっそのこと  
一緒に泊まっちゃえよ」

メセトが実にテキトーに言う。

双子の様子からしてそうするしかなさそう……最悪だ。

「もう……わかった……だけど、部屋は4つ以上離れたところに  
取るからなっ！！」

「4つ？なんで？でも泊めてくれるの？ありがとう」  
「ゼンがぶんぶんと握手してきた。」

というわけで迷子、保護。

## 迷子青年（後書き）

シャイとネルがカタカナ語をほとんど言わないし、漢字使えないし……めっちゃメンドクサイですw

ゼンとメセトをよろしくお願いしますm（- -）m

アシュリーナも設定上では、首都の貴族が通うような学校に行っていたことになってます。

では読んでくださりありがとうございました

## 宿

「ねえ……なんでこうなる？」

アシュリーナは大きな溜息をついた。

遡ること1時間前。

迷子<sup>ゼン</sup>を保護したアシュリーナたちは、宿を取りに町へ戻った。

少ない人数を分けて作った、それぞれのグループは翌日の待ち合わせを決めたあと、テキトーに宿を捜し歩いた。

幸い、よさげな宿が見つかったのでアシュリーナたちはそこに泊まることにした。

「いらつしやいま……あ、あれ？あ、あ、アシュリーナ様っ！？」

「一晩よろしいかしら？」

（自称）天使の微笑み

「い、いや、も、も、勿論ですよ！」

「3つ部屋は空いてますか？」

「は、はい、丁度いい部屋が空いてます」

「では、こそを頼めるかしら？」

「あい、わかりました……すぐに用意させますのでしばしお待ちを」

中年の小綺麗な男はすぐに奥へ入って、てきぱきと準備をさせている様子。

アシュリーナたちは狭いロビーの隅に固まって待っていた。

そしてしばらくすると数人のメイドたちがオーナーらしき男と出てきて客を案内した。

アシュリーナたち

「こちらでございます……狭い部屋でスミマセン」

と言われたが、部屋はすごく綺麗でピカピカに磨き上げられた床、窓から見えるは絶景である。狭いどころか、王宮の召使部屋よりは広い。花が生けられているなど、細かい心遣いも見られた。

「いいえ、そんな！素晴らしい部屋じゃないですか！御主人の手柄が現れたような部屋ですね」

「お気に召されたようで大変嬉しく思います。ほかのお部屋も同じような作りになっているので、どうぞ好きな部屋へお泊りください」

「ありがとうございます！」

「いや、ほんとありがとう」

ゼンがにゅっと顔を出した。で、オーナーらしき男の手をブンブン振って握手。ついでにメイドへの口説きも忘れない。

「ゼン、何やってんの」

ここはビシッと叩いておく。年上なのに情けない。こんな大人にはなりたくないね（笑）

ゼンは痛そうに頭を擦る。

「おにいちちゃん、だいじょうぶう？」

心配そうに見つめるシャイとネル。平気だよお、と男は返す。

「では、ごゆつくり。何かありましたらどうぞなんなりと」

宿のオーナーとメイドたちは笑顔を浮かべながらその場を立ち去った。

「はい、部屋分け。アンドレアは隣。ゼンは一番端……って言っても取った部屋の中で、私たちの部屋から一番遠い所ね。シャイとネルは私と寝る。いい？」

「ええーおにいちちゃんといっしょがいいー」

「わがまま言わない！はい、2人共部屋に行って」

そう言つて、アンドレアとゼンをポンスと押す。するとシャイとネルが怒り出した。

「「なんでおにいちゃんといっしょじゃないの!? やだやだやだ!」」

「じゃあさ、僕たち寝るまでは同じ部屋にいようよ? ダメかな、お嬢さん」

ゼンが悪そびれた様子もなく平然と笑顔で言う。

いや、そうしたら部屋分けた意味ないじゃないか?

しかしチビ<sup>シャイとネル</sup>2人は案の定賛成した。

「「あしゅりーなさま、そうしようよあ」」

服の端を2人で掴んで、引つ張ってくる。

「ね? 2人もそう言ってるんだし、お嬢さんいいよね?」

「誰が『お嬢さん』だ。アシュリーナ、よ。せめてそう呼んで」

「じゃあアシュリーナさん、そうしよう?」

<sup>アンドレア</sup>助け船は……全く役に立ちそうもない。はつきり言うところぽ向いている。面倒ごとから逃避しやがった! なんなんだ、一体。全く使えぬ奴め。

というわけで始めに戻る。

謎の男とは知らず、ゼンと一緒にいられるのが余程嬉しいのか、シャイとネルはずっと笑いつぱなし。アンドレアはそんな様子を見て微かに微笑む。

私はというと……察してほしい。1人だけ違う部屋に行ってもいいだろうか? いや、無理でしょうね、はい。

「「おにいちゃん、おはなし!」」

「ははっ! そんなに話が好きか? ……そうだな、じゃあ『星から

やってきたお姫様の話』。こんなんでどうだ？」

「うん、いいよ」

うん、悪いよ……と思ったアシュリーナを無視して3人は盛り上がり始めた。

……早く寝よう

そう決意した。

## 魔の月の話

「やっと寝てくれたよ、もう」  
ゼンがフーっとため息をつく。

シャイとネルが彼に話をするようせがんで、早2時間ぐらい。総5話ぐらい語らせていた。

ようやく眠たくなってきたらしく、途中からコクツコクツとうたた寝していたが、ついに耐えきれなくなり今では規則正しい寝息を立てて眠っている。

「子守お疲れ。もう帰っていいわ」

アシュリーナはゼンの顔も見ずに言った。

アンドレアが頷く。

「そうですね。我々は自室へ戻りましょう。行きましょう、ゼンさん」

アンドレアがゼンの腕を掴もうとする。しかし彼はそれをするつと抜け、アシュリーナに近づいた。

「な、何？」

ビククリして振り向いた彼女。

しかしゼンはにっこり微笑んでいた。

「いやさ、アシュリーナさんにもいろいろお世話になったし、君にもお礼しなきゃなっと思って。だからさ、忠告じゃないけど、君にもお話をしてあげるよ」

「いいわ、私そんな気分じゃないの」

しつと手を振るが、無視してアシュリーナの横に座り込むゼン。

「いいって言っているでしょう？」

「じゃあ聞き流すだけでいいから」

はーっとため息をつき、短くしてねと呟いた。

「あれ、元々砂漠の民に伝わる話なんだけどさ、知ってる人は知ってるみたいんだよね。アシユリーナさんも知ってるかもしれないけど。ま、知らなかったら覚えていて」

え？さっき言ってたことと違うような気がするの、は気のせいかな？

「昔々あるところにとても綺麗な女の人がありました。その人はお父さんとお母さんと何不自由なく幸せに暮らしていました」

「ちよつと待って。この話ってその幸せな女性の話が延々と続くわけ？幸せ話ならもういいわ」

そんな話聞きたくない。第一父と母と幸せに暮らしていたという時点でアウト。

しかしうつん、とゼンは首を振る。

「これから話は深刻になる。……元に戻すとある日彼女を残して家に生者はいなくなった。彼女が家を留守にしている間、何者かが家を襲ったのだった。狂気にかられた彼女は、犯人を探し出し、ついに殺してしまったー神からの罰だと言って。」

その後、彼女はどこかへ行方を眩ませた。消えてしまったのだ。ま、多分砂漠かなんかにふらふら入って行ったんだらうけど。

そしてそれと同時になぜか周辺国の犯罪者は減っていった。逮捕しようとしても、なぜか殺されて発見される。そしてその殺人を目撃した人は言ったんだ……あの少女が悪魔を従えて来たって。誰もが驚いていた。

そして最大の事件は『魔の月』の日。この日、とある町の子供たちが皆一様に消えてしまった。どこへ行ったのかも分からない。どこを探しても見つからない。大人たちは心配してあちこちを探し回った……そしてその数日後、その町は崩壊した……子供たちの手に

よって」

「ゴメン、まったく意味わかんない。第一『魔の月』の日って何よ？第一いなくなった子供たちが1000人いようと、10000人いようと、町は滅びるわけじゃないでしょうが」

呆れた。何なのかと思ったが、それはただのお伽話で、聞くだけ無駄というやつですな。『忠告』って言うから聞いてはみたものの

……

「『魔の月』っていうのは皆既月食の日のことだよ。不気味に紅く光る月を見て、古代の人は恐れ戦いた、っていう話知らない？あの日は月の魔力が強まる、転じて災いをもたらす悪魔の力が強くなる日って信じられているんだ。で、消えた子供たちは何者かに洗脳されてふらふらとどこかへ消えてしまった、というのが真相」

「その何者かっていうのが……」

「そう、あの綺麗な、そして狂気にかられた女の人。こういう事件が多く続いたけど、やはり人には寿命がある。約30年後、彼女は笑いながら狂い死にしたという。事件は終息するかと思いきや、一向に減らない。なんでも彼女の跡継ぎが代々誕生し続けているらしい……これが『黄昏をもたらす民』の始まりだと言われている」

『黄昏をもたらす民』？それって……

「ねえ……その人たちって『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>じゃない……？」

「そう言ってる人たちもいるね。どうして？」

きょとんとした顔で尋ねる。

「いや、いいの。忘れて……でもそれがどうして忠告なの？」

「だって、今度皆既月食が起きるから……あ、なにその疑いの目。僕達は腐っても星を読んで旅する隊商だよ？それぐらい星読みがいなくたってわかるさ」<sup>キャラバン</sup>

……十分怪しいから、一応神官にでも訊いておこう。

ということはもうすぐ『ラグナロク神々の黄昏』が活動を始めるということ？子供たちを集めて？どこの国を狙うのかなんて愚問だ……きっとターゲットダングレラジエを標的にしてくる。

彼女は……マリアは絶対ここを灰に変えにくる。どうしたものか……。

「一応忠告として聞いておくわ。貴重な話をありがとう……ではおやすみ。というか早く部屋から出る」

じゃあね、と手を振りながらゼンは退室。それにアンドレアも続く。

彼は退室際、こちらを見て小さく頷いた。

どうやら決戦の日は近いらしい

## 魔の月の話（後書き）

月食の話は特に、古代バビロニア周辺で信じられていたようです。

月食の日、彼らは紅い月光に当たらないよう、一歩も外に出ず祈禱をしながら過ごしていたようです……これは某マンガの解釈。

では読んでいただきありがとうございました

## 帰宅（前書き）

お久しぶりです。。テストが終わったので早速投稿します。

しばらく書いてなかったもので、アシユリーナの口調が変わったような気がします。が、気にしないでください（いや、気にするでしよう）

## 帰宅

で、翌日。無事に王宮に戻りましたとき。ぱちぱち、となるはずだったのに……

「ゼン……さりげなく付いてきてるでしょう?」

「え?なんだって??」

「……えーっと、確かこちら辺に短け」

「ああ!ちよつと待って!!ゴメン!!でも行くところ無いんだっ……!」

……キャラバン 隊商探しか……。

でもこれはゼンが悪い。ふらふらと王宮の中に入り込んできて、拳句の果てにシャイとネルを手なずけて。それで仲間の所在が分からず、敢えなくアシユリーナたちが保護。

……情けないね

「いや、『情けないね』じゃないから!」

「でもさあ、もう朝だし、あんたには立派な足があるじゃないか!頑張つて歩いて探せ(笑)」

「(笑)つて……僕、バカにされてるよね?」

「あ、ばれた?……まあ、とにかく、探せ。ここは広いわけじゃない。一日で見つかると思うぞ?」

「そ、そうかな……?」

「「おにいちゃん、ばいばい」」

「み、見捨てられた!」

シャイとネルに見捨てられたと感じて、そのまま諦めてくれたら

OKだったのに。

結局こいつはついてくるわけです。

「あ、陛下お帰りなさい」

アシュリーナたちの姿を認めた侍女たちが声をかける。それに笑顔で返した。

「ただいま。変わったことは？」

「ありませんでしたよ。さあさあお疲れでしょう？お部屋へ行かれますか？」

「ん。それよりちょっと用事があるからさあ……ゴメンね」  
そう言つて、侍女の申し出を断った。

用事——まずはお荷物<sup>ゼン</sup>の仲間を探すこと。

これは、手配した食料によって左右される。準備できていたら、彼ら呼んでそのまま連れて帰ってもらう。出来ていなかったら、自分で町へ下りて探してもらう。

そしてもう一つ。

ゼンのあの話。『魔の月』——いわゆる月食の有無。本当にあるのかどうか、一応確認しなければならない。

あの話については半信半疑だが、もし伝承通りやつらが活動を開始するならばこちらとしても何らかの対策を取らねばならない。

というわけでアシュリーナは単身、現在使用されているであろう会議室へと向かった。

重装な扉の中から不特定多数の人物のぼそぼそとした話し声が聞

こえる——つまり会議中。

アシュリーナは深呼吸を一つすると、勢いよく扉を開けた。もちろん、一斉に大臣たちが振り返る。会話もぴたりと止まる。シーンとした空気の中をアシュリーナは堂々と歩いて行つて自席へと着席した。

「陛下！お帰りになったのですか？」

呆けたような声を出す一人。

「私が帰つてなにか不都合なことでも？」

声の主に微笑を浮かべながら訊く。

「い、いえ。滅相ありませんっ！ただ教えていただいたなら、わざわざ陛下の御足労もなく、私どもがお迎えに上がりましたのに」

「お気持ちだけいただいております」

焦つてうわずつた声を出した彼に素つ気なく返すと、代理議長を務めるヨシユアに声をかけた。

「私の不在の間、迷惑をかけたね。それで今はなんの話をしているの？」

ヨシユアは軽く低頭すると、主の問いに答え始めた。

「……灌漑、ねえ。それもそのうち始めなきゃね」

なんせ水不足の砂漠。わざわざ遠いオアシスまで行くのも面倒くさい。というわけで灌漑を作っちゃおう、という計画。

一番近いオアシスから水を引いて全土へ通す。これで少しは農作も楽になるのでは？と。

「これについてはサマリナ大臣をはじめとする、水管理省のみなさんに一任します。滞りのないように」

「はい」

歯切れのいい声に頷くと、アシュリーナは食料の手配を命じた大臣に尋ねた。

「あのずうずうしい隊商に渡す食料は？」

「手配できました。いつでも渡せます」

「御苦労さま。ではこの後、彼らを呼んでみてください」とりあえず一安心。これでゼンとお別れできる。

このあとも少し残っていた議題について話し合い、1時間後にお開きとなった。

ファルたちを呼びに行ってもらっている間に、自室へと戻り休憩することにした。

「あー疲れた……って、あんた、ホントに懲りないわね」

苦笑いをしながら、あの日同様後宮に入ってきてシャイとネルと遊んでいるゼンに声をかけた。

「あ、おつかれさん」

「……。今日、あなたには帰ってもらう。食料の手配が済んだから、ね。今度という今度は本当にさよならよ」

すると、ゼンは寂しそうに笑った。

「へえ……そうなんだ。うん。そうか……」

1人でしきりに頷いている……気持ち悪い。

「じゃあ、僕もちゃんとさよならするよ。でも、アシュリーナ……ちゃん、だよね？アレだけは忘れないで。『魔の月の日』には何かが起こる。悪い予感がするんだ……」

珍しく真剣な表情で語るゼンに、アシュリーナも真顔で頷いた。

「わかってる。でも、私たちは『神々の黄昏』ラグナロクなんかにには負けな

い……この手で消す」

「勇ましいねえ」その調子だよ！」

「なっ……！バカにしてるでしょう！！本気なんだからっ！！」

ゼンはふふつと笑うとすくつと立ち上がった。

「じゃあ、僕はもう行くよ。こんなところにいたら首と体が離れちやいそうだから（笑）」

「そうね……またね。い、意外と楽しかったわ」

「意外と、つて……まあ、褒め言葉として受け取っておくよ」  
じゃあね、と手を振りながら、彼はこの場をあとにした。

「陛下、少しよろしいでしょうか？」

後ろから老いた声が聞こえた。

振り向くと、頭には変わった形をした帽子をかぶり、神官を表す真つ白な服。そして『最高位』を表す胸飾りをつけた老神官が立っていた。

「あ、私も丁度お話があつたのですよ、パトロ大神官」

「では、まず陛下のお話を伺いましょう。私めの話は後で」

パトロ大神官は無数のしわが刻まれた顔をくしゃつとして笑うと、アシリーナのいるところまで下りてきた。

「それでは、お言葉に甘えて……。街である男から聞いたのですが、近いうちに日食が起きるのですか？」

「おお、奇遇ですな。私めの話もそれなのですよ」

「え？」

驚いて目を見張ると、老神官は口を開いた。

「その男が何者かは存じませんが、確かに日食は起きます……それも皆既日食が。少なくとも1か月以内には」

## 対抗策

「な、なんですって……？それは本当ですか……？」

愕然とするアシュリーナに向かって、パトロ大神官は静かに頷いた。

「左様……ですからこれから1ヶ月、夜の外出は控えてください。万が一の事があつては、ダングラジェは立ち行かなくなります。そして、我々は今日より祈祷を行います。アシュリーナ様にも祈祷に参加されてください」

「……わ、わかりました……」

顔面蒼白（もちろん、めんどくさそうな儀式を思つてのことではない）。

こんなに早く来るなんて……ゼンの言っていたことは間違いではなかった。少なくとも月食の件は。

あとは……

「パトロ大神官、ご苦労様です。では今夜、準備が整い次第神殿の方へ向かいますので」

それを聞くと、老神官はぺこつと頭を下げ、神殿の方へと歩いていった。

彼がアシュリーナの視界から完全に消え去ってから、近くにいた侍女に「アンドレア・ヨシユア・カイル《3将軍》を呼ぶように頼む。

するとものの数分で3人は集まった。

「いかがなさいましたか？」

アンドレアが尋ねる。

「ゼン——あの放蕩男の言ったことは正しかったわ……月食は起

こる、近いうちに。で、ゼンの話によると月食が起こるその日、『  
ラグナロク  
神々の黄昏』は動くわ」

「!!」

3人に緊張が走る。

ただの作り話かもしれない。どうやらゼンはお伽話を作るのが趣味のようだった。だからそれもただの物語りに過ぎないのかもしれない。しかし……

「一応、兵の増強をあなたたちには任せるわ。多分これが最終決戦になると思うの……『  
ラグナロク  
神々の黄昏』を近いうちに私は潰すわ」

「万が一のときを考えて、ということですね。では早速私はそれにとりかかりましょう。数を増やすことは無理に近いでしょう。が、個々の兵力の向上を図ったのでよろしいですか」

ヨシユアが真剣に訊いた。それにアシュリーナは無言で頷いた。

「それと、街にも警備兵を置いておくように……狙われるのは子供だわ」

「え？」

3人とも驚いたようにアシュリーナを見つめる。

カイルがくすくすっと笑いながら言った。

「そりゃあないよ、姫さん。やつらはまっすぐここに来るよ。街に警備兵を置くのは賛成する。だけど子供を狙うのはちょっと、ねえ」

「いや……子供を盾にしたらあたしたちは手を出せない、でしょ？そしてゼンの話でも子供を操った女が街を滅ぼしたって言ってたわ」

「それは物語じゃない。真偽は定かではないよ？」

「で、でもね、用心に越したことわないわ……とにかく、3人には直ちに兵力増強と警備兵の配置を頼むわ」

「はい」

歯切れのいい返事に満足する。これで、被害は最小限に食い止められる……かも。

「じゃあ、万が一襲ってきたら、僕たちは姫さんの警護？」  
にこつと笑いながらカイルが訊く。

「いや、私なら大丈夫。自分で戦えるし……」

「でも、危なくない？だってさ、使えと言っても相手はプロだよ？」

「大丈夫だからっ！！私は……私の手でケリをつける……！！」  
一瞬空気がしんとなる。

息をのむ音すら聞こえる。

だけど、これが私の決意。5年前に果たせなかった仇を討つ。

絶対やってみせる

「アシュリーナ様、隊商キャラバンが到着しました」

その凍てついた空気を破ったのは、アシュリーナを呼びに来た侍女だった。

「あ、うん。すぐ行くわ！ありがとう」

「かしこまりました」

彼女は一礼すると、そのまま立ち去った。

「じゃ、私は行くから……よろしく頼んだよ」

3人も頭を下げ、広間へ向かうアシュリーナを見送った。

\*\*\*\*\*

「いやあ、申し訳ございません！本当に助かりました♪」

「そ、それはどうも……」

ファイは豪快に笑い飛ばしていたが、なにが面白いのかちっともわからない。

そんな視線を送り続ける。

が、完全に無視された。

「では、私らはこれで……本当にお世話になりました。ほらっ、ゼン！ お前も挨拶しろっ！……」　　「たたく、どこに行つてたんだか。ふらふらと出て行きやがったと思つたら、ふらふらと戻つてきて……すいませんね、うちの息子も国の人にご迷惑をおかけしました」　　「特に私たちにね、という言葉は胸の内にしまつておく。」

「では、失礼いたします」

ファイをはじめとする、隊商キャラバンの一行はそろそろと立ち上がり、ぞろぞろと出て行った。

その際に、最後尾につけたゼンがアシリーナに手を振った。仕方なくアシリーナも小さく手を振りかえす。

……災難その1は去った（と思う）

## 夜の顔（前書き）

「暇がつかまらない」というのはあたしだったりします。

## 夜の顔

熱砂の砂漠を漆黒の闇が包む頃。

朧げに浮かんだ月は弱々しい光を放っていた。

相変わらず暑い南風が吹き荒れる砂漠に、1人の人間が立っていた。

全身を真っ黒なマントで包み、目深にフードを被っているのは分らない。

しかし、わずかに覗いた唇の端は持ち上がっていた――つまり笑っていたのだ。

そしてすつと右手の人差し指を前方に持ち上げる。

「もうすぐ……裁きの矢が……あの娘を貫く……国は……灰と化す……クスクス」

人差し指を向けた方向……といっても遙か彼方なのだが、そこには全体が灯りに照らされ、明るい色を放つ街があった。

「汝に……幸あれ」

そう呟くと、クスクスつという不気味な笑いを残し、その人はマントを翻し、闇夜に消え去った。

\*\*\*\*\*

「暇ってなんて素晴らしいのかしら」

質素な椅子に優雅に腰掛け、足をぶらぶらさせているアシュリーナが呟いた。

「暇であることは、それだけ平和ということなんですよ」

そばに控えていた侍女、タルカシがそうコメントした。  
「だから素晴らしいって言ったじゃない」

『暇なんてつまらない』

そういう思考の人が増えているような気がする。

けれども、暇ってなんにもなくていいし、寝てたって怒られないし……すごく魅力的

「「ずどーんっ」」

アシュリーナの体側になにかがぶつかる。……シャイとネルだった。

「何？今、すごく機嫌がいいから相手してあげるよ？」

思いつきり皮肉を言う。不自然に口角が持ち上がる。

「「え、ほんと？やったあー」」

……わかるはずもないか……

「じゃあ、愛すべき暇にさよならするわ」

「いつてらっしゃいませ」

タルカシが止めてくれることを期待していたのに送り出された。  
いつもなら止めるくせに……

……減俸決定（嘘）

\*\*\*\*\*

夕方。夕日が西の空を朱に染める頃。

「ただいまあ」

シャイとネルが王宮に向かってダッシュする。

「あら、シャイとネルじゃない。どこに行っていたの……って、アシュリーナさまも??」

侍女の一人が口に手を当てる。

「う、うん……ただいま」

ちびは元気である。なんの文句もない。だって子供が元気が一番と言っているのか。

でも10歳差とはこうも違うのか？

最近体力の衰えを感じます。どうしたらいいのでし……

「アシュリーナさま？独り言はいつものことですけど、すごく怪しいですよ？」

正論言っな。給料減らすぞ（嘘）

「ええっと……湯浴みするから」

「はい、わかりました。すぐ御用意しますね」

ふふふつと笑いながら彼女は奥へと歩いて行った。

湯浴みを済ませた後、晚餐。

『晚餐』といってもそんな豪華なものではない。アシュリーナがそれを禁じている。

しばらくしてシャイとネルは就寝。子供は早く寝ないとね

「陛下、御準備はできましたか？」

「ええ。今行きます」

あの不吉な予言の晩から続く、（めんどくさい）儀式。

別にいらなくね？と思ったが、神官たちは撤廃を許しはしないだろう。特に大神官。

白一色で統一した服で侍女にかしずかれながら神殿の方へ向かう。長い回廊を神官と侍女2人、そしてアシュリーナの4人で歩く。

今日は綺麗な満月。淡い光を放ちながら、黒の世界に君臨する。

「……月食なんて起きるの？」

そう呟いたとき、神殿の方から男が走ってきた。

「何事ぞ？」

同行していた神官が男に言う。

「つ、月が……顔を……っ！」

急いで振り返る。

少し月が欠けていた。

## 月隠し（前書き）

お久しぶりでございます、玖龍です。

テスト終わったー♪だから更新スピード、早まるかな？と思ったら  
大間違いなような気がします↑

それではよろしく願いしますm（- -）m

## 月隠し

若い神官の言葉は間違っていなかった。

砂漠を照らす月は禍々しい紅色に色付き、顔を隠すかのように欠けていく。

それを超然として眺めていると、侍女にはっ倒された。

「な、何するのよっ！」

「アシュリーナ様、どうか御身をお隠してください！あの光に直接当たってはけません」

彼女はさつと純白の布を掛けてくる。そして自分も同じような純白の布を被って、アシュリーナの側に控えた。

「これより一刻の間、月は顔を隠されます。それまでなるべくお早く宮殿の奥深くに戻られますことを推奨します」

神殿の方から走ってきた神官がそう告げた。

「わ、わかりました……行きましょう、アシュリーナ様」

「大丈夫だよ、こんなの迷信だし」と言いたくなるのを抑えて、静かに立ち上がる。

そして侍女と共に足早にこの場を去った。

\*\*\*\*\*

「アシュリーナ様、一刻の間はここで大人しくしててくださいね。絶対ですよ」

「はい……めんどくせ」

「何かおっしゃいましたか？」

おおぅ……聞こえていたか。ぼそつと言ったつもりなのに。

首を横に振ると、侍女は怪訝そうな顔をして広間から出て行った。

「そこにいるんですよ。出てきなさい」

後ろに向かってそう声を投げる……するとそろそろと出てきたのはカイルだった。

「え、えへへ？こんばんは、姫さん」

なんとも情けない笑顔を浮かべた彼に一発蹴りを食らわそうかと思ったが止めた。

残りの伏兵の存在に気が付いたからだ。

「アンドレア、後ろは隠れてるけど頭が見えてる。ヨシユア、存在感がないからって、壁とは同化できないのよ。諦めなさい」

はぁーっとため息をつく。勿論、30がらみのおっさんたち（しかも將軍職）がかくれんぼをしていることに向けてだ。伝わったかな？

「ほら、僕たち姫さんが心配だったわけですよ。御存知ないかも知れないですけど」

「知るか、アホ」

シユンとしたカイルは完全に無視して、他の2人の方に向き直る。

「……つたく、私相手にかくれんぼなんて3万年早いわ。私を誰だと思ってるの、かくれんぼのプロフェッショナルよ」

「いつからそんなの決まったんですか？」

「今日からよ……じゃなくて、ここにいてくれて助かったわ。私が危険を冒す必要が無くなったもの……街の方は滞りないでしょうね？」

真剣な眼差しを向けると3人も姿勢を正す。

そしてアンドレアが答えた。

「勿論です。増強した兵士たちをアシュリーナ様の仰せの通り配置してます」

「OK。できれば無駄であればいいけどね……勿論いい意味で」

これはアシュリーナが前々から用意していた策ともいえない策。

3將軍の腕利きの部下たちを巡回兵士として一區画に10人程割いて、怪しい人影がないか見張る。

そして残りの兵士たちは千人隊長を先頭に、国の正規・不正規問わず、全ての入り口に配置。  
ラゲナロク

これなら万が一“神々の黄昏”が襲ってきても何とか足止め程度なら出来る。

「そうなれば文句ないけどねえ、ま、安心できて、兵士たちもわけわからず強くなれたし、一石二鳥だよな」

「カイル、少しは口を慎んだらどうだ？」

「兄さん……ウザい（笑）」

兄弟喧嘩が勃発しそうだが、ここでは抑えてもらってですね、できれば私の相手をしていただきたいんですが……

そんな気配が全くないので諦め。

というわけで暇な1時間をぼーっと過ごしたアシュリーナだった。

## 顛末（前書き）

なんとか続きを書きました。

## 顛末

一時間もすると月は元の姿に戻りつつあった。

禍々しい紅から輝かしい黄金へ変貌する。

アシュリーナはその様子を見ていた。

別に止められはしなかったけど。そんなでいいんかいっ！！

「ヨシユア、街に伝令を飛ばしなさい。状況報告を」

「わかりました」

浅く低頭すると、ヨシユアは部屋から出て行く。

するとカイルが不平を言いだした。

兄は任務を任されたのに、自分は何もない、と。

めんどくさい奴だなあ……と思いつつ、指令を出す。

「あんたはここを見回りなさい……何にも異変がないか探してきて」

「OK」

親指を立ててアシュリーナの方に腕を突き出す。そして足取り軽く、彼も部屋を出て行った。

「アンドレアはあ……居残り」

「はい」

「よろしい……では私に付き合いなさい」

にやっと笑うとアシュリーナは立ち上がった。

自室にたどり着くと、寝台の傍に立てかけてあった白銀の剣を掴む。

この剣を与えたあいつは来るのだろうか。

エリだけではない。そもそも『ラグナロク神々の黄昏』は来るのだろうか、この国を滅ぼしに。

6年前、両親を殺したことも、5年前にアシュリーナを暗殺（堂々と来てたがな）しようとしたことも、トステムのレンとソネア兄妹を傷つけたことも許されることではない。

ただでできれば和平をしたいと思う。

できればこの剣を振るいたくない。戦いたくない。殺したくない。

——殺されたくない。

でも彼女らはいつかは来るのだろう。

やつらが「あの方」と呼ぶ、『マリア』は去り際に「いつか会えるといいわね」と言った。偶然トステムですれ違った時は、アシュリーナの方を向いて含みのありそうな笑いを浮かべた。

彼女には交戦の意志があるのだろう。

そして彼女を盲信するエリたちも来るのだろうか……ここを滅ぼしに。

剣を手にしたまま沈黙している主君を心配してか、アンドレアは彼女に声をかけた。

「アシユリーナ様……いかがされたのですか？」  
その声にはつとなる。

「何でもないよ……多分」

最後の部分は誰にも聞こえないぐらいぼそつと言った。  
ホントは「多分」どころか「嘘だけど」が本心。

ホントはメチャクチャ心配なんだ

「さあ、行こうか……剣の稽古をつけてもらおうかなって」

「ええー……あ、なんでもないです。了解しました。じゃあ行き  
ましようか（ニコツ）」

後ろを向いたすきに頭を殴つちやるか、と思った。本気で。

\*\*\*\*\*

「アシユリーナ様は目が冴えてるでしょうけど、一応夜なんで1  
時間だけですよ」

「はい」

両者、動きやすい軽装に着替えた後、広間で互いに向き合う。

「まず、『構え』を取ってみてください」

「いつもやってるんだけど」

「何事も基本からです。基本に忠実に、でしょ？」

「ちえっ……こうでしょ」

剣を正眼に構える。利き足である右足を前にして。眼は敵を見据えるように。

するとアンドレアは出来のいい生徒を褒めるような声を出した。

「お見事……一つだけいいですか？」

「な、何よ……」

自然と上目遣いになる。

「気迫が足りません。いつも一人で練習してるでしょう？」

凶星、ではある。しかしそれがなぜ 気迫が足りない につながるのか？

そんな思いを感じ取ったようにアンドレアが口を開いた。

「対象がいないと相手を倒そうという気が起きないでしょう。恥ずかしがってたらいけませんよ」

「べ、別に恥ずかしがってないもん」

「じゃあこれからは私が相手いたします。練習の時はぜひ私を呼んでくださいね」

笑顔で「誘ってくれ」と言われている。こういう場合はどうすればいいのか……？

一応反抗。

「じゃ、じゃあアンドレアはその 気迫 が足りてるの？み、見せてよ！」

彼は静かに頷くと、息を一つ、すうつと吸った。

するとぞくつとするような感覚に襲われる。

思わず後ろを振り向く。しかし誰もいない。何もない。

ではどこから……前か。

その様子を見えていたアンドレアは微笑みながら剣を構える。

「わかりましたか？これが 気迫 です」

求めてもいないのにつらつらと説明しだす。

「これはですねえ、戦いにおいてすんごく役に立つんですよ。相手の力量を図るのには便利だし、逆に相手を委縮させることもできますしね。あ、最後のはもちろん訓練次第ですけ」

「アシユリーナ様」

ぺらぺらと饒舌に話しているアンドレアの説明を遮断したのは、伝令を走らせたヨシユアだった。

「ヨシユアじゃない。どうだった？」

ただ今戻ってきた様子のヨシユアはこの風景に一瞬眉をしかめた後、こほんと軽く咳をした後、報告をし始めた。

「特に異常は認められませんでした。以上です」

短っ！

まあ端的な説明ができる者ほど優秀であるらしいから……

「ああーよかった。あのヘンテコリンの言ったことは間違っていたのね。もう名前なんか忘れてやる……というか忘れた」

「アシユリーナ様……」

なんとというか記憶の悪さというか……家臣としては「おいおい」と言ってやりたくなる場面だ。が、言わない。後が怖そうだから。

「じゃあ練習にもど」

「姫さーん！！」

「今度は何だね？」

アンドレアはまた話を遮られ、アシユリーナは少しイライラしながら振り返る。

するとカイルがダッシュして入ってきていた。

「に、兄さんもいたの……」

ヨシユアの顔を認めると顔をさっと青くさせた。

「なんだ、俺がいたら悪いのか」

「い、いやそうじゃないけど……」

しばらく言うのを躊躇ったあと、ホントに言いにくそうに口を開いた。

「ネルとシャイがいません」

## 顛末（後書き）

アンドレアが不憫です（作者ですが）

## 搜索

「な、なんですって……！？それは本当なの？」

カイルの報告に愕然となる。

シャイとネルがいらない……？そんなまさか……というか部屋の前  
に一応、見張りは立てておいたはずなのだが。

するとカイルが悔しそうに言った。

「すみません……子供の足だから、そう遠くへは行っていないだろ  
うと思つて、辺りを探しましたが……いませんでした」

なんてこつた。まさに灯台下暗しだ。

街の方にはかり気を取られ過ぎた。

ここにだつて子供はいたのだ。

2人の監視については不行き届きだったということか……。

ここで悔やんでいても仕方がない。すぐに行動に移る。

「今からくまなく探す！えーつと……カイルは引き続き、王宮を。  
ヨシユアは王宮付近……というかあんたは待機でもいいよ。アンド  
レアはあたしと一緒に街を探す……いい？」

「了解です」

カイルとヨシユアは足早にこの場から去つた。

……ヨシユアが一番辛いはずなのに、そんな表情はおくびにも出  
さない。さすが、といったところか。い

「アンドレア、あたしたちも行きましょう！」

アンドレアは小さく頷く。

そして2人で走つて厩の方へ行つた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「馬引けー！！陛下とアンドレア將軍の仰せだ。早くしろっ！！」  
事態を知った、王宮の人間達の怒号が行き交う。  
なんせ、將軍の子供が行方不明。  
下っ端だろうが、なんだろうが、心配なのだ。

「陛下、ご用意ができました」

「ありがとうございます……アンドレア！行こう！！」

ひらりと馬に跨がると、アンドレアと共に、街の方へ駆け出した。

搜索開始から30分が経っても、一向に見つかる気配はなかった。

万が一、王宮乃至王宮付近で発見されたら、伝令を飛ばすように  
命じてある。

が、その肝心の伝令も来ない……つまり、まだ見つかっていない  
ということだ。

街に行った可能性は低いが調べなければならない。

……と、そのとき、地面に何かが落ちているのを見つけた。

「これは……」

金色に輝く髪飾り。たくさんの花をかたどったものだった。

「シャイのものじゃない！」

今年の誕生日にヨシユアに買ってもらったと大はしゃぎしていた。もちろん、アシュリーナにも見せにきた。

よかったね、と言った記憶がある。

……この街にいる可能性がぐつと高まった。

「アンドレアっ！！シャイはここにいる可能性があるわー！」

「どうしてですか？」

「これ！！シャイが誕生日にヨシユアに買ってもらったってはいでいたからー！！……あの子、随分気に入ってたみたいで、いつも肌身離さず持ってたの」

「では……！アシュリーナさまは向こうを、私はこっちを探しましょう」

「わかった！気をつけて」

そう言って、髪飾りを拾った場所から側道へと駆けて行った。

「あ、あしゅりーなさまだ」

突然後ろから声をかけられる。

アンドレアとわかれて数分も経っていない。

タイミングを見計らったかのように、シャイが出てきた。

「シャイ！何してるの！？」

えへへ、とシャイは笑う。

「ねるとおにごっこしてたの」

「こんな時間に？……嘘は止めなさいよ。お父さん、心配してるわ」

第一、ネルはどこに行ったのか？

そう思ったとき、シャイが首をかしげた。

「なんでうそっていうの？うそじゃないのに……あ、うそ。あんどれあとおにごっこしてる。」

ふうっとシャイが息を吐くと、薄ら笑いを浮かべた。

「相変わらずだね、女王様♪疑い深いったらありやしない」

「あんた……誰よ」

「ええー、心外だなあ……しゃいだよ、しゃい！」

いきなり幼児言葉に変化する。

「あしゅりーなさまがいたからでできたのお……みんなさがしてるでしょ？あたし、おうちにかえる……うひゃひゃ（笑）」

何がおかしいのかさっぱりだ。……でも、この行動に既視感がある。

「まさか……あんたロザ？」

おっ、とシャイが顔を上げた。

「ぴんぼーん♪大正解♪正解者には……賞品ですっ！」

突然、シャイ……否、ロザがアシユリーナに向かってダッシュした。

## 搜索2（前書き）

お久しぶりです……1か月ぶりですかね？

お待たせしました

## 搜索2

一方その頃、アンドレアもシャイ& amp・ネルの搜索を続けていた。

「まったく、あいつらどこに行っただ」

イライラとした口調で吐き捨てる。

彼らを見つけて、無事確保できたら、互いに合図——お互いに向けて鳩を飛ばす——することになっている。これは、民の眠りを妨げないように、というアシュリーナの案だ。

向こうからも何も来ないので、まだ見つかっていないんだろう。

幼い子供の足で、どこまで行ったのか？

誘拐、という可能性もあるが、それは低いと考えられる。

あんな大人数の集まる王宮で、不審な行動をとると目立つこと必至。第一、彼らもバカではないので、大声を張り上げるだろう。それに……父親が父親だからな、とアンドレアはひそかに思っている。王宮には王族、近親者にしか教えられていない抜け道というものはいくつか存在するので、それを使った可能性が一番高い。

流石に砂漠には向かわないだろうから……ということまでこっちに來たのだが、人っ子一人いない。ましてや子供の姿など……

「あれは……？」

道端にうずくまるひとつの影。白い服が闇に浮かんでいる。

「おーい！そこで何をしているんだ？」

そう声をかけると、それがこっちを向いた……ネルだった。

「ネルっ！！みんな心配しているぞ！！」

「あんどれああゝ」

アンドレアの姿を認めたネルは、泣きながら彼に向かって走って行った。

將軍だ、と心の中でつけ加えながら、それを受け止める。

「しゃいがないの！どこにいったかわかんない！……おとおー  
さあーんー！」

「しっ！……ほらほら泣くな」

子供の扱いには決して慣れているとは言えないアンドレアが不器用にあやしていると、だんだん泣き止んできた。

そして落ち着いた頃になると、アンドレアはネルに尋ねた。

「どうしてこんなところにいるんだ？」

少し考え込んだ後、

「おねえちゃんがぼくをつれていったの」

「お姉ちゃん？」

「うん」

シャイのことか……？だが、ネルがシャイのことを『お姉ちゃん』と言ったことは一度もない。

「その『お姉ちゃん』って……？」

にこつと笑って答えた。

「かみのあおいおねえちゃんだよ！」

……誰？

わかった、と一応答えてやり、アシユリーナに鳩を飛ばす……無事（？）ネルを回収したことだし。

「寝ておきなさい。今から王宮に帰るから」

うん、と言った後、ネルはあつ、と小さく声を上げ、アンドレアを見上げた。

「あのね、おねえちゃんがいつてたけど」  
「？」

「きをつけてね、だって」

……？ますます、わからない謎な女だ。

「わかった。じゃあ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

少しすると、胸元ですーすーという心地よい寝息が聞こえてきた。  
これで一安心………としたいところが、依然シャイの行方が分からないのでそうはいかない。

アシュリーナに期待するだけだ。

\*\*\*\*\*

「正解者には賞品を」

そう言っ、て、シャイの体を借りた、ロザがダツシュしてきた。  
「くっ」

アシュリーナが交わすより早く、ロザは彼女に肉薄する。

攻撃される………！

そう思い、ぎゅっと目をつぶったが、その瞬間は訪れなかった。

「……へ？」

するとにんまりと笑顔を浮かべた、シャイの顔があった。

「攻撃すると思った？あはは（笑）ここで攻撃しちゃいけないって言われてるんだよねえ」

ふふん」とすまし顔で言っと、ロザは続けた。

「だから、『賞品』だって！いいものしかあげないから！」

そう言つとアシュリーナの耳元まで行く……いや、無理だった。身長が少しどころか、だいぶ足りていない。

仕方なく、アシュリーナはしゃがんでやった。

すると、今度こそはロザは耳元で囁いた。

「『<sup>ラグナロク</sup>神々の黄昏』は動いた——そう言つて。せいぜい、準備するんだよ」

最後にニヤツと笑つた後、すうつと眼を閉じ、かくんと頽れた。

どうやら、ロザは去つたらしい。

「シャイ。シャーーー？」

「……ふえ？」

あ、あしゅりーなさまだあ、と呟いた後、彼女はまた眠りに落ちて行つた。

どうやら本物らしい。

ふうーつと息を吐くと、丁度彼女の肩に鳩が降り立った。アンドレアのものだ。

どうやらネルは見つかったらしい。

急いで馬に飛び乗ると、アシュリーナは王宮へ駆けて行つた。

## 戦乱の始まり

「伝令！伝令！！これからやってくるであろう、敵の襲来に備えろ！繰り返す——」

ぐったりとした（寝ているだけ）シャイとネルをお迎え係の侍女に預け、アンドレアは夜の静寂に包まれた王宮に触れ回った。

帰り際にあの出来事を伝えたと、それまでの歩調を上げ、馬を全力で駆けさせた。

着いたとたんに、これだ。模範的な將軍の姿だ……と感心しているアシュリーナだが、彼女とて、何もしていないわけではなかった。さすがに、彼女は警護に当たるわけにはいかないが、先鋭の兵士を連れ、見回りをしている。怪しい奴ら——主に『ラグナロク神々の黄昏』を探しているのだ。

彼女らが一番知っているのはアシュリーナだからだ。それを了解済みで、アンドレアも（護衛付きで）送り出してくれたのだった。

兵士A……いや、れっきとした名前はあるのだが、アシュリーナは名前を知らない。

気を取り直して、兵士Aはおもむろに口を開いた。

「陛下……お休みください。陛下は恐れながら……まだ子供です  
ので……」

「対抗できないって？」

「い、いえ……しかしお体に障ってとは思いません」

そうですね、と兵士B（こちらの名前も知らない）。

「ダングラジェの兵士は皆屈強なことで知られていますし、それを自負しております！そう易々と倒されはしません！！」

なんでそう断言できるのか？と問いたかったが、こういう観念に囚われている者は耳を貸さないと思った。でもそれがモチベーションの上昇につながることを考えると言及できないし……と、思い敢えて無視をした。

別にこの国の兵士が弱いわけじゃない。  
自分はこの国の王なのだし、それは分かっている。

が、それを揺らがせるほど彼女らは強い……

「ふうー……ん、ちょっと疲れたかも」  
ほら、言わんこっちゃない、とばかりに兵士A・Bその他諸々は駆け寄った。

「陛下、お休みください……陛下が探しておられるのは女集団で間違いないですね？」

「……ん。まあ、そんなところかしら。じゃあ、お言葉に甘えて少し休ませてもらうわ」

そう言つと、兵士たちが近くにいた侍女を呼び寄せ、アシュリーナを部屋まで連れて行かせる。

……部屋について、大人しく休んでいるわけがないアシュリーナだった。

\*\*\*\*\*

「ふあゝ……こんな時間に敵は来るのか？」

叩き起こされた非番の兵士たちの台詞。

アンドレアからの伝令により、今日、警備にあたっていた兵士たちを起こされたのだった。

中には八つ当たりしているものまでいる。

ぞろぞろと起きだした兵士たちは、のろのろと防具を身に着け、皆が集まる大広間に歩き出した。

既に大人数の集まっている大広間にはアンドレアのみならず、カイルとヨシユアの姿もあった。

そろそろ全員が集まったところになると、アンドレアが口を開いた。

「休憩中のところ起こして済まない。しかし今は緊急事態。しっかり目を覚まして望んでもらおう」

ざわざわとなる大広間。

それを制すように、さらに大声でアンドレアは続ける。

「これから近いうちに敵——『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>が襲来する。敵の数は不明。少なくとも君たちよりかは少ないだろう……しかし、君たちひとりひとりに匹敵するぐらいの実力はある。記憶がある者もいるだろうが、ヨシユア將軍と私も負傷した。こちらも痛手を負ったが、向こうには死者0だ。それに……奴らは女だ」

ざわめきが広がる。

無理もない。敵は女。しかも自慢の將軍を負傷させるほどの實力を持つ。——恐怖が支配する

「今、警備兵を指定の場所に配置してある。主にこの王宮への入口だ。敵はそこから侵入するはずだ――」

「それはあんまりなんじゃない？」

群衆の中から声がした。

「誰だっ！？」

「敵は入り口から入ってくるとは限らないよ……僕みたいに♪」

## 青い髪

「誰だ、貴様……」

場違いな雰囲気存分に出して、謎のーといっても大体どう  
いう奴かは分かるが、とにかく謎の兵士に、アンドレアが静かに、  
しかし威圧的に声をかけた。

しかしそれに応えた様子もなく、謎の兵士はヘラヘラしながら、  
「怒らせた？あ、エラいすいませんな。あはは（笑）」

「……取り押さえる」

ヨシユアが低い声で命じると、一斉にまわりの兵士達が殺到した。

「貴様、誰に向かって口を利いてると思ってるのかっ！！」

「ふざけたことしやがって……！！」

思い思いの言葉を口にし、折り重なる兵士達。

そこでヨシユアが待ったをかけ、静かに歩み寄る。

すると兵士達は、ひとり、またひとりと脇に避けていった。

「いたた……なにしてくれはるん。痛いやない」

「……」

そこには先ほどの兵士が、頭を抑えながら立っていた。

どうやって抜け出したのかは不明だ。明らかに無理だろうに……。

ふと、頭に目を向ける。

そこには丁寧に梳かれた、流れるような青い髪があった。それを  
ポニーテール状にまとめている。

「青い髪……あっ！」

アンドレアは独白した。

ネルを捕まえたときに聞き出した、実行犯の特徴――それは『青い髪のお姉ちゃん』だった。  
目の前の人物も同じ青い髪。そして色白で背格好からも女性と見れる。

誰がどう見ても、犯人だった。

「貴様……子供ふたりを連れ出した奴か……？」

「んー、そうやね。そうとも言えるな」

「そうか……動くなよ、女」

女、という言葉にピクツと反応する。

そしてくつくつと笑い出した。

「女？……ちやうで。俺は……男や」

すつと上着を脱ぐ。色白の肌が露になり、薄く、平坦な胸が覗く。

……男だった。

そして続ける。

「まあ、俺は中世的な顔やって、よう言われるけどな。背もちっちゃいし（そうでもない）。こんなでこんな髪やったら……自慢の將軍さんも間違えるんやね」

髪を恨みがましそうに弄りながら、これ切ったるかとブツブツ言っていた。

「でもなあ……髪伸ばすんにも意味があるんやで？くくつとった意味ないんやけどな」

そう言って髪紐を解いた。髪がばさつと広がる。

「首守るんやって。昔からの知恵や。意味分からんけどな（笑）」  
何がおかしいのかわからないがケラケラと笑う。

周りにいた兵士達は気味悪がって引いていた。

「弓構え」

ヨシユアが命ずる。すると、兵士達が弓を番えた。

うわつと男は小さく声を上げた。そろそろと両手を上げる。

「戦う気はないんや……ホンマや。あんな化けもんみたいなお嬢ちゃんの余興に付き合うなんて嫌やゆうたんや」

その言葉に嘘は見受けられなかった。

本気で青ざめているし、少し震えている。

強気の口調も見る影がなかった。

「しよ、將軍……」

弓を番えた兵士達がちらつとヨシユアの方を見る。

「……気を抜くな。隙を見せるな。油断すれば落ちるぞ」

男を鋭い眼差しで見据えたまま言う。

渋々ながら兵士達は少し弓を下ろした後、その動向を観察するよう  
うに男を見た。

向こうも恐怖にひきつらせた顔をしている。

数分の静けさ。

「アンドレアはいるか……」

その静けさを破ったのはアシュリーナだった。

## 青い髪（後書き）

友達に「アシュリーナってかなり自由人だね」と言われました」3

## 漫才闖入者

「ここにいたのか、アンドレア。結構探したぞ」

場内の緊張感を軽く無視して、アシュリーナが登場した。

声を掛けられた本人——アンドレアは血の気が引く思いをした。  
いや、実際顔は真っ青になった。

（多少気が弱いとはいえ、一応）敵が眼前にいるにもかかわらず、  
狙われているアシュリーナそのものが堂々として入ってきたからだ。し  
かも事態に気付いている様子はない。

「あれが……お嬢ちゃんの敵か……！」

碧髪の青年は薄く笑うと突然叫んだ。

「フィラ！！ずらかるぞ！」

そう叫ぶと、胸元から連結型のスティックを取り出した。慣れた  
手つきで、それを素早く組み立てると、低い位置でそれを振り回し  
た。

彼の周囲にいた兵士たちは、当然足を掬われて転倒する。

そして跳躍——着地したところには見知らぬ人物がいた。

青年と同じような背格好の彫刻のような女性。彼とそっくりだっ  
た。

その白い腕にはもがくアシュリーナがいた。

「は、離せ……！」

「うるさいっ！！黙っとき！」

怜悯な美貌からは予想できない暴言にアシュリーナを含めた、場内の全員が啞然とした。

沈黙を是と取ったのか、彼女はそのままフンと鼻を鳴らし、そっぽを向いてしまった。

「兄さん、帰ろう！疲れた！」

「……じゃ、そういうことで」

「待て、コラ」

アシュリーナが自分を捕えている腕にがぶりと噛みつく。腕の主は悲鳴を上げながら、アシュリーナを振り払った。その隙にアシュリーナは、アンドレアの元へと駆けて行った。

「……ファイ」

「今のは兄さんが悪い」

「な、なんでやつ！？」

チツと舌打ちをする。

「……グズグズしてるあんたが悪いんやあああ！！」

……大量の敵の目の前で普通に兄妹喧嘩を始めてしまった闖入者。

「な、なんだこいつら……」

逆にダングレジェ陣営の方が引いてしまう……。

「こんな時にこんなところで兄妹喧嘩とは……そんなことしてていいのか……？」

アシュリーナの言葉に、2人は顔を見合わせる。

そして、

「確かに喧嘩してる場合じゃないわ……あんたいいこと言った！」  
「敵を褒めてどうする、ファイラ」

「そりやそうだ！サイク偉い！！」  
女性——フィラが兄、サイクに向かってビシッと指差す。

「何、漫才しに来たの？」

今なら捕縛命令を出しても気づかなさそう……

アシユリーナがため息をついたと同時に、ヨシユアがボソッと命じた。

「とりあえず捕縛」

それを聞いた瞬間、一斉に大量の兵士たちがわぁーっと叫びながら走って行った。

それまで喧嘩を続けていた2人が、冷たい微笑を浮かべる。

「「甘いな」」

瞬間的にそれぞれの武器を取り出す。

サイクは連結型のスティック。フィラは透明の鞭。

そして示し合わせたように同時に振る——

2つともリーチが長いため、先頭集団を攻撃するのにわけなかった。

足元をすくわれた兵士たちが転び、そこに後続の兵士が来て……ドミノ倒しになった。

「……おい」

ヨシユアがチツと舌打ちする。そして腰の剣の柄に手をかけたとき――

「気に入った……みんなのこと気に入ったよ。……そやから、いいこと教えたげるわ」

今度は自然に微笑んで、サイクは言った。

## 嵐に告がれる嵐の到来

「いいこと……?」

アシュリーナが眉をひそめたまま反芻する。

いいことって何だ? …… もちろんダン<sup>こっち</sup>グラジェ側にとっていいことなのだろうが……。なんだ、罷か? そうやって油断させておいて…… ガブツ、とか?

そんなこともお構いなしに、へらへらとサイクは薄笑いしている。

「せや、ええことや…… メモするんなら待つとくで（笑）」

「メモしなきゃいけないほど長いことなのか?」

アシュリーナが淡々と答えると、フィラが彫像の如き美貌をくしやくしやにして（ああ、なんてもったいないことだ）アシュリーナを睨んだ。

「冗談や! こんなギャグもわからんのかい!!」

「…… そうか。スミマセン」

…… なんで謝ってるんだ?

そう思いつつも頭を15度ぐらい下げる。

フィラは唇を尖らせたまま「よお覚えとき」と呟いた。

「…… で、いいこととは?」

サイクがわざわざ近寄ってきた。

それに警戒して、アンドレアがずっとアシュリーナの前に立つ。その行動に、フィラがまた何か言おうとしたが、サイクが笑顔で制す。

そしてにこつと笑いながら言った。

「敵の数は50……あ、もちろん主要ね。下っ端合わせたら……うーん、1000ぐらいじゃない？ねえ、フィラ？……あ、知らない？ん、まあそれぐらいちゆうことや。そいで……お嬢ちゃんは気まぐれやけん、どうなるかわからへんのやけど……1週間のうちに絶対来るよ、多分」

「サイク、矛盾してるやないの！」

「うるさいねん！！今いいところやるが！！」  
げんこつで反撃。

「痛い！！ふ、ふざけ……ぎゃー！！」

さらに攻撃。もう何をしに來たのかさえわからない（もちろんこちが）

「……サイクとやら。もうそこでやめにしたまえ」

カイルが、なんだかふざけた調子で言った。

サイクはそこでピタツと止まる。

「せ、せやな……大人気ないわ……」

「あんたに大人気もクソもないわ……痛い！！」

「うるさいねん！！」

「あんたらが一番うるさいわー！！」

アシユリーナが叫ぶと、再び全動作がストップする彼ら。

互いに睨み合いながらサイクが再び口を開く。

「作戦はなあ……主要50人が2人ペアになって攻撃を仕掛けてくることや。下っ端連れてなんか攻撃できんから、下っ端は20人ぐらいで固まるらしい。よくは知らんけど、そんな感じやった」

「……マリアは？」

今度はフィラ。

「知らん。あの人は気まぐれやけん、戦闘に参加するかもしれんし、せんかもしれん。そやけど……来ることは間違いあらへん。……頑張つて探してみ」

目線をそらさず……睨み合つたまま言つ。

ふとサイクがこっちを向いた。

口元には微笑が張り付いている。

「俺らも多分行くことにはなるんやろうけど……今回の恩に着て、攻撃せーへんといてな？」

一同哑然の発言。

「痛いのは嫌やけど、死ぬのはもつとあかんからな……俺らは流浪の民。別にお嬢ちゃん（この場合アシュリーナ）に恨みがあるわけでもないねん。なんか……知らん間にこうなつただけやけんな。よろしく頼むで」

ぺこつと頭を下げると、彼はそのまま飛び降りた。

「な、何してんねん！待ちや！！」

悪態をつきながら、フィラもそれに続く。

――嵐に告がれた嵐の到来。

嵐に告がれる嵐の到来（後書き）

主人公……多分アシュリーナです。

というか題名が……

## 作戦

「……はぁー」

アシュリーナは思わず溜息をついた。

それもそのはず、謎の双子——サイクとフィラの告げていった宣戦布告……のようなもの。しかも、敵に自陣の様子を話すとは……裏切りするならこっちに付けばいいものを。

そんなことを思いながら、うーんと小さく唸る。

「最後までわけのわからん連中でしたが、いい情報を引き出せましたね」

「『引き出せた』というか、『訊いてもないのにぺらぺらと喋ってくれた』の方が正解だと思うな、カイル」

「いや、まあ、それはいいですよ」

カイルがテキトーに返す。

「それより……折角敵の情報を引き……聞いたので、作戦を立てた方がよろしいのではないですか、アシュリーナ様？」

アンドレアがそう提案すると、アシュリーナは満足そうに、うんうん、と頷いた。

「やっぱり、アンドレア最高！……そうね、作戦を立てなきゃね……」

アシュリーナはその小さな顎の下で指を組んで考え始める。

「今回はどういう方向で行きたいんですか？」

アンドレアが頃合いを見計らって尋ねると、アシュリーナは徐に口を開いた。

「不殺」

「不殺」……」

「不殺」！？」

アシュリーナの声が聞こえた範囲の人々が、同時に声を上げる。

そしてははと、笑いが広がっていった。

「あ、アシュリーナ様、それは……」

アンドレアも困ったような笑みを浮かべている。アシュリーナは眉間にギョツとしわを寄せ、低い声で言った。

「真剣なんだぞ。なんで笑うんだ！」

ヨシユアがそれに答える。

「アシュリーナ様。貴女もご存じの通り、我々はこれから『神々の黄昏』と刃を交えるのです。これは“お遊び”ではなく“血の流れる戦い”なのです……お気持ちは分かりますが、おそらく、いえ、絶対に無理でしょう」

「やってみなきゃわからないでしょう!!」

アシュリーナが顔を真っ赤にして叫ぶ。

ヨシユアのみならず、その場にいたものは皆、びくつとなった。

そしてアシュリーナは小さな、しかししっかりとした声でいった。

「我らがダングラジェの祖、デイルナミア王は、かつて先祖の地であり、悪しき者に侵略されたこの地を奪還した。その時の戦いの時に何とおっしゃられたか知っている？『我に続け。我が行く道に狂い無し。我に続く汝らにも然り』と。彼は無血奪還を誓い、実際に成しえたと言っわ。……別にデイルナミア王の真似事じゃないけど……出来ないことではないのよ」

「しかしそれはあくまでも伝承。もう300年も前の話ですよ？」  
ヨシユアは淡々と返す。

「それに上辺では“無血”乃至“不殺”が成しえられたとしても、深層部では何かしらの犠牲があるのです……それだけは」

「わ、わかつてるわ……！でも、これは決して相手を殺さない、ということに意味があるのよ。殺したら……きっと彼女らと同じだわ」

「同じ？」

ヨシユアが首を傾げる。

「彼女らは激情の赴くままに人を殺し、幾多の国を滅してきた。あの『マリア』の命令に従って……自分の意志は全くない。ただの殺戮人形のように過ごしてきたのよ。」

私たちはそんな彼女らを迎えうつ側。愚かな行為から目を覚まさせるべきじゃないの？それなのに敵だからって殺すなんて……おかしいわ。見境もなく人を殺すなんて……彼女らと同じじゃない」

「そんなことはないですよ」

カイルが微笑みながら言う。

「『見境もなく人を殺す』のではなく、『自分を守るために敵を迎え撃つ』。『欲望』ではなく、『正義』なのですよ」

「じゃあ、私はそんな正義はいらないわ」

アシュリーナが鋭い目つきでカイルを睨む。

「そんな『正義』なんて捨てます。いらない。必要だわ……それなら『欲望』のままに人を殺していく方がましよ」

「ひ、姫さん……！」

カイルが慌てふためく。

そして救いを求めるようにヨシユアに目を向ける。

ヨシユアは苦々しげな表情で口を開く。

「……では、最善策、というのを考えましょうか、アシュリーナ様」

「最善策……？」

アシユリーナは顔を上げる。

「なるべく被害が出ないような戦闘をする、という策です。戦争においては犠牲が出るのは仕方ありません。ここにいる兵士たちのうち、何人……いや、何十人は死ぬかもしれない。それに私も死ぬかもしれないし、アシユリーナ様。貴女も命を落とすかもしれない。それを覚悟の上で貴女は『神々の黄昏』<sup>ラグナロク</sup>の宣戦布告を受けたのですよね。ならば、出来るだけ被害を最小限に抑える方法を」

「……ヨシユアには策があるの？」

アシユリーナが恐る恐る訊くと……ヨシユアが一瞬だけニヤツと笑った。

## 証（前書き）

60話目です。

いやぁ……前回から約1か月経ってますね、すみません。

リア重が重なりまして……（汗）

## 証

「あーしんど……なんでこないな遠いねん……」

馬上のサイクが頬を膨らませ、不満を漏らす。

「……あ？疲れた？そないな言われてもなあ……俺も疲れてんねんで？なん？水が欲しいんか……とりあえず休ま……危ないやろがっ！？」

サイクが独り言を言ったと思うと、馬が突然ギャロップする。

「……兄さんが変なこと言うからさ」

フィラがやれやれと頭を振る。するとサイクが必死に馬にしがみつ きながら叫んだ。

「ちやーうー！独り言やない！！こいつに話しかけてやっとなやああー！」

「こいつ……って馬？」

「せや。というか『馬』ちやう。『ラスラ』っつーんやで」

ようやく大人しくなった馬——もといラスラを撫でながら言う。

「はあ……」

「よーし、このあたりで休憩や。方角を見失わないように」

ラスラをとことこ歩かせながら、サイクはきよるきよると辺りを見わたし……目印となる、布の巻かれた棒を砂に埋めた。

ここは砂漠。

いつ天候が変わるかも知れない。

特に風。熱い風が吹き抜けるここは、いつ砂嵐が起きるかわからない。

砂嵐が起きたら、当然視界は遮断される。

だから巻いた布が風になびき始めたら、退却するわけだ。

テントを張り終えた二人は、お互いの馬に飼葉をやり、水をやる。それから日陰に入れて休ませてやる。

そして自分たちも少し干し肉を齧り、水筒から水を飲む。

「あー、お嬢ちゃんとかから水持つて来とつて正解やったな……」  
ダングラジエを発つて早2日目だが、もう2本は空になっている。  
3本目であるこの水筒も半分はゆうに切ってる。

それに対して、フィラは節約して飲んでいるらしく、やっと1本  
目が空になったばかりだ。

「ちゃんと飲まないと脱水でドライアップ渴き死にするぞ」とサイクに脅され  
てはいるものの、あんまり飲まないようだ。

今日も2口3口飲んだ程度で、蓋を閉めてしまった。

サイクはそれを見逃さなかった。

「おい、フィラ。ちゃんと水は飲まなアカンぞ。……俺たちは砂  
漠の民ではないんやから」

「……わかつてる」

「というかアシュリーナちゃんとか、ええとこやなあ」

不意にサイクが言くと、フィラは呆れたような顔をした。

「は？なんで？」

「だってなあ……ほら、カイルとかいう將軍おつたやろ？あいつ

の呼び方『姫さん』やで？それにあと2人の將軍たちも『アシュリーナ様』って呼び方」

「……だから？」

「しかもな。あの雰囲気。何あのワイワイとした感じ。あれが戦いの前の王宮内の雰囲気か？」

「……ちやうな。でもなんでそれが『いいところ』ってしていることに繋がるん？」

いぶかしそうな眼。それでもサイクはどこ吹く風。

「……あれはアシュリーナちゃんを信賴してるってことちゃう？」

「いやあ……王様が子供だからでしょ」

「そうなんかなあ……」

サイクはごろんと横になった。

途端、風が吹き抜ける——サイクとフィラの長い髪がなびいた。

青い髪……その合間から黒い髪が覗く。

お互いの様子を見て、

「「あ……髪の色め直しせなアカンなあ」」

と呟いた。

「なあ、フィラ……俺たちこのまま海に帰らんか？」

サイクが唐突に言うのと、フィラは一瞬顔をしかめた。

「な、なんでそないな言うん……？」

「おまえも気づいとるんやろうけど……『マリア』ちゃんとかいうお嬢ちゃんの周りに居る先鋭のお嬢ちゃんたちはムスリの娘やろ？そんなら俺たちは敵視されてること間違いナシや。アウエー感ハンプないやんか……」

ホントは戻りたくないんや

そう言いながら目を閉じる。

自分たちは元々は『海の民』と呼ばれる種族。

どこの国にも属さず、仲間で海を舞台に行動する——海賊だった。

ムスリにも何回か襲撃をしかけたことがある（らしい）。

しかし、自分たちがまだ幼いころに……仲間は殺された。

犯人はわからない。一家どころか一族全滅だった。

《狩り》の仕方は分からない。

自分たちの知り合いはもういない。

けれど——この青い髪だけが唯一の繋がり。

昔から染め続けた青い髪。これが『海の民』である証。

また髪を染め直さなくては——このままあの不可思議な娘の元に行くよりも——そして再び『血』を見るよりも——

「と、とりあえず、これは落ち着いてから染め直そか」  
フィラがしどろもどろに言う。  
それに、せやな、とだけ答えておいた。

「もうそろそろ着くかな……？」

「何が？」

「あの双子が」

「あの——『海の民』が、か」

「うん」

「もうあいつら……いない」

「なんで？」

「何を考えてるのかわからない」

「気持ち悪い……あの青い髪を見ただけでいらいらする」

「特にサイクの方が腹立たしい」

「あら、フィラの方だって。自分の顔がちよつときれいだからつて鼻にかけてるわ」

「……そ、それだけ？」

「……リザ。あんたは宗主様にお話ししてきなさい」

「ぼ、ボクが！？」

「うん、『ボク』が」

「えーいややあ……」

「じゃあ、私が行ってくる……『海の民』の殺害許可を」

ピシッ

「だ、誰だ!？」

「あ……! 『海の民』!！」

「早まるなっ! 馬で逃走してる。追いつけない……!」

「2日間ずっと馬を走らせてるんだ……そう遠くへはいけないはず」

「そうね——どうせ、私たちも明日出発。追いつけるわ」

「うん……3日後。ダングラジエは……火の海」

「『海の民』も海に返せたら良かったのに」

「まあまあ……とりあえず、寝ましよう」

「どうせあいつらも生きて故郷の土は踏めない」

「……踏む故郷がない」

「あ、そうだったわね……あはは」

ムスリの娘たちは唄い、踊る。

静かに更けていく、夜。

……確実に《狩られる》……!!

## 突然の訪問（前書き）

いけませんなあ……

最近京極さんの本を読んでるから、書き方が京極さんっぽくなってしまった（汗）

特に「――」の使い方とか。

## 突然の訪問

あの夜から3日後――

アシュリーナは優雅にお茶を啜っていた。

周りには、剣を振るう者、矢を射る者などなど、鍛錬している兵士達。

――彼らは全員、ヨシュアの作戦に従って行動している。

遡ること3日前――要するにあの夜に戻るのだが、アシュリーナはヨシュアから驚くべき作戦を聞いた。

「これは……できる」

そう確信した彼女は、すぐさま兵士達に命令を下し、準備をさせたのだった。

「陛下あ……もう疲れましたあああ」

兵士たちがまさに疲労困憊というような表情でこちらを見てくる。

アシュリーナはもう一口お茶を啜る――

「そう？じゃあ休憩していいよ」

「あざーっすー！」

「『あざーっす』じゃねーよ！陛下に向かって何言ってるんだよっ！？」

「あ、そうだね……スンマセン」

「いや、気にしてないからいいよ。それにだけてた方がこっちも楽だしね」

彼にウィンクしてみせ、アシュリーナは立ち上がる。

「あーお茶おいしかった……私も何かやるかね」

アシュリーナは立てかけておいた剣を手取る――

「……むう」

どうも剣を振る気になれない。……眠い。

今日は珍しく過ごしやすい温度で、先ほどまでそのぼかぼか陽気の中お茶を啜ってたのだから……

しばらく、その細身の白い剣を弄った後、再び立てかけた。

「ふあああ……というかいつになったら『ラグナロク神々の黄昏』は来るの

……？寝ちゃうよ」

小さくあくびをしながらそんなことを言ってみる。

するとアンドレアが視界に入る。

彼もヨシユアの命というか指示というか、その類のもので、現在進行形で動いている。

「毎日毎日よくああやって、兵士たちに喝を入れれるなあ……」

アシュリーナは優しく微笑む。

やっぱりアンドレアは軍人気質なのかもしれない。

家で女の人の世話をする姿はとてもじゃないけど想像できない。

「まあ……武功を上げれば、誰かがお嫁さんに来てくれるんじゃないの……ってアレ？話が違う方向に飛んでる……」

もう一度、ふあああつと伸びをしながらあくびをする――

「お嬢ちゃん!!」

宮殿正面から叫び声が聞こえた。

「……は？」

あの声には聞き覚えがある……そう思い、そおつと剣に指を滑らせながら、ゆっくりとした足取りでその方向へと向かう。

「お嬢ちゃ……って、男には興味ないねん！離れんかつ!!」

「おつまえ、どう見ても不審者じゃないかつ！そんなやつ、ここに入れれるかつ!!」

「離せつつってんだろーがつ!!聞こえんのか、こんにやろー（怒）」

「兄さん、大人気ないねん！もっと誠意を持ってやらんからこないなことになるんでしょーがあ」

「……相変わらずだね、君たちは」

アシュリーナはその声の主――青い双子に呆れたような声で言った。

「あ、お嬢ちゃん！こいつら邪魔やねん。退けてや」

「……いやあ、彼らは私の忠実なる門番兵だし。はっきり言つて、異物はあんたたちでしょ？」

「そ、そないなと言わんといてえ……（汗）」

ふと彼らに目を向ける……この間来たときは汚れひとつない、綺麗な白い服だったが、今は全然違う。泥だらけで、ところどころ血が滲んでいる。

「……何かあったの？」

サイクはすつと表情を変え——唇を舌で少し舐めて、口を開いた。

「俺たちは——狙われている」

「……は？」

アシュリーナは目を大きくする。

「だ、誰に？」

「あいつらよ！ムスリの猫よ……！」  
と、フィラ。

「ムスリの猫……？あ……！」

——『ラグナロク 神々の黄昏』だ

「な、なんで？あんたたち、仲間じゃなかったの？」  
アシュリーナは抑えられているサイクとフィラの目線に合わせて屈む。

「……所詮は拾われた人間やけん……最初からそんなつもりはなかったんや」

フィラが悔しそうに顔を歪める。

——？——利用して殺す

奴らがやりそうな手口だ。

すると突然手をガシツと掴まれた。

「！？」

サイクだった。

「なあ、お嬢ちゃん……！無理やってわかってるけど……助けてくれへんか？俺は無理でもフィラは、妹だけは助けてやってくれんかつ！？」

「き、貴様、アシュリーナ様からその手を離せっ！」

兵士がさらに強くサイクを抑える。すると微かにうめき声が聞こえ、ゆっくり握っていた手が離れていった。

「なあ、助けたってや……お願いや」

「兄さん！」

サイクの切実そうな声にフィラの悲鳴が重なる。

「う、うちは嫌や！！兄さんと離れるなんて嫌や！」

「黙れフィラー！！」

サイクが一喝すると、フィラは目を丸くしたまま「兄さん……？」と漏らした。

すると彼はすうっと目を細める。

「綺麗ごとかも知れへんけど……兄として、『海の民』の生き残りとして、お前には幸せになって欲しいと常に思ってきた。けんど……」

サイクはフィラの手を優しく握る。

「俺と一緒に居つては無理や。おまえはちーと気の強いところもあるけど、いい子やし、優しいし。俺と一緒になんかおると……絶対幸せになんかはなれん！だか……？」

サイクの言葉が止まる——フィラは泣いていた。

「嫌やあ……お兄ちゃん……止めて……」

あの彫像めいたフィラはこういう風に泣くのか……

目の前での兄弟愛を見てアシュリーナは考えるような風を見せる。

「へ、陛下……？」

彼らを抑えている兵士たちが不安そうに声をかけてきた。

「ま、まさか？」

アシュリーナはぱつと顔を上げる。

「よし、こうしようじゃ」

「アシュリーナ様あああ……！」

せつかくいいところだったのに……

そう思いながらアシュリーナは声の方へ首を巡らす……と、そこには走るアンドレアがいた。

「あ、アンドレア。丁度いいところに来たな」

アシュリーナが微笑みながら立ち上がるって迎えると、アンドレアは血相を変えて早口に告げた。

ラグナロク

「ベレムに——『神々の黄昏』一団がやってきたとの報告！

すぐに出兵の用意を——！」

「……は？」

「ま、マズイ……！」

アシュリーナの笑みは凍りつく。

そして、後ろでサイクとフィラが小さく悲鳴を上げた。

## 双子の雇用計画

『ラグナロク  
神々の黄昏』との対戦間近！

そんな一報がダングラジエの王宮を駆けめぐる――

「あ、アンドレア、それ本当なの？」

すると、その報せを持ってきた彼は憤慨したような表情を作った。  
「どうして、嘘をお伝えしなくてはならないのです？ 斥候の報告  
通り……奴らはすぐそこまで来ています」

そこまで言い終わると、ちらとアシュリーナの背後で固まってい  
る2人に目を向ける――

「な、なんでおまえらここにいるんだっ！？」

「え……な、なんとなく」

サイクが気圧されたように答えると、アンドレアはすかさずツツ  
コミを入れる。

「『なんとなく』じゃないだろう！ おまえら『神々の黄昏』の  
一味なんだろう？ なんでここにいるんだ！？」

「まあまあアンドレア……あ、君たちもご苦労さん。放してい  
いよ……彼らは私の客人だから（多分）」

「し、しかし陛下。將軍のお話によると、こやつらは敵……？」

「ん、そうだね……いや、厳密に言えばそうだっただね。……と  
いうか勅令として、早くみんなに知らせてきて！ 大広間にて集合  
つて」

「はっ！」「」

勅を受けた彼らは、アシュリーナに向かって敬礼すると、駆け足

で兵舎の方へと向かって行った。

「……で、アシュリーナ様？」

「アンドレア、本当に丁度いい時に来たね」

アンドレアが追及しようとしたのを、自称天使の笑みでアシュリーナは制す。

そして、サイクとフィラに立つよう促す。

「な、何をする気ですか……？」

彼は主の（天使の）笑みにはごまかされない。しかし不安そうに訊ねる。

「サイク、フィラ。あなたたちの实力を知りたいわ……こいつに全力で突撃」

アシュリーナはすつとアンドレアを指さす。

当のアンドレアは面食らった顔をしていた……無理もないが。

「な、な、な、なんですか、アシュリーナ様！？突然！？敵が迫ってきているというのに！？」

「大丈夫。一回勝負だから。アンドレアは2人の攻撃を受け止めればいいだけだから」

まるで他人事のようにアシュリーナはさら々と流す。

「お嬢ちゃん……もし俺たちがそれを放棄したらどうないするんや？」

サイクもよく事情を飲み込めていないらしく、困惑顔で尋ねる。  
それにアシュリーナは笑顔で答える――

「え？ドライアップしてもらっけど」

「あ、アシュリーナ様。そんなことを笑顔で言うもんではありません」

「えーホントのことだし……それに、向こう……というかエリたちには用済み宣言されて、殺されかけてたんでしょ？別に砂漠に放り投げるわけじゃないんだから……さっきの要件を飲み込んでくれたら、それなりのことはするつもり」

「……サイクとフィラが裏切られたということですか？」

「まあそないなところや」

フィラが呟くと、アンドレアは顔をしかめた。

「奴らのやりそうなことだ……わかりました。やりましょう」

「で？」

「俺らもやるわ、なあ、フィラ？」

「ま、まあね……うちだって命が惜しいから」

そう言うのと、サイクとフィラがああの連結型の武器を各々取り出す。そしてアンドレアに向かって構える――

「手加減してやつ！」

サイクとフィラが肉薄しながら、同時に透明の武器を振るう。

アンドレアは迫りくる彼らをただじっと待ちながら、徐に腰の剣に手を伸ばす。

「いや……メンツにかけて無理だな」

そう言った刹那。

彼の剣は銀色の軌道を描きながら、横に振るわれる。

パン――！

「「あ！」」

サイクとフィラは小さく悲鳴を。武器を落としたのだ。

「あちゃあ……」

サイクはぱりぱりと頭を掻きながら、妹の分の武器も拾ってやる。そして横で見っていた、アシュリーナの方を見る。

「いやぁ……俺らお払い箱やな？」

「いや、そうでもないけどね」

アシュリーナが答える前にアンドレアが口を開いた。

それを聞いたサイクがえっと彼の方を振り返った――

「そんな細くて軽い武器で――よく私の手を痺れさせたな」  
その実、アンドレアは利き手の右手をプラプラ振っている。  
「結構痛かったぞ……見た目によらず、おまえら強いんじゃないか」

ぽかんとしていたサイクだが、ニヤツと笑うと

「だから恨まれたんかもね」  
嘯いた。

そして、双子は笑った。

「で、アシュリーナ様。彼らをどうしますか？」

アンドレアは彼女に話を振る。

アシュリーナは小さく頷いて、

「戦力確保でしょ」

と微笑んだ。

「今日付けであんたたちはダングラジェの將軍、アンドレアの部下となりましたーぱちぱち」

「はいはい、ありがとうお嬢ちゃん」

サイクはまた笑う。

するとフィラがアシュリーナに近寄ってきた。そして耳元で囁く。  
「あんた……昔良くしてくれた、うちの仲間のお姉ちゃん見た

「いやな」

アシュリーナはびっくりして彼女を見ると——フィラは赤面していた。

「ま、お姉ちゃんの方が随分美人で、性格もよくてすべてにおいて抜群やったけどな！」

「それはどうも」

アシュリーナがそう言うのと、フィラは少し笑った後、サイクの元へと駆けて行った。

「ママー！ミュウちゃんと遊んでくるー」

5歳ほどの女の子が奥の台所に立つ母親へそう叫ぶ。すると、母親はゆっくりと顔をのぞかせた。

「遅くまで遊ばないのよ、ローラ？気を付けていつてらっしゃいね」

「はい」

パタパタつと玄関を出て、彼女は友人の家へと急ぐ。

「あ、ローラちゃん！」

「さあ、ミュウ。気を付けて遊んでくるのよ」

「うん、ばいばいママ」

ミュウは母親に手を振ると、走ってきたローラと手をつないで遊び場へと向かう——

「さあ、行こうか。あの娘の待つ王宮へ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3520q/>

---

Legend of Girl ～少女の伝説～

2011年12月18日12時49分発行